
忘れられない思い出

MENON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れられない思い出

【Nコード】

N0277N

【作者名】

MENON

【あらすじ】

一人の大学生とそこで出会った同じクラスの女の子、そして

バイト先で出会う年上の女性、とある夏の季節から始まった

忘れられない思い出の恋愛物語です

『ある夏の日、一人の青年の恋が終わった。

でもそれは終わりではなかった・・・

入れ違いで出会った一人の女の子

彼女との出会いは彼に初めての温もりを与えた

しかし・・・

二人に待ち受ける未来とは・・・』

く夏の出会いと別れく（前書き）

このお話はオリジナル作品と書きましたが、私のちょっとしたエッセイでもあります

ですが、ここに書いてある事の全てがぼくの事ではありません

ぼくが経験した事に少し手を入れた物語になっています

もちろん出てくる人物名等は実際には存在しません。

ぼくのエッセイと言いましたが大まかな流れがそうです

こまごました点等はオリジナルです。

まあこれは一つの恋愛物語だと思って読んでいただければ嬉しいです

誤字・脱字・構成などに不満があるかもしれませんが、気を長く
して見てください

お願いします

「夏の出会いと別れ」

「今日もあつついなあ〜本当に」

「ねえ〜暑いねえ〜」

「どっか涼しいところ行きたいよなあ〜」

「涼しいとこねえ〜・・・でも今日は翔バイトじゃん!!!!」

「プールのバイトなんだから涼しくなるから良いじゃんかあ〜」

「なあ〜に言っただよ〜涼しいたってバイトだぞバイト、遊びじゃないんだぞ」

「でもさ〜私みたいにこれから暑い中を過ごすわけじゃないから良いじゃんか〜」

「まあ〜それを言われたら反応できないんだけどね・・・」

「でしょ〜」

ぼくの名前は本城 翔平で、ほんじょうしやうへいぼくと一緒に居る彼女は

きくまあおい
菊間 葵

ぼくたちは今大学の3年生、葵とはこの学校で知り合った

ぼくが2年の時同じクラスの女の子と付き合うことになり、彼女が
ぼくにこう言った

5

「今月お祭りがあるんだけど一緒に行かない？」

「お祭り？」

「そう、お祭り」

「へえ、そうなんだ！―どうしようかなあ―」

「ええ、行こうよ」

「うんゝわかったよゝ」

「じゃあ決まりね」

半ば強引に決められた感が大いにあるんだけど・・・

ぼくが悩んでいたのには理由がある

それはぼくの通っている大学はぼくの家から早くても2時間はかかるからだ

電車とバス、車で通っているわけだが、非常にめんどくさい・・・

しかもその行く日というのはバイトがある日でもある

プールのバイトに行ってその疲れた体と塩素水に浸かったその体のまま2時間もかけて

行かないといけないのだ・・・

正直行きたくない・・・

まあ約束をしてしまったのだから仕方がないのだけど・・・

ぼくが当時20歳の時彼女は1つ年下の19歳

まあ大学でしかも同じ学年で年が違うのには2つの理由がある

ぼくが浪人を1回したか留年したかの2つ、ぼくの場合は後者である

しかも大学の1年を2回した・・・

まあそのせいでぼくと同じくして入学した面々は学年が1つこ上なのである

そんなことで2年目の1年生としての学校生活はあんまり良いもんではなかった

あまり周りとは話さなかったので友達もほとんど居なかった

2年になったある日なぜか彼女ができた、まあ自分でも驚いた・・・

で、祭りに行く話しになったのだが、ぼくは肝心な事を忘れていた

その祭りの日が平日であるということだ・・・

平日なのでもちろん大学はある、朝7時半位に起き8時半前には家を出た

その日は授業があまりなかったので15時には終わるそれからすぐさま

地元に戻ってきてプールのバイト・・・

20時にはバイトが終わりそこからまゝた2時間の移動

この時ほど、かの有名なネコ型ロボットのあの“ドア”が欲しいと思ったことはない

現地に着いた時にはもうへろへろだったのは言うまでもない・・・

「お疲れ様、大丈夫？」

「なんとか・・・」

学校に集合ということになっていたので

行くとそこには3人が待っていた

一番に彼女が声をかけてくれたんだけど

あとの2人が誰なのかいまいちわからない

男の人と女の人

女の方の方は見覚えがあるような無いような...

そんな事を考えていると彼女がぼくに声をかけてきた

「翔君こちらは私の友達の菊間葵ちゃん、もう一人が葵ちゃんの
彼氏」

なるほど世に言うWデートってやつね・・・

この日ばかり葵が初めて話した日なのだ

「初めまして、菊間葵と言いますよろしくね」

「ああ、初めまして本城翔平と言います」

その後葵の彼氏さんとも挨拶を済ませた

「よし、一通り自己紹介も終わった事だし行きますか」

「了解（行くう）」「」

彼女のかけ声とともにぼくらは祭り真っ盛りの街に繰り出したのだ

「さあどこに行く」

「ぼくはこの祭り初めてだからみんなに任せるよ」

そう言うと、まあいろいろ回った・・・

疲れた体には堪えるほどに歩いた・・・

それはまあ良いのだけど

なぜかその日ぼくは彼女より葵と話した記憶の方が多かった

まあ実際葵と良く話した

その日初めて話したのにあれほど息があつたのは初めてだった

「ねえ翔君私のこと本当に初めて？」

「うん？葵ちゃんのこと？」

「そうそう」

「うん、ごめんわかんない」

「そつかあ、まあまたその内わかるよ」

そう言うと葵は笑顔でぼくを見た

その日ぼくは終電近くまで遊んでいて帰ったら深夜の2時を回っていた・・・

あの日こそしんどかった日はない・・・

まあ何よりの喜びは次の日学校が休みだったって事だ、何時まで寝てたか忘れたけど

彼女からのメールにも気づかないほど寝ていたみたいで

彼女はメールが返ってこないからって少々ご立腹だった

「あの日は大変だったね、翔」

「どうせ人事だと思ってるくせに……」

「ちょー！ちょつとひどくなーいその言い方」

あの日を境にぼくと葵は物凄く仲良くなった、気がする

実際その後日、葵はぼくと同じクラスだったって事が判明

その時ぼくは納得した、葵が『ねえ翔君私のこと本当に初めて？』

あの時も葵は言っていた

ひどくな
い

「それにしても葵がまさか同じクラスやと思わなかった」

笑いながらぼくは葵に話しかけた

「私は知ってたよ、翔私の前の席だったしね」

「じゃあなんであの時にそう言わなかったんだよ」

「いや！気づくかなあ〜って思ったんだけどさ〜翔ぜんっぜん気づかなくてさ」

「心の中で爆笑してた」

そついうと葵は思い出したかのように笑っている

「なんて嫌味なやつ」

「ニヤハハ」

「お前はネコか！！！」

あの日、祭りの日を境にぼくと葵は学校に居る間ずっと行動を共にするようになった

ぼくにも葵にもまだ彼氏、彼女が居るにも関わらずぼく達はがクラスが同じという

ことで授業中の席から昼飯を食べるのも帰りのバスもずっと一緒に行動していた

まあそんな事を許すわけもない人が一人居るわけで・・・

「翔君！！！！最近葵とずっと一緒に居るよねえ」

「うん！まあね」

「私より一緒に居るよねえ」

「え！そうかな？だってさークラス違うから仕方がないじゃん・・・」

「

ぼくと彼女はクラスが違う、ぼくの大学は一年の時は名前の五十音順で一組・二組

と決まっているのだけど、二年になってからは実力差で組が分かれるのだ

彼女は頭が良かったので一組、ぼくと葵は二組になっていた

ぼくは、留年するくらいなので頭は悪い・・・

葵の場合はめんどくさい・・・らしい・・・

たぶん本気を出したら一組に入れるのだろうけど、そんなに勉強し
たくないらしく

手を抜いているらしい・・・

以前ぼく達が二年に上がって少したった時に葵とこんな話をした

「今日の実力判定テスト全然わからなかった」

「葵はどうだったの？」

「うん？ああ、テストねえ、まあまあじゃない・・・」

「まあまあかあ」

「んじゃ模擬採点しない？」

「ええゝめんどくさい」

「でたでたゝ葵の口癖」

「だってゝめんどくさいんだもん」

「はいはい!!するよ」

しぶしぶ始めた模擬採点、採点を初めて10分経過したあたりから

張り切って始めたばくと、めんどくさいと言っていた葵のおのおの各々の顔が

逆転していったのは言うまでもない・・・

「翔!!!!あんた頭悪ゝ」

ケラケラと笑う葵を見ながら自分の頭の悪さを悔やんでいた・・・

「じゃあ!!!!じゃあ葵はどうなんだよゝ」

「うん!ああゝこれだよゝまあまあじゃないかな」

そういってぼくに採点した紙を差し出した

「な．．なな．．なんじゃこれ！！！！！！！」

「そんなに酷くないでしょ？」

「いや！！ひどいどころか！！！！」

ぼくは葵が差し出した採点用紙をみて愕然とした．．．

「葵！！この点数でなんで二組なんだよ．．．」

葵の点数は一組にも匹敵する．．．いや一組でも上位に位置する点数だった

最低の点数ですら80点代．．．最高点なんて90半ばの点数

「ねえ！まあまあでしょ」

笑いながらぼくを見る葵

わらつとる・・・こいつまあまあとか言いながらわらつとる・・・
これが計算なのか天然なのか・・・それを聞くのも怖いくらいにわ
らつとる・・・

「まあまあって、完全にぼくのこと心のどこかで笑ってるだろ？」

「なんで？そんなこと無いよ・・・」

「じゃあなんでこんなに良い点とってんのに一組に行かないんだよ
」

「だって一組なんて勉強バカばかり居るしさめんどくさいし
」

「それに翔が居ないもん」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

やられた、不意打ちとはこの事だ、変に心臓がドキッとしたのを感じた

『こいつ完全におちよくってるな』

ニカッと笑う葵、葵のこの笑顔にはぼくは勝てない、卑怯なんだよね、その笑顔

「ねえ、翔」

「な・・・なんだよ・・・」

「ドキッとした？」

またまた満面の笑み・・・

『うぜーにいつうぜー』

「し・・・しねえよ」

「ええー絶対したと思ったのに」

「葵ーそんな事言つてて良いのかよ？」

「なにが？」

「なにが？じゃねえよ」

「人のこと言えねえけどさー応ばくら彼氏も彼女も居るんだぞ・・・」

「だから？なによー別に良いじゃん」

「仲良くしてるからってなんか悪いの」

「いやいやぼくらの場合常に一緒じゃん、下手したら恋人より多く一緒に居るじゃん」

「まあ確かにね」

「でしょ、これって案外まずくない？」

「な〜に〜翔は私と一緒に居るのが嫌なわけ〜？」

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ〜」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「翔君！！！！」

「もう！！！！翔君ってば」

「え！！！！なに？」

「なに？じゃないわよずっと呼んでるのに」

目の前に「機嫌斜めの彼女がぼくの顔をまじまじと見つめていた

「……ごめん……ちょっとぼっとして……」

「ねえ！！！！」

「うん？」

「また、葵のこと考えてたんでしょ？」

「え！！！！」

「もう!いい!いい!」

「翔君、もう私我慢できない・・・」

「何が?」

「翔君と葵が楽しく話してるのがもう私には我慢できない」

「そんなに、葵が良いなら葵と付き合ったら良いんだよ!!!」

「何言ってるんだよ、それに葵には彼氏が居るじゃないか」

「葵、もう独りだよ・・・」

「え?それどういふこと・・・」

「そのまんまの意味だよ・・・あの日あの祭りの日、翔君と葵が楽しそうに話してて」

「私は葵の彼氏と話してたんだよ・・・」

「その時彼言ってたんだ、あんな笑顔で話す葵を見るの久しぶりだつて・・・」

「おれと居るよりあいつと居た方が幸せなのかなあゝって」

「私は言っただよ『そんな事ないって、たまたまだよ』って」

「私だって、私だってそう信じてたのに」

「あれからの二人は本当の恋人みたいにベツタリで、最初は私も思ってたよ」

「クラスが同じだから仕方がないかって・・・」

「でも・・・でも・・・もう我慢できないよ・・・」

「翔君もつやめよう私達・・・もつこれ以上傷つきたくないよ」

く夏の出会いと別れく（後書き）

ぼくの彼女のな方の名前を書かなかったのは、きっかけを作ってくれた方なので

あえて書きませんでした。

く過去の闇そして光く（前書き）

まず最初に言っておきますが、ぼく自身そこまで暴力的な人ではありません

自分の身を守る為にしていた事です

そしてそこまで大きなイジメはありませんでした、0とは言い難かったです

この本文を見て何か感じて下さった方、子供はこういう些細な事でもストレスを抱えていると言ったこと知って欲しいのです

ぼく自身それを知って欲しかった人なので・・・

く過去の闇そして光

『翔君もうやめよう私達・・・もうこれ以上傷つきたくないよ』

彼女が言った最後の言葉、あれ以来ぼくは彼女に会っていない

学校が同じで同じ学年のはずなのにこうも合わないなんてホント不思議なくらいだ

思えば、ぼくは最低な男だったのかもしれない・・・

彼女と付き合い始めたのが七月の初め頃、ようやく仲良くなれたと思ったのに

まさか一か月もたないなんて思ってもいなかった・・・

まあそれ自体自業自得というやつなのだが・・・

ぼくと同じくして葵もまた、一つの恋の終わりを迎えていた

あの日彼女がぼくに言った言葉

『そんなに、葵が良いなら葵と付き合ったら良いんだよ！！！』

『葵、もう独りだよ・・・』

『なんで、別れたの？』って聞いたかった、でもぼくにはその術を持ち合わせていなかった

彼女の・・・彼女のあんな姿を見るのが初めてだったから

言葉では発しなかったけど、彼女の眼から流れる涙、そのとめどなく流れる涙を止める言葉が

ぼくには見つける事が出来なかったのだ

ぼくはこの女性をここまで、こんなにも涙を流さないといけない程苦しみ、傷つけてしまったのかと

その時思い知った

ぼくの中ではまだ彼女はぼくを見てくれている・・・そう思い込んでいた自分が恥ずかしかった

葵との出会いはぼくを孤独という世界から救ってくれた、でもそれと同時に大切に思ってくれた人

大切にしたいと思った人が居なくなってしまった

いつもなら深い悲しみが襲うのだけれど何故かそれがなかった

『最低だ』

自分のことしか考えていない、そんな自分が嫌になった

・
・
・
・
・
・

ぼくは人との接し方が良くわからない、友達がいると思うのだけど

一緒に遊んで、バカやって笑って、何かあつたら飛んできてくれて

一緒に泣いて、喧嘩してそんな漫画のような関係の・・・

そんな仲間と呼べる友達は居ないのかもしれない

・
・
・
・
・
・

ぼくが小学生の頃その学年をまとめるグループがあった

その子たちは、町のサッカークラブで繋がっていたのだが

ぼくはそのグループに入っていなかった

いや、むしろ入りたくもなかった

でも、そのグループに逆らうことをしたら虐めいじめの対象になる事は明白だった

ぼくの学校での休み時間、昼休みは決まってクラスの男でサッカーをする事

もちろん、ぼくはサッカーなんてドがつくほどの素人

だからゴール前で待機してボールが来たら蹴きっ飛ばす・・・

そんな事しか出来なかったのだ

でも、そんな事は許してはもらえないのが普通だった

ただ蹴きってるだけだと

『もつとちゃんとしろよ』

『どこ蹴きってんだよ』役立たず』

たまにボールをもって前に進んだものなら

『な〜に勝手にボール持つてんだよ〜』

『どけ！！！』

突き倒される前にボールを回す

ましてぼくらがその子達からボールをとったり、こかしてしまった日には

一週間ほど目を付けられる

そんな日々が嫌で嫌でしかたがなかった、まあ幸いぼくは体が大きかったのだ

それほど虐めの対象にはならなかったのだが、睨まれたり

陰でコソコソ悪口を言われた事は今でも覚えている

ぼくは、あまり気にしないでおこうと思っていた、いや気にしていないと思っていたのだが

ぼくが小学校4年に上った頃、下校途中に良く・・・というか毎日だったけど・・・

お腹をこわす事が毎日だった、学校のトイレに行ってから帰ったら良いのだけど

当時ぼくたちの世代はトイレにこもってようなら、悲惨だった

だから毎日毎日我慢して下校していた、家のトイレに入った時が何より幸せな時だった

自分では大丈夫と思っていたはずなのに、体は限界だったのかもしれない

後に訪れ、今もぼくの体をむしばんでいる病気、それがやってくるのにそう遠い時間は要らなかった

ぼくが小学校の高学年になった頃、ぼくの周りの景色はどんどん変わっていった

ぼくの身長がクラスで後ろから数えた方が早いくらいに伸びたのだ

その頃もまだあのグループとも否^{いやあつなし}応なしに付き合っ^いてはいたが

身長が伸びると同時に力も強くなっていった

そのおかげで、取っ組み合いをしても負ける事はなくなった

そしてその頃からぼくは自由の身になれた気がしたんだ・・・

毎日毎日取っ組み合い、口喧嘩・・・

自分でもわかっていた、こんな事あいつらと同じだと

でもその時のぼくはこのやり方しかやっていく方法を知らなかった

まあ案の定というか、そのせいで失った物もある、人とのつながり

まあぼく自身が本人から聞いた事じゃないけど

『あいつと話すといつも暴力振るうからな』

『あんなのに勝てっこない』

『あっちいこうぜ』

そんな会話がそこから聞こえてくる

暴力では何も解決しない、そんな単純な事にかなりの時間がたってしまった

中学にあがってもその事を完全に封印する事は出来なかった

ようやくやめる事が出来たのは2年も終わる頃だった

きっかけは単純、彼女が出来た事だ

同じ部活で後輩の女の子、最初どうして良いかわからなかった

今まで男とばかり喧嘩まがいの事しかしてこなかったほうが、目の前にいる

彼女と何をして遊んだらいいのか、話したらいいのか

全くわからなかった、でも一つだけわかった事がある

“この子を守りたい”

今まで失ってきた物の方が多いほうが、初めて守りたいと思える事に出会えた事が

なによりも嬉しかったのだ

彼女と出会ってからぼくは変わった、どんなに嫌な事があっても決して手を出すことをやめた

彼女はとっても優しく接してくれた、周りからは嫌味な声が聞こえるにも関わらず

彼女だけはぼくを信じてくれていた

楽しい時間はいつまでも続くと思っていた・・・

だけど、ぼくは守り切る事が出来なかった、彼女の優しさと信頼をそれはぼくの身勝手さがそうさせた、こんなにも優しく包んでくれたのに

信じてくれたのに、その優しさがぼくには重すぎたのかもしれない彼女と過ごした3か月、凄く短い期間なのだがぼくの中では大きく長い3か月だった

彼女がぼくに言った言葉がある

『翔ちゃんは弱くないよ、そして強くもない』

ぼくは聞き返した『どういうこと?』

『翔ちゃんは私を心から信じ守ってくれた、例えば他の誰かが何と言おうが』

『私の中の翔ちゃんは誰よりも優しく強いそして弱い翔ちゃんなんだよ』

『だから私は決めたの翔ちゃんを守るって』

そういうと満面の笑みを浮かべぼくの頬ほおに手を当てた

なんで・・・なんでぼくはこんなにも想ってくれる人を守り切れなかったのか・・・

彼女がぼくと別れる時にもこんな話しをした

『翔ちゃん、私は全然悔いなんてないからね』

『そりゃ翔ちゃんと別れるのは辛いけど翔ちゃんが自分の意志で決めた事だと思ってるから』

『それにたった3か月だったけど、私にとっただらとっても幸せな3か月だったから』

『ありがとう、翔ちゃん』

いつもの笑顔・・・ぼくにはもったいなくて辛い、彼女の笑顔はぼくにとって

一番幸せを感じる時だった、でもこの時ばかりはこの笑顔がぼくの心を傷つけていた

・
・
・
・
・
・

たぶん罰が当たったんだと思う、彼女と別れてすぐあいつが現れた

あいつとの出会いは突然だった

彼女と付き合う以前に感じていた孤独感

それが雪崩のように、以前より大きく押し寄せてきた

夜ぼくが寝ようとする、心の奥深くに言い知れぬ不安感があった
暗い暗い闇の中ぼくはその闇に吸い寄せられ呑み込まれる思いを感じていた

どんだけ頑張っても抜け出せない

その闇はぼくにこう言い放つ

『お前は一生独りだ』
ひとり

まあただの闇なのだからそんな事は言うわけがないのだけれど

そう聞こえた気がするんだ

その症状が出てから数日は何も考えたくなくなってしまう

いや、考えたくないのではなく考えられないのだ

夜になったらあの闇が襲ってくる

でも昼間、ぼくを襲うものそれは

『無』

無とは意味が分からないかもしれないけど、考えて欲しい

もし何もなく、ただ広い真っ白な世界に何日も何ヶ月も何年も放り出されたとしたら

周りの音も風景も話す相手も何もない場所に居たとしたら

人はどうなるのか

もちろん意識の中での話なのだが

ぼくはそれに勝つ手段がなかった

それは今もなお時々訪れる

ただぼくずっと空を眺め何をするでもなく、何かを求めるでもない

ただただ日が過ぎるのを待つだけ

字だけで伝えることは難しいのだけれど

ドラマやニュースなどでこういった人達が自殺をするつと言つのを
見たり聞いたりするけれど

その気持ちがわかってしまう自分がいる、とても悲しい事なのだけれど

この苦しみから解放されたいと思うのは仕方がないと思う

でも、ぼくは考えた事はあるけどそれを実行しようと思ったことは一度もない

なぜだかわからないけど

それだけはしてはいけないと誰かが言っている気がするんだ

彼女が言った

『翔ちゃんは弱くないよ、そして強くもない』

今なら少しわかる気がするんだ

・
・
・
・
・
・

「翔？大丈夫？」

葵がぼくに話しかけていた

「うん、大丈夫だけど、どうして？」

「いや、さっきからずっっくと黙ってるしさ」

「ちよっと心配になって」

「ほら、翔あれがあるじゃんか・・・」

そういうとちよっと悲しそうな顔でぼくを見る

彼女は知っているのだ、ぼくの病気の事を、前に話したことがある

その時は葵も動揺して何を言ったら良いかわからずにいたけど

すぐにいつもの葵に戻ってくれた

それ以来本当に一緒にいる時間が多くなった

『お前ら夫婦か』

って言われたこともあった

まあ実際は付き合っただけでなく、よき理解者なのだ

葵は強い、ぼくよりも数倍、いや数百倍

葵が彼氏と別れたって聞いた時、その後すぐに葵に連絡した
そこには普段と変わらない葵がいた、明るく元気な葵

電話越しではあったけど、悲しむ様子はなかったはずだった

「ぼくのせいなのか？」

「翔のせい？なにが？」

「だから、葵が彼氏と別れたことだよ」

「ああ、フッフ」

葵がいきなり笑い出した

「な・・・なに笑ってんだよ、ぼくは葵が心配で・・・」

「心配なんかいらないよ、私後悔してないしさ」

「でもさ」

「翔!?!」

ビックリした、いきなり大声でぼくの名前を呼ばれたからだ

「ごめん、ビックリした？」

「でも、本当に大丈夫だよだから心配しないで、ねえ」

「葵、もしもぼくに何か出来ることがあったら・・・」

「ありがとう、翔・・・」

「ごめん、少し疲れちゃった・・・切るね」

「あ・・・ああ」

「じゃあね」

心が痛かった

最後に葵が言った言葉、すごくかすれていた

葵は我慢していたんだとその時知ったんだ

・
・
・
・
・
・

「ねえ、翔！！本当に大丈夫なの？」

「うん、本当に大丈夫だから安心して」

「なら良いんだけど」

「もし何かあったらすぐに私に言ってね、私が翔を守ってあげるから」

葵には見せられないけど、葵の笑顔はぼくの心に大粒の涙を降らしていたんだ

く過去の闇そして光く（後書き）

葵という人物ですが、大学時代に仲良くしていた人はいませんが
ここまでの関係ではありませんでした、少々手をつけています
というかぼくの願望が混じっています

ゝ女の過去ゝ（前書き）

今回書きました彼女の過去のお話は、フィクションです

そして、少々荒く表現してある所がありますので、ご理解下さい

く女の過去く

「なあ葵く」

「なぐにぐ?」

「お前そついうこと気軽に言わないほうが良いぞ!!--!」

「え?何のこと?」

「さつき」

『もし何かあったらすぐに私に言ってね、私が翔を守ってあげるから』

「って言ったよね?」

「うん、言ったけど・・・それがどうしたの?」

「どうしたの?っじゃなくて」

「そついうのってさく恋人同士の時に言わないか?」

「ぼくたちはそういうんじゃないんだから」

「な～に～？～？～？」

「もしかして」

「なんだよ・・・」

「意識してんの？～？～？」

「・・・はあ～～～～～～～～～」

「んなわけねえ～だろ」

「ふ～ん・・・違うんだ・・・」

「な・・なんだよ」

「いんや、なんもな」

「からかってるだろ？」

「」

にやける葵の顔を見見た時、少し心がざわめいた気がしたんだ

「全く・・・」

「まあまあ」

『からかってなんて、ないんだけどね』

「彼氏とは良い感じなの？」

「ああゝ・・・もうあいつとは別れたよゝ」

「ええゝ!!!!!!またゝ」

「葵さあゝもつとよく考えた方がよいよゝ」

「なにがゝ？」

「その性格とか恋人との関係とか、いろいろさあゝ」

「だってゝうざいんだもん、あいつ!!!!!!」

「はあゝあんた何人目だと思ってんのよゝ・・・それに」

「付き合って2週間もたってないじゃん」

「まあゝそついう事もあるって」

「そついうことって!!!!!!葵の場合それが多すぎなの・・・」

『また始まった・・・』

・
・
・
・
・
・

私は少し前まで悪女^{しうがゐ}、と言われてもおおかしくないほど酷い^{ひどい}女だった
それは翔に会うよりもずっと前の話し、私が中学校の時、私は男を
ただの道具としか思っていなかった

当時クラスの中でも可愛い分類に位置していた、自分で言うのもな
んなんだけど・・・

そのおかげで、何もしなくてもクラスの男達は私に近寄ってくる

最初は楽しく話すだけだったのだが、何か欲しい物があり、口に出
したとき

「じゃあおれが買ってくるよ」

ちょっと口にただけだった、それなのに男の子はすぐに欲しかった物を買いき私にくれた

『まあパンだし良いよねえ』

私は少し罪悪感を持ったが、くれるんだから良いよねえ・・・そう思っていた

それからというもの私は何かにつけて口に出すようになった

「私ゝあのジュースが欲しいゝなゝ」

「あー!!あのお菓子食べたかったんだよねえゝ」

悪いとは思いついながらも口に出した物は全て周りにいる男達が私に貢いでくれる

でも、その感覚が堪らなく心地よかつたのだ

私は酔いしれていた、まるでどこかの女王にでもなったかのように・
・

もちろん、その中には私に告白してきた男は何人もいた・・・

けど、私はそんな気が一切なかったので全て切り捨てていた
それでも、その人たちは私の周りから離れようとしなかった

「じゃ・・・じゃあ何でも買って来てあげるから・・・友達でいてくれない？」

「えゝでもなあゝ」

「ね！！お願い何でもしてあげるし買ってあげるからさ・・・」

「ホントになんでも買ってくれるのゝ？」

「うん！買ってあげる」

「じゃゝあゝ・・・あのカバンが良いなあゝ前から欲しかったんだ
よねえゝ」

「あ・・・あれ！！」

「そう！あれ」

私が指差したカバンというのは、中学生から見たら絶対に手が出せないほどの金額だった

「ねえゝあれ買ってゝ」

私ご自慢の満面の笑みで訴える

「わ・・・わかったよ！！！！今は無理だけど、絶対買ってあげるから・・・」

「えゝホントゝありがとう」

そういうと彼に抱きついてみせる、だけど私はカバンの事しか考えてなかったのだ

まあ最初はそのんなの買えっこない、流石にこれは買わないよなあゝ
っと思っていた

「葵ちゃん！！」

「うん？何？」

「これ！！約束のカバン」

差し出されたのはあの時のカバン

『マジで！！！！』

正直驚いた、私とはただの友達・・・かもわからない相手にこんなカバンを買うなんて

正直呆れてものも言えなかった

「あ・・・ありがとう」

「でも本当に良いの？」

「私、何もお返しとか出来ないよ・・・」

「何言ってるの・・・良いんだよそんな事葵ちゃんの為に買ったんだから」

『ハハハ、バカだ・・・絶対馬鹿だこいつ』

笑いが止まらなかった、こんなにも馬鹿な男がいるのかと、思いもよらなかった

その日を境に私は、この感覚、その快感にどっぷりと浸^{つかって}ってしまった
抜け出せなくなってしまった

私の両親はまだ中学生なのにこんなカバン等を持っているのが不思議で不安に思ったのか

「葵！！このカバンどうしたの？高そうじゃない！！！」

すこし声が怖かったが、何もなかったかの様に接し

「これさ～聞いて聞いて～お母さん、この前行った古物を売ってる店で激安で売ってたんだよ～」

「これ～いくらだと思っ？」

「2,000円だよ2,000円これ普通に買ったらもつと高いよ、絶対」

「へえ～確かに安いけど～2,000円って葵にとつたら高くない

「？」

「えゝ大丈夫だよゝお金貯めてるしゝ」

「まあなら良いんだけどね、ほどほどにしなさいよゝ」

「はい」

『へへ！！ごめんねお母さん』

中学3年生になっていた私は、もう食べ物じゃ飽き足らずアクセサリやカバンなど

到底中学生なんかが買えない物を周りから手に入れるようになっていた・・・

貢ぐ男を騙しみつく両親を騙しだまし、友まで騙す

自分の欲望のまま好き勝手に過ごしていた

私が高校に上った頃から物だけでは足りなくなっていた、それまで男はただの道具としか

思っていなかった、なのでそういう関係以上の事は望む事をしなかったのだが

私も思春期ってやつなのかな〜男を求めるようになっていった

高校にあがっても私の周りには多くの男子が取り巻いていた、なのでそういう点では苦労を

した事はなかったのだ

でも、なぜか私は満足いかなかった

どんだけ男を求めても、抱かれても、私の心は満たされる事はなかったのだ

今に思えば我ながら凄い生活してたもんだと思う

いくら男を求めても満たされない、でもそれを満たしたいが為にとつかえひつかえ男を変える

いつしか、本当の恋愛なんて頭にも無くただ、異性を求めるだけの私になっていたのだ

『そう、男なんていくらでもいる』

『いらなくなったら、次がいる』

最低の考えなのだが、その時の私にはそれしか頭になかったのだ・

・

まあこんな生活をしているもんだから、男の友達は多く居たが女の友達は少なかった

陰で私の悪口なんてしょっちゅうだった

『なんなのゝあいつゝ尻軽にも程があるでしょが・・・』

『あれはただの雌豚ねえ』

『ほつときなさいよゝあんな淫乱で尻軽な女・・・』

私に聞こえてないと思っているのか、わざと聞こえるように言っているのか

それはもう酷い言われようだった

一回言ってやった事がある

『悔しかったら男捕まえてみるゝバゝ力』

悔しそうに、歯を見せ私を睨んでいた

まあそんな中でも私の友達と言えるのか・・・

ただつきまわっているだけなのか、一緒に行動をする女の子も何人かいた

私と話すのが目的なのか、私に群がる男が目的なのかは知らないけれど

良く話す子も何人かいる、その中でも比較的、っというか真面目な子が私に言う

「ねえ〜葵〜」

「何〜」

「もっと自分を大事にしなよ〜」

「え？それどういう意味よ〜」

「あんたの男に対しての接し方よ〜」

「な～に～またその話～」

「あのねえ～私は葵の事が心配なの～」

「はいはい、わかりましたよ～」

「もう～葵ってば～」

「はいは～いわかったわかった～」

正直うざかった・・・ほっという欲しかった

でも・・・なぜか心が落ち着く思いがしたんだ・・・

『私は独りじやない』

『独りじゃないんだ』

そう言い聞かせていた・・・

でも、どこか胸の奥で感じるこの不安、夜になり普段なら夜は街中に繰り出し

男と遊ぶ事が多いのだが、たまに家で独りで過ごす時

無性に不安になり切なくなる・・・

『私は独りじゃない、男だっていっぱいいる・・・』

『女友達だって・・・』

『友達だって・・・居るはず』

『いるはずなんだ・・・』

私には友達と呼べる人が本当にいるのだろうか・・・

眼が霞かすんでんできた、止めようと思っても止められない

目から大粒の涙が溢れ出てくる

『なんで・・・なんで・・・涙が溢れてくるの』

『私は何も悪くない！！！！』

『悪くなんて絶対ない！！！！』

『なにも悲しい事なんてないはずなのに・・・』

『どうして・・・』

私は夜通し泣き通す事が多くなったのだ・・・

そんな夜を過ごした次の日の私は性欲に歯止めがつかない日々を送っていた

男を求めている時はその事を忘れられたからだ・・・

『私・・・間違ってるのかな・・・』

・
・
・
・
・

高校を卒業し私は大学に進む事を選んだ

4月私は晴れて大学生になった、その頃には私の性癖も少しはましになってはいたけど

未だに男の子とはいろいろしていた・・・

入学してすぐ、知らない人たちとオリエンテーションで2泊・・・

その後いろいろ手続きやら健康診断を経てようやく授業が始まったのが4月中頃の事だった

「お〜い葵〜」

「????」

「こっちこっち」

振り向いた先には小学校からの友達が私に手を振っていた
残念ながら高校は別だったのだが

「この大学だったんだ」

「それはこっちの話よ、葵あんがい頭良かったんだ」

「ま・・・まあねえ」

自然と笑みが出る、この子は高校の時の私を知らない

中学校の時もいろいろしてたけど、笑って済ませれる範囲だったから
彼女が私を変な眼で見る事はなかったのだ

「大学かあゝ、ねえゝ葵」

「なに？」

「葵は今彼氏居るの？」

「う・・・うん一応ね・・・」

「そつかあ、まあ中学の時モテモテだったしねゝ当然か」

そういうと、彼女は私をからかってくる

『当然か・・・』

「うん？どうしたの？」

「ううん、何にもないよ、でそっちは居るの？」

「あはは・・・居る訳ないじゃゝん」

「この大学で見つけてみせる・・・」

「そっかあ」

正直うらやましかった、ここまで純粹に前を向いた眼を

私には無い、その眼と恋愛に対しての考え方が

私には彼氏がいる、でもその彼氏を本当の彼と呼べるのだろうか

街で友達と遊んでいた時、たまたま声をかけられた

ナンパってやつ!!!

ナンパなんてしょっちゅうだったけど、たまたま少しカッコいいかなって思ってた

遊んだのがきっかけ、テレビや映画などで女優が言うような

『電気が走ったんです』

そんなもの、あるわけなかった

ただ一緒に居てくれる相手が欲しかっただけ

今の彼氏はもう恋愛の対象ではないのかもしれない、お互いの欲望を満たすだけの存在

たぶん、他にも女がいる

私はただの性の道具でしかない

わかってる・・・こんなダメだってわかってるんだけど

手放してしまうと、不安になる

それが嫌だから・・・

・・・

私は大学にあがっても抜け出せなかった、むしろ悪化していたかもしれない

心の中で叫んでいた『助けて』って・・・

そんな時だった、そんなどうしようもなくボロボロに、身も心もボロボロになりつつある

私の前に彼は現れたのだ

彼の横顔はどこか遠くを見ている、心ここにあらずっていうのかな
まあ外見はどこにでもいるふつゝの男、イケメンでも無く不細工でもない

私にとつたら、そう!!どうでも良い存在・・・

だと思っていた・・・

その時まで・・・

ゝ女の過去ゝ（後書き）

女性の過去は聞くものじゃないって言いますよね、こんな女性がいるのか

ばく自身知りませんが、これからの葵の変化にも注目して下さいね

ゝ初めての経験ゝ 【序】（前書き）

まずは読んでください^^

細かい構成の良し悪しは目を逸らして下さい^^；

あと表現が難しいところがあったので>>許して下さい

く初めての経験　【序】

「今日も終わった」

「ねえく葵帰らないの？」

「うん、帰るよ・・・」

「どうしたの？」

「はっはっん」

「気になってるんでしょ」

「へえ！！！！！」

「な・・・何の事よ・・・」

「だってさく葵この頃ずっとあの席見てるよね」

私は、気付かないうちの空^{から}になったあの席を眺めていた

あの席・・・そう、少し前から私の中にいるあの人

あの人の横顔は、どこか遠くを眺め誰とも話そうとしない

どこか寂しそうに見えるあの顔を私は忘れる事が出来なideいた

彼の第一印象・・・

『変な人』

だつて、学校に居る間ずっと無口なんだもん

後々彼とその話をした時、彼の凹みっぷりには爆笑したもんだ。。。

彼は本当に無口・・・というか口を聞く事はなかった

そのせいなのか、周りの人間も自然と距離を置いて行く

私もその一人だ、けど心のどこかで彼の事を気にしていたのかもしれない

まあその頃の私にはそんな気持ちすらあるなんて思ってもいなかったけどね・・・

・・・

そんな中にも好きものつというのがある

大半の女の子は近寄らないというか、興味がない？というのがほとんどだけど

逆にあの無口なところが好きつという子もいるみたいだった・・・

ある日クラスの子達が話しているのが耳に入ってきた

「ねえ、彼って名前なんだっけ？」

「彼？」

「あそこにいつも座ってるじゃない、誰とも話さないけど」

「ああ、あの人ね・・・たしか」

「本城 翔平君ほんじょうしょうへいだったと思うよ」

「へえ、翔平君か」

「な、に、気になってんの??？」

「ち・・・違うわよ、ちょっと名前がカッコいいなあ、ってね」

「へえ、名前がね」

「私からしたらどこにでもあるような名前だと思っけどなあ」

「そっかなあ、あはは」

「でも、良いじゃない〜名前くらい聞いたって〜」

「はいはいおそまつ様〜」

彼女は彼の事が好きつとまではいかないだろうけど、気にはなっているのだろっ

友達にからかわれている彼女の顔はほんのり紅くなっていた

『あの子も彼の事気になってるんだ〜』

うっう〜!!!!

『なんだろう・・・』

『今!!!!』

彼の事を話す彼女達の会話を聞いていた時、何か言い知れぬ不安感

が私を襲った

いつも、夜になると襲って来る不安感とは違う何か・・・

胸の奥をジリジリと焼かれるこの感覚・・・

『怖い』

私は怖くなった、今までに感じた事のないこの感じ・・・

『なんなんだろう・・・』

『私どうしちゃったの・・・』

ジリジリと焼かれ、そして胸の奥を縫い針か何かで刺されるような

チクつとしたこの痛み・・・

それからというものの、私の中で彼の存在は日に日に大きくなっていった

この気持ちは何なのか、今はわからないけど

確かめたい、そして知りたい

私の心をざわめかせるこの感覚と彼自身を・・・

でも、なぜだろう・・・

声をかける事が出来ないのだ・・・

ちょっと勇気を出して声をかけるだけ

たったそれだけなのに・・・

こんな思いをしたのは初めてだった

小さい頃から『可愛いね』と、もてはやされ

私が近づかなくても、男の子達は寄って来ていた

私が話に行かなくても、向こうからやってくる

告白も、デートの誘いも、何もかも受身だった

でも彼は違う、こっちから向かって行かないと決して近寄る事は出来ない

近寄るところかどんどん離れていく気がした・・・

『どうしたらいいんだろう・・・』

私はどうしたら良いのか、そもそも私は彼とどうなりたいのかさえ分からずにいた

私には彼氏がいる、でも目で追ってしまうのは今の彼じゃない

私は気づいてしまったのかもしれない・・・

これまで、恋愛だの愛だの言っていた人の事を私は笑っていた

『所詮ただの恋愛ごっこ、経過なんてどうでもいい』

『結果が全て、いくら想っていても手に入らなければなんの意味はない』

『男なんて幾らでもいるんだから』

そう思っていた、そして私ならどんな男でも手に入れられる・・・と

でも、それは本当に手に入れたことにならない

いや、本当に大切な人は手に入れるものじゃない

出逢うんだということを、私はこの歳で初めて知ったのかもしれない

そして、この想いは何よりも重く、切なく、そして暖かいものだ
ということも・・・

私は戸惑っていた、今までなら異性と話す事なんて造作（ずいずい）もないこと

それなのに、彼の前では井いのなかの中の蛙かわず

私が私でないみたいだった

彼は本当に無口で笑顔すら見たことがない

『あの人の声が聞きたい』

『あの人と話したい』

『あの人の笑顔が見たい』

たったそれだけ、たったそれだけが望みだった

いや、今はそれだけで十分だった

しかし、それすら叶わない状況なのだ・・・

・・・
・・・

そんなある日、学校の授業中先生がある提案をした

二人一組になって勉強をしてみろというものだった

そしてその相手というのが、彼だったのだ

私の心臓がはちきれそうなくらい脈を打っていた

『ど・・・どうしようっ』

『こんなの耐えられないよっ』

『何で今日に限って相手が翔君なのよっ』

『てか、何で私こんなに緊張してるのよっ』

「じゃあ今から10分間で意見をまとめてくれ」

先生がそういうと、周りの人達が動き始め各々2人1組となっていく

『ど・・・どうしようっ・・・』

そんな時だった・・・

「あの・・・よろしくお願いします・・・」

私の背後からいきなり声が聞こえた

「は!!はい!!!!」

私は勢いあまって周りにも聞こえる声で返事をしてしまった・・・

周りの人たちは何事かと思って、こっちを見る

「葵、どうした？何かあったのか？」

先生が私に話しかける

「い・・・いえ・・・すいません、何もありません」

もう、噴火しそうだった・・・できる事ならここから逃げ出したいくらい

顔は紅潮し、湯気が出ているかのように熱い

そして胸は、耐えられないほど鼓動が早くなっていた

『もういや〜帰りたいよ〜』

・
・
・

「大丈夫ですか？」

とても優しい声だった

私は声のする方を見るとそこには不安そうにこちらを見る彼の姿があった

『だめだ・・・絶対変な子って思われたよ〜』

私は彼の顔を一度見ると、恥しくなりまた下を向いてしまった

「だ・・・大丈夫です・・・」

まともに顔なんて見れなかった

でも一瞬、彼の口が笑ったように見えたんだ

その授業中終始下を向いていた、彼の顔は見れなかったけど

彼の声だけが私の耳に残っている、その一つ一つが

私の心を打つ、心地良い響きだった

ずっと彼の声聞いていたい、そう思っていた

あの時までは・・・

彼の声が聞きたい

彼と話したい

彼の顔が見たい

彼ともっと仲良くなりたい

彼ともっと一緒に居たい

中学生や高校生が想い憧れる、そんな淡い恋

恋愛なんて幾らでもしてきたけど

そんな淡く、切ない恋は初めてだった

そしてこれが本当の恋、恋愛なのだという事を知った

気づいてしまうと早いもので、私の心はもうどうしようもなかった

とめどなく溢れてくるこの感情を抑える事が出来ない

でも、どうして良いかわからなかった

彼への想いはどんどん膨れ上がっていく

その反面今だに、うだうだと続ける今の彼との関係

もう、そこに私の心は無い

そんな日が続いた・・・

私が彼への想いを抱いたまま何ヶ月が経ったある夏のこと

ある友達が今度、祭りに行かないかと誘ってきた

私の彼氏も連れてつということらしい・・・

正直乗り気じゃなかった、その時はもう彼と居るのが嫌になっていたから

でも、せっかく友達が誘ってくれるのだからと、一緒に行くことにした

・
・
・
・
・
・

この夏、私の長くて苦しい

想いをぶつける事が出来ず、悩み苦しみ

でも、忘れられない

この初めての、想い

そして初めての経験が始まったのだ・・・

ゝ初めての経験ゝ 【序】（後書き）

どうでしたでしょうか、まあ今後の流れが読めると言われると悲しいのですが><

楽しんでもらえたら嬉しいです^^

一つ言いたいのは、だんだんエッセイから離れていくことです><；

まあ細かい事は気にしないでください^^；

ゝ二つの失恋ゝ（前書き）

なかなか良いお話になったと思っています^^

自分ではですが・・・

・
まあ前後文、前回文との構成の食い違いがあるかもしれませんが・・・

おおめに見てください><

なんか毎回言ってる気がします^^;

楽しく読んでもらえれば嬉しいです^^

く二つの失恋く

『今日何着て行こうかな』

今日は、この前約束していた祭りの当日

『まあでもせつかくだから浴衣にしますか・・・』

『それにしても、彼氏と一緒にかあ』

『うんくめんどくさいなあ』

もうこの時期の私と彼氏の関係に恋愛感情はほとんどなく

空気的な感じで、ただ居るだけの存在だった

『まあ友達も来るから良いつか・・・』

『でも、なんで彼氏も連れて来いって言ったんだろう・・・』

『もしかして・・・彼氏できたのかも・・・』

『でも、そんな兆候なかったしなあ』

『まあいいか・・・』

一人であれやこれやと、推測してたけど

まあどうでも良い事なので、あまり気にもしていなかった

『さあ！！行きますか・・・』

集合場所は私の通っている大学、祭り会場とは真逆の場所にある

『なんで、ここなんだろう』

疑問に思っているには理由がある、私も彼氏も一緒に行く友達も同じ地元なので

わざわざここを集合場所にする意味がないのだ・・・

集合場所に行く途中に彼氏と先に集まり一緒に行くことにした

まあこれと言って話す事がないので、最初に少し話すとお互いあまり話さなかった

『はあゝやつぱもうダメかなあゝ』

そんな事を考えていたら、集合場所である大学に着いた

友達はまだ来ていないらしく、2人で待つことにした

そこから何分待ったのだろうか、なにも話す事がなかったので、時間がやたら長く感じてしまう

『もうゝ！！何やってるのよゝ早く来てよゝ』

「あ！！いたいた、おゝい葵ゝ」

『はあゝやつと来た』

私は呼ばれた方に顔を向け、手を振ろうとした

そこには、元気いっぱい手を振り、満面の笑みを浮かべる友達を見つけた

そして、そのちょっと後ろを歩く一人の男性が目に入った

『え！！』

私は一人歩く男性の姿を見た瞬間、あの人の顔が頭をよぎった

そして、私の心臓は今まで眠っていたのかと思うほど鼓動を始め

瞬く間にその鼓動は私を支配していた

それと同時に顔や耳がどんどん熱くなっていき、無意識に彼から視線をそらしてしまった

『な・・・なんで』

『なんで、あの人がここに居るのよ』

「葵、どうしたの？」

「え！！どうもしないわよ」

「そう！！顔あかい紅いから熱でもあるのかと思った」

「へえ！！」

『ど・・・どうしよう・・・』

彼女が私の顔が紅いあかいと指摘してから、ますます顔が熱くなった

「だ・・・大丈夫よ・・・」

「それより・・・そちらの方は？」

その場を取り繕うとして、彼の事について聞いてしまった

「ああ！！そうだった・・・」

「紹介するね、こちら私の・・・」

「え!!!」

私は彼女が言った言葉に耳を疑った

そして思わず声がでてしまった

「今なんて言ったの？」

「だから、この人は私の彼氏だって言ったの」

心臓はバクバクいつている

でもこの鼓動は何かが違う

私の中から何かが消えていく気がした

それと同時に湧き上がるこの感覚

不思議なことに心臓の鼓動は治まり始めていた

私はこの歳で初めて失恋というものを経験した

案外あっけなかった、もつと悲しいのかと思ったけど

『なぐんだ案外平気じゃん』

『失恋って・・・』

その時はそう思っていた

私は知らなかった・・・

本当の失恋がどんなものなのかということに・・・

「葵？どうしたの？」

「あ・・ごめん、ちょっとぼろっとしちゃって」

「そっかあ、彼氏かあ〜おめでとう」

「ありがとう葵」

私はそういうしかなかった、私は負けた・・・

いや、勝負もしていない

私は彼への憧れだけを胸に秘め、いつかこっちを向いてくれる

そんな甘っちょろい考えが私の中にあっただのかもしれない

私は今まで欲しいものなら、大概のものは手に入れてきた

でも、一度も勝負をしてこなかった

しなくても手に入ったから

わかっていたんだ、彼は・・・

翔君は、待つてるだけじゃこつちを向いてくれない

わかっていたのに何も行動を起こせなかった

話すのが恥しい、拒否されたらどうしよう

そんな事が頭を過る度、よぎるたびますます動けなかった

でも・・・

彼女は違う・・・

彼女は行動をし、その態度を彼に示した

その結果、彼女は彼の信頼を得

幸せを掴んだのだ・・・

『はあーやられたやられた・・・』

最初は案外大丈夫だと思っていただけ、だんだん悔しさが襲ってきた

『まあ、自業自得だよね』

そう、自分に言い聞かせた

『よし！！もうくよくよするの終わり！！！！』

『こうなったら思いっきり話してやる』

『なんなら奪っちゃおうかなあ、なんてね・・・』

私の心は迷っていた、だけど

彼への気持ちは一旦私の心底に収めたのだ

それと同時にもう一つ決めた事がある・・・

私は過去を断ち切る事を決めた

過去はどうしても切れる事はない、過去にしてきたことは変えられない

けど、それを未来に生かす事は出来る、だから私は過去を断ち切る

そう決めたんだ・・・

私はもう怖いものなんてなかった、彼と話がしたい

たとえ彼に彼女がいようと、私に彼氏がいようと関係なかった

私は私の意志で行動をしようと決心していた・・・

まあ彼が無口だろうがなんだろうが、関係ない・・・

そう思っていた・・・

そう・・・思っていたんだけどなあ

・
・
・
・
・

「それにしても・・・翔！あれはないでしょ！！あれは！！！！」

「ビックリしたあゝなんだよ葵ゝいきなり大声出すなよゝ」

「はあゝ心臓ドキッゝつてなったよゝ」

「そんなことどうでも良いのよゝ」

「どうでもってなあゝ」

私は翔の文句も無視して話しを続けた

「私はさ、てつきり翔は無口でクールだと思ってたのよゝ」

「だから翔の事はだいぶ前から知ってたけど、全然話せる雰囲気じゃなかったんだよゝ」

「そんな事言われてもなあゝばくだって好き好んで無口だったわけじゃないし」

「まあ確かに今でもそんなに口数は多い方じゃないけどさ」

「悪かったなあゝ口数少なくて!!!!」

「そのせいで・・・私は・・・」

自然に声の音量が低くなった

「え!!!何?」

「もう!!!なんでもないゝ!!!!」

「それにしても、あの日あんなに翔がしゃべりだと思わなかった」

「はいはい、しゃべゝで悪かったですねえ」

「それに、あの言葉はダメだったんだよ・・・」

「あの言葉？」

「な・・・なんで・・・なんであの時『初めまして』なんて言ったのよ」

「だってさ、お前が初めましてって先に言っただんじゃないかあ」

「もう！！翔のバカ~~~~~~~~」

・・・

あの日、友達が私に言った衝撃的な言葉、翔が彼女の彼氏になったという話し

それを聞いた瞬間から約5分間くらいの記憶が曖昧あいまいだった

翔と私が挨拶をした時のことは覚えている

私は気が動転していたのか、彼に『初めまして』

と言ってしまった

彼もまた『初めまして』

と声が返ってきた事を覚えている

その時の私にとって『初めまして』という言葉は辛かった

こんなにも私は彼の事を見てきたのに

あの授業中一緒に勉強もした

たった一度一緒に勉強をしたただけだけど、私にとつたら忘れられない時間

それなのに、あの時の言葉・・・

『初めまして』

その言葉が私の全てを打ち碎いたのだ

あの言葉は辛かった、確かに私も気が動転していて

言ってしまった言葉・・

でも・・でも・・

彼は何もかも忘れていたのだ

それまでは、もうくよくよしないと誓い、必死に自分に言い聞かせていたのに

あの一言で、こうも自分がダメになるなんて思ってもいなかった

・・

「バカってなんだよ」

「ふん！！バカだからバカって言ったんだよ」

「はいはい！！！！」

「もうっ！！！！本当に辛かったんだからねえ」

「辛かった？」

「ショックだったって言ってんのよ」バカ

「ああ！！！！またバカって言ったなあ！！！！」

「ふん！！！！何度でも言ってやる」バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

私は彼の胸を軽く何度も叩いた

私はまだこの人を諦めていない、というかこの人しか見えていない
というのが本音

でも、今はこのままで良いんだこのままの関係で・・・

それだけで私は幸せだから・・・

「なあ葵」

「なによ」

「ぼくさ〜思うんだよね」

「あの時ぼく達が交わした『初めまして』って言葉」

「確かに葵にとったら初めてじゃなかったかもしれない」

「でもね、ぼくはあれで良かったんじゃないかと思うんだ」

「なんでよ〜、それじゃそれまでの私達がないみたいじゃない・・・」

「それに本当にショックだったし、辛かったのに・・・」

「葵!〜!ごめんな」

「実はさ、ぼくも覚えてるんだ・・・」

「あの日、あの授業の時一緒に勉強をしたのが葵だって」

「え!〜!〜!」

「うん、覚えてる」

「あの時ぼくが声をかけた時大声で返事した葵」

「顔を真赤まっかにして下を向いていた葵」

「授業中ほとんどぼくの顔を見てくれなかった葵」

「覚えてるよ、でもね・・・」

「でも・・・なによ・・・」

「葵はぼくのこと嫌いだと思ってたんだ・・・」

「ほら、ぼくさあの当時誰とも話さないし、関わりをもたないから」

「みんなから避けられてたでしょ・・・」

「まあぼく自身も、自分から向かっていく事をしなかったし」

「それに、独りで居る方が楽だったしね・・・」

「あの時のぼくは、ぼくじゃなかったんだよ」

「そんな・・・じゃあなんで、あの時初めましてって言ったのさ・・・」

「葵が初めましてって言ったでしょ、その時やっぱりって思ったんだ・・・」

「やっぱりあの時のこと忘れてるんだって・・・」

「だから、ぼくも初めましてって言ったんだよ」

「そんな・・・そんなことって・・・」

「ごめんな葵・・・」

「でも、さっきも言ったけど、ぼくはあの時があの祭りの時が初めて良かったって思ってる」

「なんでよ・・・」

「それは、ぼく達が初めてちゃんと顔を合わせて話せた日じゃないか」

「あの日はぼくにとって大切な日なんだ」

「葵と話せたって事もあるけどね・・・」

「違う意味でも大切な日なんだよ・・・ぼくにとつたらね」

「翔・・・」

「・・・・・・バカ」

お互いの顔に笑みが溢れ出していた

そして、前よりも一層このバカを好きになってしまった・・・

『はあくホントバカで・・・鈍感なんだから・・・』

自然と笑みが溢れてくる

「なんだよゝ急に笑って・・・気持ち悪いなあゝ」

「なんでもない・・・」

「てか、うつさい！！！！バカ！！！！」

「ああゝまたバカって言ったゝ！！！！」

・
・
・
・
・

あの日、あの後私は、いろんな感情を胸に秘め翔といっぱい話した

これまで話せなかったのが嘘のように、ど努_う濤の如く話し続けた・・・

その日は翔としか話した覚えがないくらいに

私に彼氏がいた事なんて、すっかり忘れていたのだ・・・

祭りの数日後、携帯に一本のメールが届いた

送り主は私の彼氏からだった

『別れようぜ』

たった一文・・・

この一文だけが携帯の画面に映っていた、まあそれだけで私は全てを理解した

私はその返事をする事はなかったけど、その後彼氏から一切連絡は来なかった

私は全てを失った・・・

そう思っていた・・・

・
・
・

「おはよー!! 葵ちゃん」

「えー!!!!」

私がボオーツとしていると、後ろから声をかけられた・・・

「なに、ボオーツしてるの？」

振り向いた先に翔君が私の方を向き話しかけていた

「私に言ってる???」

「へえ!!!! 何言ってるのさ葵ちゃんしか居ないじゃん・・・」

「変な葵ちゃん!!!!」

翔君はそういうと笑っている

私は全てを失ったと思っていた、思っていたけど

私が大切にしたいと願った人は

私の心を救ってくれた人は

私の元から居なくなってしまったと思った人は

今私の隣で満面の笑みを浮かべ、私に話しかけてくれていた

私の彼への望み、それがこの日全て私の元にある

「おはよ！！翔君」

私もまた満面の笑みで彼に微笑み返したのだった

〳二つの失恋〵（後書き）

どうでしたでしょうか^^

もう・・・エッセイはどうしたの〵

って自分でも思うのですが・・・

まあいいかと思っている私です^^；

では、また次回までお別れです^^

読んでくれた方ありがとうございました^^w

ゝ友達以上恋人未満ゝ 【やすらぎ】（前書き）

ちよつと今回のお話はニヤニヤしてしまうかもしれません^^

ばく自身も書いてて、こんなのあるんじゃないかと思いつつ

ニヤニヤしながら書いていました^^w

あなたは ゝ友達以上恋人未満ゝ という関係は成立すると思いませんか？^^

ちよつとノホホンとした、ニヤニヤする、そんなお話になりました
^^

く友達以上恋人未満く 【やすらぎ】

『葵のやつバカバカ言いすぎだっつの・・・』

『でもまあホント・・・』

『ずっと一緒に居るよなあ〜おれ達・・・』

なぜかしみじみ思ってしまった、きっかけはあの祭りの日なのだけど

それにしても、こんな事ってあるか???

ってほど、一緒に居る・・・

一緒に居ないのは、休みの日・・・休みの日・・・休みの日・・・
休みの日だけかあ〜

『あはは〜休みの日だけじゃん・・・離れるの・・・』

自分でもビックリだな・・・

まず、整理してみよう。。

ぼくの家は学校から最低でも二時間はかかる、まあ県外だ・・・

葵の家は学校からバスで約30分のところにある・・・らしい・・・

なので、その間は会っていない・・・というか会えない・・・

で・・・学校に着き、クラスに入ると・・・

葵が我先にと近づいてくる

で、ぼくの隣の席を確保する

その席に座った葵は毎日欠かさずぼくの方を向き、満面の笑顔で『おはよう、翔』という

葵のその笑顔は反則だ・・・

なにせ、葵はこのクラスでは一・二位を争う・・・いやこの学年と言っても良いかも・・・

それくらい、可愛い子なのだ

女の子を表現するのに大きく分けて二つあると思う

『可愛い』と『綺麗』（まあ人それぞれだけど）

第一印象で思うのはこの二つではないかと思う、その後に大人っぽいところもあるけど・・・

葵はどっちかって言うところ『可愛い』と表現できるかな・・・

綺麗なのだが・・・まず可愛いと声が出てしまう

『まあ本人には言ったこと無いけど・・・』

言ったらめんどくさそうなので・・・

葵と行動を一緒にするのは何の問題もないのだけど・・・

今ではもう無くなってきてはいるけれど

葵ファンというのが居るらしく、視線が痛い時がある

葵は知ってか知らずか、ますますベツタリなのだ・・・

『はあゝ勘弁してくれ』

まあベツタリといっても、くっついてるわけではないけどね

『ほんと、まるで恋人同士だな・・・』

・
・
・
・
・

あの祭りの日はぼくにとって大切な日になった

葵と出会ったって事もあるのだけど

一番大きかったのは、同じクラスの人と話が出来たということだ

その日の葵はとても優しく、いろいろ話してくれた

ぼくは、久しぶりに心が晴れた思いがしたのだ

ぼくがこの大学に入学した年、ぼくは体調を崩した

そのせいもあるのか、授業にもついていけず段々卑屈になっていき

一年目で留年をした・・・

それからが地獄だった・・・

ぼくの抱えている問題は前にも書いたのであえて書きませんが

二年目の一年は、実際何をしていたかわからない

あまり思い出したくないのですが・・・

おそらく、その時なのでしょう。葵と一回だけ授業と一緒に勉強をしたのは

その時のぼくは何も考えられなかったので、誰と勉強したのかわかるはずもなかったのだ

二年生になり徐々に体調も回復し周りにも慣れてきた時、声をかけきたのが元力ノだ

彼女には本当に悪い事をしたと思っている、嫌いではなかったけど

未だに周りに溶け込めないぼくは、普段でも彼女と話す事がなかった

そんな時祭りに誘われたのだ・・・

そしてそこで葵と出会った・・・

人見知りが激しいぼくだったけど、そんなものは葵にかかったら無いもの同然だった

人見知りをする前に葵は、どんどんぼくに質問をしてくる

あの、可愛い笑顔をぼくに振り撒きながら

まあその時の葵にもいろいろあったみたいけど・・・

葵の存在がそこになかったらあの祭りは楽しくなかったと思う

でも・・・

久々だった、自然に笑みが浮かぶ事が、人と話す事が、心があんなにもわくわくしたことが

あの日の出来事は、ぼくにとって大切な時間、大切な思い出になったのだ

まああの日が原因で彼女とは別れてしまったのだけど、大切なものを手に入れた

後日学校で葵を見つけると、今までそんなこと一切しなかったのに自然と挨拶をしていた

葵のやつ、なぜかボォツとして固まっただけ・・・

葵もまた満面の笑みで応えてくれた

それからだ、ぼくと葵がずっと一緒に居るのは、お互いの恋人が居なくなっているから

ずっと・・・

そしてこれからもずっと一緒だと思っていたんだ・・・

・・・
・・・

「じゃあ、葵また明日な」

「ええゝもう帰っちゃうのゝ」

「あのなあゝぼくはこれからバイトなの．．．」

「葵に付き合つてたら遅刻するっての．．．」

「
ぶゝ
」

「ほらゝそんなにぶゝぶゝ言つてると豚になるぞ．．．」

「ふん、まず豚とは種族が違つからならないし」

「でも、豚みたいな鼻にはなるかもよ」

「．．．もうゝ翔のバカゝ」

「ハハハ、まあそんなすねるなって」

「そんなにすねてつと、せつかくの可愛い顔が台無しだぞ」

「か・・可愛くないもん別に・・・」

「そうかあ？葵は可愛いと思うけどな」

「バ・・バカじゃないの・・・」

「可愛くないったら可愛くないの・・・」

顔を真つ赤にさせた葵はぼくの顔が見れないのか下を向いてしまった

『今がチャ～ンス』

「じゃあな～葵」

葵が下を向いている間にぼくはそそくさと葵から離れた

「ああ〜翔〜!!!」

「だました騙したわね〜」

「騙してなんか無いっての、本当にバイトに間に合わなくなるから〜」

「ちよつと〜!!!」

「もう!!!明日学校来たら覚えてなさいよね〜」

「ハハハ、覚えてたらなあ〜」

「じゃあな〜また明日〜」

「うん!また明日〜」

葵はいつも悲しそうな顔をする

学校にいる時は常に笑顔を絶やさない葵なのだけど

あの瞬間だけ、ぼく達が別れる時だけは悲しそうな顔をする

まあでも、別れても・・・

“ブーブー”

『きたきた・・・』

『ちよつと〴〵勝手に帰らないでよ』

メールだ・・・（逃走中みたいに書いてみた・・・）

『もうそろそろ来る頃だと思っ たよ』

『ふんだ、わかりやすい女ですいませんね・・・』

メールの向こうでむくれる葵の顔がはつきりとわかる

『ハハハ、可愛くないなあ〜葵は』

『なによ〜さつきは可愛いって言ったくせに・・・』

『言ったよ、そんな葵も可愛いなあってね・・・』

『ん〜だんだん嫌味に聞こえてきた〜』

『そう？事実だけど・・・』

『はいはい、ありがとう』

『それでよろしい〜』

『ハハハ、なにそれ〜』

『でさ〜今日は何時にバイト終わるの？』

『ん〜とねえ〜たぶん8時（20時）だと思う』

『何で？』

『なにもない・・・頑張つてね』

『おう！！！！』

『今度さ〜葵も水泳教えてあげようか？？？』

・・・

『ははあ〜ん・・・』

『な・・・なんだよ・・・』

『今エツチな事考えてたでしょ・・・』

『な・・・んなわけねえ〜し』

『ええー！！絶対思ってた・・・ほら！！素直に言ってみ・・・』

『・・・すいません、思いました』

『はあ・・・変態。。。』

『が！！！！！！』

『この変態翔～～』

『すいませんね～変態で～』

『あ！開き直った・・・まあ、良いけどね』

『何が良いんだよ・・・』

『翔に教えてもらうのも、翔が変態でも・・・だよ??』

『そのハートはなんだよ、そのハートは!!!!』

『ふふふ、そんなの決まってんじゃん・・・』

『愛です!!!!そう愛なのです・・・』

『・・・』

『なによこの返しは!!!!・・・』

『だって・・・お前が愛です!!!!そう愛なのです・・・』
『って
な事言うから』

『なによ〜言っちゃ悪いわけ〜翔に愛の告白してんのに〜』

『はいはい、ありがとうございます・・・』

『な・・・なによ〜』

『まあそんな冗談は置いといて〜』

『かあ〜!!!!!!なんかムカつく〜〜〜置くなつての!!!!!!』

『で・・・水泳教えてあげようか・・・』

『。。。バカ〜!!!!!!このド変態〜!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

ハハハ、やっぱり葵は面白い

その後しばらくメールは来なかった・・・

ぼくもあえてしなかったのだけどね

数十分後・・・

“ブーブーブーブー”

メールだ・・・

『・・・翔のバカ・・・』

『何でメールくれないのよ』

『何でって・・・ねえ』

『なによ』

『絶対メール来ると思ってたし・・・（笑）』

『もう・・・知らない！！！』

『ハハハ、ごめんね葵ちゃん・・・』

『・・・ねえ』翔

『ん？どした？』

『・・・ん？んやっぱ良いや・・・』

『なんだよ〜それ〜』

『良いのお〜』

『ふ〜ん・・・変なやつ（笑）』

『ねえ〜』

『今度はなんだよ・・・』

『・・・ほんとに水泳教えてくれるの?』

『このド変態のぼくで良いの?..?..?（笑）』

『良いよ・・・翔なら・・・』

『・・・．．．なんと返したら良いか．．．』

『（笑）ふふ！！興奮した？？？』

『な！！！！』

『ハハハ、翔のへん・た・い（笑）』

『もういい！！！！』

『でも、良いよって言ったのは本当だよ．．．』

『もちろん！！！！変な事したら怒るけど．．．（笑）』

『そっかあゝじゃあ今度手取り足取り教えてあげるよ』

『翔!!!!』

『うん?』

『言い方がヤラシイ!!!』

『な!!!!』

『ハハハ、まあ翔らしいったらしいけどね・・・』

『それフォローになってない・・・』

ぼく達が一緒に居ない時はほぼメールをしている、なので

ほぼ一緒に居るみたいな感じになる・・・

その日もぼくが地元に戻るまでの間ずっとメールをしていたのだ

・
・
・
・
・

「翔君、翔君は今彼女居ないの？」

「なにをいきなり聞くんですか・・・」

「いやねえ、気になっちゃって！！！！」

ぼくがバイト先に着いてそうそう、そこでぼく達と一緒に働いているおばちゃんの一人が

ぼくに聞いてきたのだ。。

「い・・・いや、いませんよ」

「そうなの？」

「はい・・・」

「でも、好きな子とかは居ないの？」

「好きな子があゝ・・・」

『翔！！！！』

「え！！！！」

「うん？どつしたの？」

「いえ！！何もないですよ」

今一瞬葵が頭の中に出てきたんだ・・・

「なぐに〜？翔君！！気になる子でも居るんでしょ？？？」

「い・・居ないですってば〜ただ・・・」

「ただ？」

「いつも一緒に居る子は居ますけどね、まあただの友達ですけどね」

「ふ〜んただの友達ねえ〜」

「はい！ただの友達です」

「でも〜その子は友達だって思ってたないかもよ・・・」

「いや〜それはないでしょ・・・」

「わからないわよ〜女ってねえ時に豹変するから・・・」

そういうと、おばちゃんは笑いながらぼくを見た

「あはは・・・なんか怖いですね・・・」

「まあどつちにしろ、気がない男に女はつかないって！！！」

「そんなもんですか・・・」

「そう！！そんなもんよ、頑張つてね翔君！！！」

「は・・・はい」

上機嫌だ・・・上機嫌で去っていくあの人・・・

『葵がね・・・まさかねえ』

・・・

夜8時・・・バイトが終わり家に帰ろうとした時・・・

“ブーブーブーブー”

メールだ・・・

『翔！！お疲れ様～？？？』

葵からの【？メールだ・・・】

『おつかれ、あのさ』

『なに？』

『この？は何？』

『決まってるじゃん・・・』

『愛する人への労いの^{ねぎらい}LOVEメールだけど・・・（笑）』

はあゝ絶対ない！！！！

葵がぼくに気があるなんて絶対ない！！！！

その時確信したんだ・・・

『うん絶対ない！！！！』

『何が絶対ないの？』

『いや！！気にすんな・・・』

『それに、葵・・・遊んでるだろ・・・』

『遊んでないもん、ちゃんと家に居て翔にメール撃ってるもん・・・』

『おい葵！！！！漢字が違うぞ、それにそういう意味で言ったんじゃない』

『い．．いや．．お前が言えって言ったんじゃないか．．．』

『だって．．なんかイラッてしたんだもん．．．』

『はあゝったく．．居ないよ．．そんな女』

『ふんだ．．．』

『ホントに居ないよ．．もし．．．』

『もし．．なによ．．．』

『葵が水着姿で泳いでたら、目移りしたかもね???（笑）』

・
・
・
・
・
・
・
・

あれ？メールが返ってこない・・・

いつもだったら『バゝ力』とか返ってくるのに・・・

『どうした？葵？』

『なんでもない・・・』

『お・・・怒ってる？？？』

『怒ってない・・・』

『怒ってんじゃない・・・』

『怒ってないもん・・・』

・・・

その後すごく気まずくなってしまったのは言うまでもない・・・

おれ・・・なんか変な事言っただかな・・・

そりゃーちよつと冗談っぽく言っただけどさー

あんなのいつも言ってるし・・・

んー疑問だ・・・

その日葵からメールが来ることはなかった・・・

いつもだっ たら寝るまでメールしてるのになあゝ

まあ良いけど・・・明日一応謝つとくか・・・

・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・

『・・・翔のバカちよつと意識しちゃったじゃない・・・』

ゝ友達以上恋人未満ゝ 【やすらぎ】（後書き）

一応この説は、男の視点から見たものになっています^^

まあ実際の男は流石に気づくと思いますけどね^^;

この男は鈍感なですよ・・・

次回は、何となくわかりますよね^^

では^^次回まで・・・

ゝ友達以上恋人未満ゝ 【初恋】（前書き）

今回は、女の子の視点から書いてみました^^

今回もなかなか良いと思う・・・気がします・・・

一部アダルティな表現がありますが・・・

そんなにでもないはず・・・なので・・・たぶん・・・おそらく・・・絶対・・・

うん、皆さんなら分かってくれる。。

ちよつと切なく、暖かい初恋、皆さんも思い出しながら読んでくれると嬉しいです^^

特に女性に見て欲しいかも・・・今後の参考までに・・・（笑）

あー！悪口言われると凹むので・・・やめて下さいませ・・・（笑）

あー！今回は少々長めなので^^；

く友達以上恋人未満　【初恋】

「…………い…………」

「……………」

「…………おい…………」

「…………あおい…………」

「うん？…………だ…………だれ？…………」

「…………葵…………ぼくだよ…………」

「翔？」

『そう、ぼくだよ・・・』

『どづしたの？？？』

『今日はね・・・葵に言わなきゃ行けない事があるんだ・・・』

『なに？なんのこと？？？』

『葵に・・・お別れをしなくちゃいけないんだ・・・』

『え！！！！な・・・なに言ってるの？？？』

『じょ・・・冗談・・・だよね・・・』

『ん〜ん、冗談じゃないんだ・・・本当にお別れなんだ・・・』

『な．．．なんでよ．．．』

『ごめんね．．．葵、さよなら、葵．．．』

『今までありがとうね．．．今まで楽しかったよ．．．』

『いや．．．』

『葵と過ごした時間はホントに大切な時間だったよ．．．』

『いや．．．嫌だよ．．．翔．．．』

『これからは、葵自身の為に生きて．．．幸せになつてね．．．』

『いや！！行かないでよ．．．翔．．．翔が居ない生活なんて．．．』

『バイバイ・・・葵・・・好きだったよ・・・』

『なによ・・・なによそれ・・・行かないでって言ってるでしょ・・・』

『翔!!!行っちゃ嫌だよ、ずっと傍にいてよ、私の傍で・・・』
『私の傍で・・・その笑顔を見せてよ・・・』

『・・・・・・・・・・・・』

『翔!!!・・・翔!!!・・・いやぁ~~~~~~~~~』
『~~~~~』

・
・
・
・
・

真つ暗な闇の中、私の目からは大粒の涙が流れていた・・・

『夢・・・』

私はあの出来事が夢であつた事に気づくと枕に顔を埋め^{うずめ}また涙を流した・・・

『翔・・・居なくならないよね・・・』

私は枕から顔を離し、携帯を取り出した

涙で潤む目が映し出したのは、『翔』の文字だった・・・

『翔・・・私こんなに好きになるなんて思ってもいなかった・・・』

私は返ってくるはずもないのに、翔にメールを打っていた・・・

『翔・・・翔・・・たすけて・・・』

気づいたら送信のボタンを押していた・・・

来るはずのない翔からのメール、なぜなら今は深夜の2時をまわった時間

『草木も眠る丑三つ時』

ただ、翔にちょっとしたでも触れていたかったから・・・

『はあく私何やってるんだろう・・・絶対返ってこないのに・・・』

そう考えていると、また目が潤んでくる・・・

ホント・・・バカだ・・・私

私は枕に顔を埋め必死に心を落ち着かせていた・・・

“ブー
ブー
ブー
ブー”

! ! ! !

心臓が一瞬ドキツとなった

恐る恐る携帯の画面を見た、そこに書いてあった文字……

翔

なんで・・・なんでよ・・・なんでこんな時間に・・・

私はメールの中身を開いてみると、そこには・・・

『おいゝ!!! 葵ゝ今何時だと思ってるんだよ・・・』

いつもと変わらない翔の言葉・・・

でも、その変わらない文字が今の私にはとても幸せだった・・・

『!!--!!』

『・・・翔・・・ホント翔ってバカなんだから・・・』

自然と笑みが出ていた

文面の最後に書いてあった言葉

『葵・・ぼくはいつも葵の味方だよ・・だからいつでもメールしてきて良いんだからな・・・』

『まあ出来れば、今度からはこんな時間は勘弁だけど???(笑)』

私はこのメールで何もかもが救われた思いがした・・・

『ありがとう・・・翔・・』

ブルルルルルルルルルル! ! ! ! ! ! ! !

『きゅー! ! ! ! ! ! ! !』

いきなり電話がかかってきた、相手は・・・翔だ・・・

「よう！ー！葵」

「翔・・・」

「おはよう・・・翔・・・」

「おはよう・・・じゃねえし・・・」

「今いったい何時だと思ってんのよ」

「草木も眠る丑三つ時」

「ハハハ」

私と翔が発した言葉はシンクロしていた、それを聞いたばく達はお

互い笑ってしまった

「葵・・・大丈夫か・・・」

「うん・・・まあね・・・」

「ごめんね・・・こんな時間に・・・」

「ホントだよ・・・飛び起きちゃったし・・・」

「ごめんね・・・」

「まあ、よかったよ何もなくて・・・」

「『助けて』・・・なんて書いてあったから何かあったんかと心配したぞ・・・」

「あはは、ごめんね・・・ホント」

「良いよ・・・もう・・・じゃあもう寝るわ・・・また明日な・・・」

「うん・・・ありがとう・・・翔・・・おやすみ」

「おう、おやすみ・・・葵」

電話が切れた後、私は少しの間携帯の画面から目を話す事が出来なかった

いや、実際は離したくなかったというのが正解かもしれない・・・

『翔』

『味方かあ・・・』

『・・・バカ・・・』

自然と笑みが出ていた、そして心は安らぎ深い眠りに落ちていったのだ・・・

・
・
・
・
・

『んん』

窓の外から聞こえる鳥の声、青い空から降り注ぐ暖かい光

『もう朝か・・・』

『うん？』

ふと手を見ると、私は携帯を握っていた・・・

『しゃあない!!! 翔に頼んで席を・・・っと・・・』

『だ・・・ダメだ～～～昨日の今日で迷惑かけられないし・・・それに』

『恥ずかしくて言えない・・・』

『と・・・とりあえず・・・』

私はとりあえず顔を洗い、ご飯を食べた

その時点でもう10時20分・・・

最悪だ・・・

それから・・・・・・

女の子がしなくちゃいけない事をもらもろ・・・

『よっし!!!! 出来た・・・じゃあ!!!! いつてきまゝす・・・』

家を出たのが40分過ぎ・・・

あと10分、間に合うわけじゃないじゃん・・・

『よし！！こうなったら・・・』

大通りに出た私は手を上げた、そこに1台の車がとまる・・・

そう！！！タクシーだ・・・

「すみません、急いで下さい」

私はタクシーに乗るや大学に行きたいと告げ、急いでほしいと伝えたのだ

バスで大学に行くのに30分はかかる、まあバスはバス停全てに停まるし

遅いし、信号は多いしで遅くなるのだ、その点タクシーは・・・

スイスイ進む、信号には引っかかるけど、早いし融通は利くし

なにより、快適だ・・・

そうしていると、約15分後・・・（この時間でもう遅刻だけど・・・）学校に着いた

『はあくはあくああくくしんど・・・』

『なんで・・・こんな日に限って6階の教室なわけ・・・しかもエレベーターの故障って・・・』

『もう！！！！！いやあく！！！！』

『はあくはあくやっと着いた』

私の足はすでに棒の如く硬くなっていた

『でも着いたは良いけど、場所どうしよう・・・』

この授業は案外人気で人が多いのだ、しかも出席しているか必ず調べる・・・

『まいったなあ』

私が途方に暮れていたその時・・・

“ブーブーブーブー”

携帯が鳴っている、宛先は・・・

『翔!!!!!!』

翔からメールが来ていた・・・

『よう!!!ねぼすけ(笑)』

『その窓から少し前の窓際の席を見てみ・・・』

『え!!!!窓際・・・あ!!!!!!』

『翔だ・・・』

“ブーブーブーブー”

『またメール・・・なにになに・・・』

『今度飯奢めいじってつてくれるなら、隣座りんざらしてあげるよ（笑）』

『な！！！なんてやつ・・・でも・・・まあ・・・仕方がない・・・』

【それに・・・翔の横だし良いか・・・】

『じゃ・・・じゃあ横に座らして下さい・・・』

『はい！！！！名様ごあんなうい（笑）』

私は携帯を閉じ、部屋に入っていく翔の隣に座った・・・

「おそよう・・・葵」

「お・・・おはよう・・・翔」

「なんだよ・・・歯切れが悪いな・・・」

「だって・・・昨日の事もあるし、今日だって・・・」

「はあゝ」

はあ！！いきなりだった、私の頭に翔の手が重なり、撫でられたのだ
私はいきなりの事で心臓がバクバク言っている・・・

「なに言ってるんだよ・・・らしくない、おれとお前の仲だろうが・・・」

「いちいちそんな事で凹むな・・・」

一息私の髪を撫でた後、手が離れた・・・

「うん・・・ごめん・・・」

「それにしても・・・今日の葵の髪・・・」

「うん？」

「クチャクチャだな・・・」

カチン！！！！~~~~~~~~！！！！！！！！

「ゴホッ！！！！な・・・何するんだよ・・・」

カチンときた私は翔の胸めがけて思いっきりグーパンチを繰り出したのだ・・・

「ふん！！レディーに失礼な事言うから悪いのよ・・・」

「うう~~~~」

翔は声にもならない擬音？で悶もたえてえている

『え！！！！そんなに痛かったの・・・』

『やりすぎたかな・・・まあ・・・でも自業自得よね・・・うん！私は悪くない・・・』

そのあと数分翔は机に顔を埋め、グロッキー状態だった

『ちよつと・・・やりすぎたかな・・・あはは・・・』

「ねえ！！翔・・・だ・・・大丈夫・・・」

「何が・・・大丈夫？・・・だ」

「大丈夫なわけないだろうが・・・」

「あはは・・・でも翔が悪いんだからね・・・」

「そうかも知れないけど、やり過ぎだろ!!!」

「う・・・ごめん・・・」

私は翔の胸に手をあてさすってあげた

『・・・翔の胸って・・・案外大きいのね・・・』

『普通にしてる時はわからないけど・・・やっぱり男の子なんだ・・・』

『

「うん？どうした？葵」

「え!!!」

「いや、さすってもらうのは嬉しいけど・・・手つきが・・・変!!!」

「え!!!! ええ~~~~」

私はいつの間にか翔の胸を・・・いや!!!!

『私は何もしてない、絶対何もしてないんだから・・・』

顔から耳から、体中から湯気が出てるみたいに熱くなっていた・・・

「おい・・・おいあおい」

「はあ!!! な・・・なに・・・」

「お前頭から湯気・・・出てるぞ・・・」

ポカン!!!! ブシューーーーー

ダメだ・・・噴火した・・・

「へへ．．へへへへへへ．．あはははは．．．」

「な．．どう．．どうしたんだよ．．．葵．．．」

「おい！！！！戻って来い！！！！葵．．．」

．
そのあと私は授業で何を学んだなんて、聞く方が野暮ってもんだ．
．

．
．
．
．
．
．

私変わったのかなあゝ前だったら男の胸なんかであんな事ならなかったのに．．．

翔だから？翔のだから．．．あんな事になったの???

私の今までの恋愛にはこんな感情は無かった、ただ冷たい感じだけが残る恋

でも、翔と居ると暖かい、というか・・・熱い・・・

熱すぎて、のぼせる・・・

『私の初恋って今なのかな・・・』

私は昨日、翔と話した事を思い出していた・・・

『私って、可愛くないよね・・・』

ちょっとドキッとする事を言われただけなのに

私は嬉しかった、嬉しかったはずなのに・・・あんな態度をとってしまっなんて

今日だって、翔に謝ろうとしたのに、逆にあんなことしちゃったし・・・

「あのさゝ葵・・・」

ドキッ！！！

急に呼ばれてビクッってなってしまった・・・

「な・・・なに？」

「昨日はごめんな・・・ちょっと調子に乗っちゃったよな・・・」

まさかの言葉だった、私が一番伝えなかった言葉を翔は発したのだ

「な・・・なんで翔が謝るのよ・・・謝るのは私の方なのに・・・」

「昨日はごめんね、ホントは嬉しかったんだよ」

「そっかぁ・・・良かったよ・・・でも・・・」

「でも・・・なに？」

「ニヒ・・・葵の水着姿は見たいかもな・・・ビキニの！！！！ニヒ
ヒ」

「・・・」

「・・・それは、私のビキニ姿を見て鼻の下伸ばしたいわけ？」

「・・・いや、そういうわけじゃ・・・」

「もし、そうなら・・・」

「そうなら・・・؟؟？」

「今すぐにも、そのデレデレしたその鼻を切り取ってあ・げ・る
???」

「・・・」

「それとも、ビキニを着た私を襲いたいわけ？」

「それが・・・ビキニを着て襲って欲しいわけ??」

「・・・」

「ふん答えないんだ」知らないようふふふ

「な・・・なんだよ」

「もし襲ったりなんかしたら」

「・・・したら???」

「翔のそれ一生使えなくしてあ・げ・る???」

「それか・・・」

「ひえ!!--!ま・・・まだあるのでしょうか」

「ふふ・・・私が一生そのヤラシイ子を面倒見てあ・げ・る???」

「ひえええ~~~~~」

「勘弁してくださいませ葵様」

・・・そんなに引かれたら逆にショックかも・・・

「・・・それとも」

「まだあるんですか」

「翔・・・本当に私のビキニ姿見たい？」

「・・・まあそりゃね男だし可愛い子のビキニは最高じゃん・・・」

「ねえ・・・翔・・・それじゃ・・・可愛い子なら誰のビキニ姿でも

良いんだ・・・」

「ええ！！！いい・・・いやそういう意味じゃ」

「私のビキニ姿が見たいのは、近くに居る女が私だからなんだ・・・」

「・・・葵」

「翔にとつたら私なんて、世間に五万と居る女の一人にすぎないんだ・・・」

「・・・あおい」

「触らないでよ・・・」

翔が私の肩に手を押いた瞬間、口に出てしまった

「私なんて・・・私なんて・・・」

自然と涙が溢れてきた・・・

私はその場に居るのが嫌になりその場所から離れたのだ・・・

今までなら自分から居なくなったことのない、翔の隣から・・・

「おい！！葵っ！！！！」

翔の声が聞こえたけど、それすら嫌になっていた・・・

『わかってるんだよ・・・翔はそんな事思っていないって・・・でも・・・』

でも、翔の何気ない言葉が私の心を突き刺した・・・

決して翔だけが悪いんじゃない・・・そんなことは分かっている

わかっているけど・・・

『ただ・・・純粹に私を見て欲しいんだもん・・・』

『ただ・・・それだけ・・・そして一言で良いから・・・可愛いつて言
つて欲しいだけなんだもん・・・』

私は人気ひとけのない教室に飛び込んだ

『私なんて全然相手にされてないんだろうな』

そんな事を考えていると涙が止まらなかった・・・

どのくらいこの教室にいるだろう・・・周りからは授業をする声がまだ聞こえてくる

「はあゝあの授業欠席扱いになっちゃったなあゝ」

「翔・・・今頃何してるんだろうなあゝ」

「また翔にひどい事しちゃったなあゝ」

私はなぜか翔が相手だとすぐにむきになる、嫌われたくないんだけど

心で思ってる行動とは逆の事をしてしまう

ホント不器用な女・・・

「・・・・・・・・翔の・・・・・・・・バカ・・・・・・・・」
「」

隣のクラスにも聞こえるほどの声で吠^{ほえ}えてやった・・・

「はあゝすつきりした・・・」

「なゝにが、すつきりしたゝだ!?!」

「きゃ!?!」

ビックリしたあゝそこには、汗だくになり少々息を荒げた翔が私を見ていたのだ・・・

「なにしてるんだよゝこんなところで?」

「なにも・・・してないわよ・・・ほつといてよ・・・」

「はあゝほつとけるわけねえゝだろ・・・それに、どんだけ探したと思ってんだよ」

「ふん！！！そんなの知らないわよ・・・」

「はあゝ可愛くないやつ・・・」

ううゝ！！！やっぱりね・・・私って可愛くないよね・・・

「葵・・・」

「なによ！！！」

「ごめんな、さっきのこと・・・それにおれが葵の水着姿見たいのは、ただ見たいからじゃない」

「そりゃ確かに下心はあるよ・・・男だし」

「でも、想像したんだ・・・葵がどんな水着を着るのかまでは、想像出来なかったけど」

「絶対可愛いだろうなって・・・そんな可愛い女の子をぼくは見た

いなんて思ってたんだ」

「他の誰でもない、葵の可愛い水着姿をね」

「だからさ、もうあんな事いうなよ・・・」

「おれが一度でもお前をただの女とか、五万と居る女の一人とか、そんなこと思ってたことないぞ」

「葵はぼくにとって大切な親友だろうが・・・お前は違うのかよ・・・」

『なによ・・・バカ・・・』

「・・・カッコいい事言いすぎだよ・・・そんなの私が耐えられるわけないじゃん・・・」

私の眼には、もう止める事の出来ないほど涙が溢れている、化粧なんてもう無いも同然だった

・
・
・
・
・

「葵・・・覚えてるか？」

「何を？」

「おれが、お前に話した病気のことを・・・」

覚えている、忘れようにも忘れられないのだ・・・

く友達以上恋人未満く 【初恋】（後書き）

いかがでしたでしょうか^^

少しでも初恋の時にした、ドキドキ感、切ない心、表に出せない事
表現の食い違いなど、感じて、そして思い出してもらえましたでし
ようか^^

良いですね、初恋って・・・

彼女にとったら彼との恋が初恋なのです、こんな形の・・・

何年たっても、何回目の恋でも、初恋みたいな恋をしたいと思うこ
とは

なにも恥ずかしくないと思っているのですよ^^私は・・・

女性のみなさん^^； お手柔らかに評価して下さいませ・・・>
<w

ゝ親友ゝ（前書き）

うゝん擬音の表現って難しいですね^^；

変だ、って思っても流しといて下さい^^

さて、今回の話なんですが、翔と葵の絆のお話です

彼等が友達から親友になった時のお話しですね^^

ぼくは、今回書いていた時不覚にも涙を流してしまいました・・・

少しばくの立場と合うところがあったものですから^^；

それではどうぞ^^

く親友く

あれは私達が2年生の時、冬が近づくある秋の事

私達はすっかり恥ずかしさなど無くなり、気軽に話せるようになっていた

まあでも今みたいに何でも話せる関係・・・とまではいかないのかもしれないけど・・・

普通の友達という関係、まあ私の中では、翔に対しての気持ちはずっと変わってないんだけどね

それでも、当時の私にしたらとても幸せだった

「翔君！！！！」

教室の隅っこでじつと外を眺める翔君を見つけた、私はいつものように声をかけた

「ああ、葵ちゃんか・・・どうしたの？」

「うん・・・ちょ・・・ちょっとね見かけたから・・・翔君を」

「だから声かけてみたの・・・」

「そっかぁ・・・」

「ご・・・ごめん、やっぱ声かけない方が良かった？」

「もしあれなら、どっか行くけど・・・」

「あ・・・ううんごめん、なんでもないよ・・・」

「そう」

「ねえ・・・翔君・・・隣良い？」

「うん・・・良いけど・・・」

私はそれを聞くと、翔君の隣で肩を合わせた

翔君の肩は大きく、私の目線あたりに彼の肩はあった

私は幸せだった、肩を合わせたただけなのに、隣に翔君が居るだけで幸せだった

でも・・・

この時の翔君は普段の翔君とはちょっと違っていた・・・

いつもならその肩の上からあの優しい声が聞こえてくるのに・・・

今日は何も聞こえてこなかった

「翔君・・・なにかあったの？」

「うつん、なにもないよ・・・ちょっと・・・疲れてるだけだから・・・」

「そっかぁ・・・あんまり無理しないでね・・・」

「うん、ありがとう・・・」

そこで会話は終わってしまった

翔君と一緒に居られる事は嬉しいのだけど、やっぱり一番欲しいのは翔君の笑顔だった

今の彼にはそれが無い、確かに今日も彼は優しかった、優しかったけど

中身が感じられなかったのだ・・・

『翔君・・・』

私と話してからずっと彼は空を見ている・・・

『何を考えているんだろう・・・』

その日からの翔君は抜け殻のようだった

私が声をかけても、返事はしてくれるけどそれ以上は何も話してくれなかった

正直辛かった・・・

告白もしていないし、まして付き合ってもいないのだけどなぜか失恋をしたかの様だった

「はあ」

「なにになに????元氣ないね」もしかして痴話喧嘩^{ちわけんか}?

「・・・んなわけないでしょうが・・・付き合ってもいないのに・・・」

「ええ」まだ付き合っていないの????あんなに一緒に居るのに・・・」

「・・・悪かったわね・・・良いの私は今の関係で・・・」

「へえくでも翔君は違うかもよ・・・それに誰かにとられちゃうわよ・・・」

「・・・そんなこと言われても・・・」

私が彼の方を見て溜息をついていると、友達がからかってきた

周りからは私達二人は付き合ってるように見えるらしい

「・・・取られちゃうかなあ？」

「そりゃ！！！！かもしれないでしょ・・・性格も良いし、見た目も悪くないしね・・・」

「好意を持ってる子は居るでしょうね・・・」

「そっかぁ・・・」

「ほら！ここに・・・」

友達は私の頬^{ほっぺた}つぺたを軽く突いてきた

「ぶっ」

「ほら！そんな顔しない、可愛い顔が台無しよ！・・・」

「そんな顔してるくらいなら、彼にアタックしてきなさいよ・・・」

「きゃー！・・・」

いきなり友達は私の背中を思いっきり押し出した、私は勢いあまって彼の横まで来ていた

「・・・あはは・・・翔君・・・」

「うん？」

「・・・・・・おはよう!!--!!」

「え!!--!!」

そういうと私は一目散に逃げて行った

「あははは、なによあれ・・・」
「・・・おはよう!!--!!」

「今何時だと思ってるのよ、もう昼過ぎよ」

「だっていきなり押すからじゃない・・・」

「それでも・・・おはようはないでしょ!!!!」

友達はケラケラと笑っている

「・・・もう!!!!そんなに笑うこと無いでしょ・・・」

「ご・・・ごめん・・・ああゝお腹痛い!!!!」

「もう!!!!知らない」

私はすたすたと歩みを進め友達を置いていく、友達もまた私を追いかけてきた

「……ごめんって、だから待ってよ」

「……はあはあ、やっと追いついた……」

「でもさ、ホントどうしちゃったんだろうね……翔君……」

「うん……」

「ま……まさか……恋の悩みとか……」

「もう……!!……いい加減にしないと怒るよホント……」

「ごめん……ってもう怒ってるじゃない……葵」

その後私達は、ああだこうだといろいろ話していた……

『翔君・・・ホントどうしちゃったの・・・』

・
・
・
・
・

それから数日後、私は普段歩かない廊下を歩いていた

そして、廊下の角を曲がった時だった

ガッシャーン!!!

ビクッ!!!!私は心臓が破裂しそうなくらいビククリした

そしてその後すぐのことだった・・・

「くっそー！！！！おれは！！！！どうしたら良いんだよ！！！！」

その言葉の後に・・・ドーン！！！！

もの凄い音がした・・・それも何度も・・・

私は少し恐怖を覚えた、でも気になって仕方がなかった・・・

私は恐る恐るその音の鳴っている教室へと足を進めた

その部屋はもう使われていない教室で、半分物置みたいになっていた

相変わらずあのドーンという音は聞こえていたけど

私が教室の前まで来た時にはもう音は鳴り終わっていた・・・

私はドアの前で何回も深呼吸をして何度も何度も心を落ち着かせていた・・・

その時だった！！！！

ガラガラ！！！！ドーン！！！！

いきなり目の前のドアが開いた、それも凄まじい勢いで、まるで雷が鳴ったかのようにドアが開く

「キャ！！！！」

私は瞬間的に驚きの声をあげ、その場所に立ちつくしてしまった・
・

『どうしよう・・・足が震えて動かない・・・』

私はとっさに頭を下げてしまった

そして私の足の先、ドアの敷居をまたぎ数十？のところに人が立っている事に気づいた

『だれか・・・居る！！早く・・・逃げなきゃ・・・』

『でも・・・足が・・・足が動かないよ・・・』

私は恐る恐る顔を上げた、そこには私がよく知っている人が立っていた・・・

「・・・しょう・・・くん・・・」

私の口から自然と声が出ていた・・・

でも、彼は私が今まで見た事もない眼で私を見下していた・・・

その眼には生気が感じられなく、冷たく、冷酷な眼

鷹たかの様な鋭い眼で私を睨んでいる・・・

怖かった・・・私は声を出す事が出来なかったのだ・・・

彼は私を睨んだ後なにも言わず去っていった・・・

彼が去って行く時私は見てしまった、彼の右手に巻かれた布の様なものが

そしてそれには薄く赤いものがついていたのだ・・・

私は何も出来なかった、彼が何に悩み何でこんな行動に走ったのか・
・

そして、あの鷹の様に鋭く、冷酷で冷たい眼

私はしばらくの間その場から動く事が出来なかった

・
・
・
・
・
・

あの日私が見た翔君のもう一つの顔

何物も近づけない鋭い目、漆黒の瞳に映る冷酷さ・・・

私を知っている翔君はどこにも居なかった

私は恐怖を覚えていた、あの眼で見下されたあの日から

翔君の顔をまともに見る事が出来なくなっていたんだ・・・

私はどうしたら良いかわからなかった

私の中の翔君はまだ私の中で暖かい笑顔で微笑んでいる

私は見たかった、私にくれるあの笑顔を

私が初めて心から会いたい、傍に居たいと想った男性^{ひと}

私は彼に救われたから、彼の存在がなかったら今の私は無かったと思う

だから・・・

『今度は私が彼を守ってあげたい!!!』

彼にどんな過去があろうと、どんな悩みを抱えていたとしても・・・

・
・
・
・
・
・

その日私は翔君を探していた

あの日以来、彼との間に少し距離を感じていたのだけど

彼とこれ以上離れたくない、そんな想いの方が強くなっていたから

彼は最近授業中でもボォーッとしてることが多くなっていた

あの日私が見た彼の眼、あの鋭い眼はあれ以来見たことは無い

けれど、それと同様に彼から笑顔も消えてしまっていた

『翔君・・・笑顔を見せてよ・・・』

『私にあなたの、その笑顔を』

『私に生きる希望を与えてくれた、あなたの笑顔を・・・』

『笑ってよ・・・しょうくん』

胸の奥が少し苦しくなった

彼を思う度、^{たび}私の心は震えていた

そんな時だった、ある教室の横を通った時

ふと視線が一人の背中をとらえた

あの背中は良く覚えている

私がいつも追いかけていた背中だから

私は一歩足を進めた、教室には彼独り^{ひとり}

誰も居ない部屋に彼は居た

真ん中少し後ろの窓際の席、彼がいつも座っている席だった

机に右ひじをかけ、じっと外を眺めている

私は、いつものように声をかけようとした・・・

その時、彼は今まで見ていた空から視線を外し机の方に視線をそら

した

そして、両肘をつきおでこに両手を添えた

その直後だった・・・

私は初めて見た、男の人が顔をクチャクチャにし大粒の涙を流している所を

私には何ができるのだろう、こんな時何て声をかけたら良いのだろう

心の中で何度も何度も繰り返し問いかけていた

でも・・・

何も思いつかなかった、でも私は彼の全てを受け入れる、そう決めていた

私は躊躇ちゅうちゅうしなかった

私は彼の傍に行き、彼の背中を包むように優しく抱きしめた・・・

彼は驚きのあまり私の手を振り払おうとした

でも、私はそれ以上の力でもう一度抱きしめた
そして私は彼に言った・・・

「大丈夫だよ・・・翔君・・・私があなたを守ってあげる」

「あなたが、私の事をなんとも想っていないなくても」

「あなたに、あの時のような眼で睨まれたとしても」

「私は、あなたの優しい笑顔が見たい・・・」

「もう、独りで泣かせたりしないから・・・」

「翔君、私をあなたの傍で、あなたの笑顔を見てても良いですか？」

「あおい・・・ちゃん・・・」

「・・・ありがとう・・・」

彼から返ってきた言葉は短いものだった

けれどそれで充分だった

彼と話す喜び、彼と触れられる嬉しさ

それを再び感じる事が出来たからだ・・・

その後お互い泣き崩れた・・・

彼はしきりに私に言っていた

「ごめんね、葵ちゃん・・・あの時怖い思いさせちゃったね・・・」

「あの時ドアを開けた時まさか葵ちゃんが居ると思わなかったんだ・・・」

「ぼくは必死に自分を抑えていた・・・」

「あのままだと葵ちゃんに何かしてしまいそうで・・・」

「ごめんね・・・怖かったよね・・・」

私の眼にまた大粒の涙が溢れてきた

あの時見た冷酷な眼

あれは私を睨んだものではなく

翔君なりの私への配慮だったのだ

「もう良いよ、翔・・・」

「・・・今・・・翔って・・・」

「うん！！ねえ、止めない??？」

「え？」

「その葵ちゃんって言い方・・・」

「・・・どういふこと？」

「私は呼びたいな・・・翔って・・・」

私は満面の笑みで翔君に微笑みかけた

「うん・・・わかった」

「だから・・・翔も呼んで・・・葵って・・・」

「・・・葵・・・ちゃん・・・」

「え~~~~~」

「なんで、ちゃんつけるのよ」

「・・・あはは、何か恥ずかしくて・・・」

「だゝめ、ねえ!!翔・・・言ってみて・・・葵って・・・」

「・・・あおい・・・葵・・・」

「えへ!!・・・うれしい・・・翔君・・・」

「あ!!今翔君って・・・」

「あは・・・今は、わ・ざ・と・だよ・・・」

彼の顔に笑みが溢れていた

「やっと、笑ってくれたね・・・」

「あはは・・・もう、かなわないな・・・葵には・・・」

「でしょ!?!」

私もまた満面の笑みで彼に微笑んだ・・・

・・・
・・・

「・・・・・・葵・・・聞いて欲しい事があるんだ・・・」

さっきまで、満面の笑みだった翔君はふっと真剣な顔になり私に声をかけた

「・・・うん、わかった・・・」

そういうと、彼は少しずつゆっくりと話し始めた・・・

「葵には理解できないかも知れないんだけど、ぼくね病気なんだ・・・」

「!?!?!」

「ああゝ病気っていつでも死ぬような病気でも、体を傷つけるよう

な病気じゃないんだ」

「ぼくの病気は、精神的なものなんだよ・・・」

「精神的？」

「いわば鬱病^{うつびょう}ってやつ・・・」

「まあぼくの場合病院に行ったことはないから、詳しい事はわからないんだけどね・・・」

「あれは、ぼくが中学生の時・・・」

「ぼくには、好きな子が居たんだ、でもその子にこの想いを伝える事が出来ないでいた・・・」

「その子はクラスでも人気で性格も良い女の子だった」

「ぼくは、その子に惹かれていた、でもその子の周りには他の女の子や男の子が常に居た」

「ぼくは、人見知りで話すのが苦手だったから近づく事すら出来なかったんだ」

「そんな、ある日彼女がぼくに声をかけてきた」

「ねえ、翔君・・・翔君は好きな子とかいるの？」

ぼくはビックリした・・・

「・・・すき・・・な子???」

「うん、そう!!--!」

「・・・なんで?何かあるの？」

「ううん、これといってないんだけどさ・・・何となくね・・・」

ぼくは、いよ決して気持ちを伝える事を決めた・・・

「ぼくは・・・君の事が・・・・・・すきなんだ・・・」

「え!!--!私!!--!」

「うん!!--!」

「ん〜ん〜ごめん・・・無理かな・・・」

「・・・そつかあ・・・」

「ごめんね・・・」

あつけなかった、ぼくの思い続けていた想いが散った時だったんだ・
・

でも、それだけならまだ良かったのだけど・・・

その次の日、ぼくが学校に行くとクラスの女の子達がぼくの方を見て笑っていた

単に笑っているんじゃない、なにか獣でも見るかのように

汚いものを見るかのような視線だった・・・

授業中でもぼくの周り四方八方から視線が突き刺さる、ぼくは言い知れぬ恐怖を覚えた

そんなある日、階段を上がっていると上の方から聞こえてきた言葉にぼくは愕然とした

「あいつさゝきもいよなあゝマジ馬鹿じゃねゝ」

「確かに、あんなやつあの人が相手にするわけねゝじゃん」

「ホントだよなあゝあいつだけだぞ・・・」

「あの人が一番嫌ってるやつがあいつだってことを知らないのは・・・」

「ホント・・・バカだよなあゝ翔のやつ・・・」

『!!!!!!!!!!』

ぼくは、全身が震えあがる思いがした・・・

その日からぼくは、学校に行くたび周りから鋭い視線を向けられるようになったんだ

肉体的ないじめではなく、精神的ないじめを受けていた

まあそれは2か月もしたら消えていたのだけど、ぼくの中では今でも残っているんだ

「・・・葵ごめん・・・正直言うとね葵もあの子と同じなんじゃないかと思ってたんだ・・・」

「いつか、あの時のようになるんじゃないかと思ってた・・・」

「まあ原因はそれだけじゃないんだけどさ、そんな事考えてたら、また陥っていたんだ」

「あの時から始まった、この病気に・・・」

私が聞いた彼の過去、そして彼が抱える病気の事

正直ショックを受けた、確かに思春期時代の恋愛での失恋など珍しくはない

でも、その件で彼がそんないじめを受けていたなんて・・・

そして未だに彼の中にある苦しみと病魔

私はその女と同じ事を当時していたのかもしれない・・・

そう思うと身が震える思いがした

その女がした事で翔君が傷つき

私が当時していた事で誰かが傷つき悩み苦しんでいるかもしれない
そう思うと私は・・・

「ごめん・・・翔・・・ごめんね・・・」

「なんで・・・葵が謝るのさ・・・」

「私もね・・・同じ事をしていたの・・・当時、私はその女の子と
同じような事を・・・」

「・・・ごめん翔・・・」

「私なんかが翔を守るなんて・・・おこがましいよね・・・」

「・・・あおい」

「ごめん・・・」

私はその場から逃げ出したくなり、その場から離れようとした

その時！！！！

「・・・葵、傍にいてよ・・・」

「葵、さっき言ったじゃん、ぼくを守ってくれるって・・・」

「何があっても、ぼくにもう独りで泣かせないって・・・」

「言ったよね・・・葵・・・」

「で・・・も・・・私は、私にはその資格が・・・」

「資格がなかったら、傍には居てくれないの？」

「ぼくは、葵に傍に居て欲しい・・・」

「今までみたいに、ぼくの友達でいて欲しい」

「私で良いの？」

私はそれを彼に聞くと満面の笑みを浮かべて私を見た

私と翔はその日、お互いの過去について話した、多分全てではないのだと思うけど

私は翔を、翔は私の過去を知り、それでもなお私達は友であり続けたい

そうお互い心に決めたんだ、初めて出来たかも知れない

心から気を許せ、楽しい事も悲しい事も全てぶつけられる存在

親友というものを・・・

ゝ親友ゝ（後書き）

どうでしたでしょうか・・・

いろいろ考えさせられる内容だとぼくは思っていますが^^；

人それぞれ考えもそれぞれだと思います^^

これを読んでいろいろ考えて頂けたのなら、ぼくはそれだけで嬉しいです

それに、こんな形ではあるけど、親友と呼べる人に出会うというのは

それだけで素晴らしい事だと思うのですよ、私はね^^

くそれぞれの想いく（前書き）

お待たせしました^^ 待ってないかもしれないけど・・・；；

まあそれは置いて・・・

さて今回は、それぞれの想いということで、親友になってからの

翔と葵の想いというものに触れてみました^^

親友だけど・・・とか、その辺の気持ちの部分を書いたつもりです
^^；

あとは、今回も2人のドタバタ劇が拝めるかも・・・^^

では^^ ご覧ください><w

くそれぞれの想いく

あの日、私と翔はたくさん話した、過去の辛い話だけじゃなく

楽しかった思い出も・・・

それに忘れるはずもない、あの日初めて親友と呼べる人が出来たのだから・・・

・
・
・
・
・

「うん、覚えてるよ・・・」

「私が忘れるわけじゃない・・・」

「初めてだったんだよ・・・ぼくが自分の病気について人に話すなんて・・・」

「親にも言っていないし、言うつもりもない・・・」

「翔・・・」

「でも、今はね、消えてるんだよ・・・」

「葵が・・・傍に居てくれるから・・・かな・・・」

「・・・うつさい！！！」

「そんな・・・恥ずかしい事平気で言うなっの・・・」

私は一瞬ドキッとした、翔と話したあの日から

私と親友という関係になっってから、ますます私は彼に惹かれていった

もう、親友なんて関係じゃ物足りないところまできている・・・

でも、この関係を壊したくない

この関係が壊れるくらいなら、私は翔の親友であり続けたい

そして、ずっと傍に居たい・・・

親友であり、彼を心の底から想う“想い人”その狭間はざまで私は心地良
い温もりと

切ない女心とがひしめき合っている・・・

彼の笑顔が見たい

彼の傍に居たい

彼の愛を受けたい

彼を幸せにしたい

彼と幸せになりたい

でも・・・

私が彼にそれを告げた時、彼は私から離れていってしまうかもしれ
ない

そんな不安が襲ったび、私の胸は苦しくなるんだ・・・

「うん？どつした？葵・・・」

「え？何？」

「お前、俺の裾^{すそ}凄い力で握ってるの気づいてる？」

無意識だった、私は翔の裾をこれでもかってほど力を込め握りしめていた

「ああ・・・ご・・・ごめん・・・」

私はとつさに裾から手を離し、少し距離をとった・・・

「気にすんな、でも・・・破れるほど力入れんなよ・・・」

翔はそういつとニヤニヤした顔で私に言う

「そ．．そんなに力出してないもん．．．翔のバカ！．！」

「あはは、そうかあ？」

「でも、もし何なったら言えよ．．．」

「おれはお前の親友だからな．．．」

「うん．．ありがとう．．．」

今は言えない．．．言えないんだよ．．．．．翔

．
．
．
．
．

『親友か・・・』

ぼくにとって、一番嬉しい言葉であり

一番欲しかった存在・・・

そして、一番怖くずっと避けていたものだ・・・

『まさかぼくに親友と呼べる女性ひとが出来るなんて・・・』

ぼくは、思っていたんだ・・・

『友達なんて、所詮見掛け倒しにすぎない・・・』

『いつか、離れていくもの・・・』

『自分がどれだけ思っていたとしても・・・』

『それなら、初めから作らなければいい』

確かに中学、高校、大学と友達は居たけど、それは学校でだけの話し

一歩学校を出たら全く関わりをもたなかった、卒業した今なんて

居るか居ないか分からないくらいだ・・・

『葵はどうなんだろう・・・』

『葵はあの時・・・』

『大丈夫だよ・・・翔君・・・私があなたを守ってあげる』

『翔君、私をあなたの傍で、あなたの笑顔を見てても良いですか？』

あの時葵がぼくに言った言葉、あれはまるで親友というよりも好きな人に向ける言葉のように聞こえたんだ・・・

『・・・葵、あおいは、ぼくの傍から居なくならないよな・・・』

今のぼくには確信は無いんだけど、葵がぼくに対して少しでも好意を持っているのは知っている

でも、今のぼくにはその思いに応える事は出来ない・・・

葵は本当に良い子で明るく元気で可愛い、彼女にするなら最高の女性だと思う

もし両想いなら尚更だ・・・

でも、ぼくは出来ない・・・出来ないんだ・・・

葵との楽しい思い出を、思い出だけにしたくないから・・・

もし、付き合ったら・・・

それは楽しいだろうと思う・・・

でも、もしいつか別れる事になってしまったら・・・

今までの思い出が辛さとして思い出されてしまう・・・

そう考えると、ぼくは・・・

それまでに、他の男にとられるかもしれないという思いも無いわけ
ではないのだけど

葵に男が出来て、ぼくから離れていても・・・

きっと葵は友達にはなってくれるだろう

そう考えると、付き合って・別れて・嫌われて離れるよりは全然良
かった・・・

「・・・葵・・・君はずっと、ぼくの傍に居てくれるのか？」

「・・・うん？・・・何か言った？翔・・・」

「な・・・何も言ってないけど・・・」

「そう？」

「聞こえたのかなあ・・・」

・
・
・
・
・

「翔・・・」

「私はあなたの傍にずっと居たい」

『恋人同士になれなくても良い、私は翔の隣にずっと居たい』

『でも・・・もし出来るのであれば、私は・・・翔の彼女になりたい・・・』

私は彼が言った言葉が聞こえてしまった

ホントにかすかな声だったけど・・・

嬉しい言葉のはずなのに、なんだか寂しくなってしまったんだ

気づけば私も翔も、黙り込んでいた

何か話そうと思うんだけど、全然出てこない

いつもなら翔と話したい事が勝っているから、どんどん話しのネタが出てくるのだけど

『ああ〜じじい〜』

おそらく、翔も考えているんだろう

顔には出さないけど、なんだかそわそわしているのがわかる……

「あの……」

「あ……ぞうじ……！」

「いや……そっちから……」

見事だった、見事に全てかぶっていた……

「ふは・
・
八八八
・
・
・」

「全てかぶつてゐるし……」

翔が笑っている・・・

それを見た私も思わず笑ってしまった

「あはは・・・そうだね！！！！全部かぶったね・・・」

「ああゝホント・・・楽しいよ！！！！お前と一緒に居るのが・・・」

「私も楽しい・・・翔と一緒に居る時が一番楽しい・・・」

「葵・・・」

「ありがとうな・・・葵・・・」

「私こそありがとう・・・翔・・・」

「「あははははは」」

「おれ達変だな・・・」

翔がまた私の方を見て笑っている・・・

この笑顔だ、この笑顔が私を癒してくれる

ホントバカみたいな顔してるくせに・・・この笑顔だけは大好きなんだよねえ」

「ハハハ、ホント変だねえ」

それから数分の間、お互い変だの変わり者だのとわけのわからない会話を延々と繰り返していた

「さて・・・変な事言ってるのはここまでにしますか・・・」

「そだね！！！！」

「なあ！！葵。。。」

「うん？どうしたの??？」

「葵は夏休み何か用事あるのか？」

「夏休み・・・」

忘れていた、あと1週間ほしたら夏休みだ・・・

「ああ！！忘れてた・・・」

「おいおい、御嬢さん！！！！学生が夏休みを忘れちゃいけないでしょ・・・」

「んなこと言っても、忘れてたんだもん・・・」

『夏休みかあ』

正直私は夏休みが来るのが、嫌ではないんだけど・・・

あんまり良い気分ではなかった

なぜなら、大学の夏休みは2か月ありその間ずっと翔とは離れ離れなのだ・・・

249

『2か月も翔と会えないのか・・・』

『もつと家が近かったらなあ』

「で・・・葵は夏休み用事とかあるのか？」

「これといってないよ・・・」

あるわけがない・・・夏休みの事なんて忘れていたし、そもそも

翔の居ない夏休みなんて、楽しくないし・・・

「そつかあ・・・ないのか・・・」

「なによ・・・悪い？」

「いや、悪かないけど」

「ふん・・・翔の事だから翔は何かいろいろあるんでしょうけど・・・」
「」

つい皮肉を言ってしまった

『はあくなんて可愛くないんだろう・・・私って』

「ぼくも何も無いけど・・・」

「ふんそうなんだ・・・」

『はあゝお互い暇人よねえゝホント・・・』

「・・・葵、今お互い暇人って思っただろ・・・」

『!!--!!』

「お・・・思っでないし・・・」

「あはは、バレバレだな!!--!!」

「・・・もう・・・うつさい!!!」

「『だって、翔が居ないんじゃない? 楽しくないんだもん・・・』」

「うん? なにか言ったか?」

「・・・んゝもう!!! 何にもない!!!」

「そうか!!!」

「・・・なあ・・・葵」

「・・・今度は何!!!」

「・・・こ・・・怖いって・・・」

「・・・」

「で、何？」

「夏休みさ、いろいろ遊びに行かないか？」

「え！！！」

「去年の夏はおれ達出会ったばかりで、遊べなかっただろう・・・」

「それに、今年で最後かもしれないだろ・・・おもいつきり遊べる夏はさ・・・」

そう、来年私達はうまくいけば4回生、就職の事とか学校の事とかで考えないといけない

そうになると、来年の夏は遊べないかもしれないからだ・・・

「そうだね・・・最後の夏かもしれないんだね・・・」

最後という言葉に私は少し切なくなった、私と翔の関係もあと1年半になってしまうのかと

そう思うと胸が苦しくなる・・・

「なぐに、しょぼけてるんだよ・・・」

「これから2ヶ月間遊び倒すんだよ!!!!」

「でも・・・翔と私家遠いじゃん・・・」

「あん？ああ、気にすんな・・・遊びに来るから!!!!」

「でも、お金どうするのさ・・・」

「うん？気にすんなって、定期あるしさ・・・」

「親には最後の夏かもしれないからって言って、夏休み分の定期代も出してもらった・・・」

「そうなんだ・・・でも・・・大変でしょ来るの・・・」

「・・・なんだよ、葵はおれと遊びたくないのか??？」

「・・・いや、そういう意味じゃ・・・」

「『むしろ・・・ずっと一緒に居たいし・・・』」

「なんて??？」

「なんでもない！！！！てか、遊びたくないなんて言っていないでしょが・・・」

「ははは、だよなあ。葵がそんなこと言つとは思わないからな・・・」

「ふん、なによそれ・・・なんか。。嫌」

「何がだよ・・・」

「まんまと翔の言いなりになつてゐる気がして・・・」

「まあ、気にすんな・・・」

「き・・・気にするでしょ・・・普通!?!」

「そう?」

「でも……従順な葵って……そそる!!!!」

翔は気持ち悪い顔でニヤニヤと笑っている……

『はあ〜ホントこつこつ時の翔って……きもい!!!!』

「!!!!ど、どついう意味よ……」

「そのまんまだよ……可愛くなって言ってるの」

「ふん、そんな事言っても何も出ないから……」

「それに……さっさと下ネタ言つのやめて……」

「なにが????いつ誰が下ネタなんて言ったのさ」

「言ったじゃん、なにが、『従順な葵って・・・そそる!!!』よ・・・きもすぎ!!!」

「が!!!きもいつて言われた・・・軽く・・・いやかなりショック・・・」

「翔がイジジしております・・・地面に座り込んでイジジしております」

「実況は私、葵が務めさせて頂いております」

「私が先ほど翔選手に言い放った『きもい』という言葉で、グロッキー状態であります」

「さあて、翔選手立ち上げれるか、どうなんだあ?」

「おおっと動きがありました・・・翔選手、じわじわではありますが出ち上がってまいりました」

「翔選手が中腰位になった所で・・・・・・そこで屈伸!!!」

「なぜそこで屈伸なのでしょう・・・私には全く理解できません・・・」

「屈伸を5回!!!次は何が出てくるのか」

「おおーっと翔選手完全に立ち上がりました、完全復活です・・・
そしてこちらを向き」

「Vサインをしております・・・古いですが、ダサいです・・・そして・・・
きもいです!!!」

「おおーっと翔選手いきなり倒れた、これはもう起き上がる事が
できません」

カンカンカンカン

「ゴングが鳴りました、やりました・・・葵の実況が翔選手を再起
不能にしました」

「・・・っておい!!!葵・・・」

「なに?」

「可愛い女の子が再起不能とか言っな・・・」

「あは・あはははは・・・まあ気にしない気にしない」

「お前だつてさうつと下ネタ言つてんじゃない・・・」

「てか、きもい言っな、それに・・・あの実況・・・」

「だって〜キモイんだもん、で実況が？」

翔は親指を上むきに立て合図をしている・・・グッドの合図らしい

「・・・それも、古いし!!--!!」

「ちゅん・・・」

「あ!!また沈んだ・・・」

そのあと、またまたバカな話をしばらくの間していた・・・

「で・・・夏休みの話しなんだけど・・・」

「ああゝそつかあゝ忘れてた・・・」

「んもゝこれがメインなのに、なんでいらん方向に話がいくかねえ」
「」

「だってゝ翔、面白いんだもん・・・」

「はいはい、さいで御座いますか・・・」

「で・・・夏休み何するのさ・・・」

「よくぞ聞いてくれました!!!」

「いや、良いからもうそういつの良いから話して・・・」

「んだよりのり悪いな」

「今年の夏さ今まで行けなかった事とか、出来なかった事とかしな
いか？」

「例えば？」

「そだなゝ観光とか、キャンプとか、花火見に行ったり、海行っ
たり、スパ的なプールに行ったり」

「旅行行ったり、後は・・・」

「ちょっ…ちょっと待ってよ…」

「なに？」

「それ、誰と行くのよ??？」

「誰とってって…そりゃ葵と一緒に決まってるじゃん…」

「2人だけで??？」

「うん? ああ、良いよどこでも…2人でも良いしだれか誘っても良いしさ…」

「流石にキャンプは2人じゃ楽しくないしね」

「いや!!そういう意味じゃなくて・・・」

『花火は良いけど、旅行とか、海とか、プールとかちょっとまずくないか・・・』

『まあお互い恋人はいないから、その点では良いけどさ・・・』

『でも、それでも良いか・・・翔と一緒に居られるなら・・・』

『あ!!!!もし海とかプール行くて事は・・・水着いるじゃん!!!!』

『もしかして、それが狙い!!!!』

『はあゝ翔ったら』

「んじゃ、今年の夏はそういうことで楽しもうな、葵・・・」

「うん、わかったよ・・・しゃあないから、付き合ってあ・げ・る
???

「ははは、ありがとう!!葵」

「うん!!!!」

お互い満面の笑みを浮かべていた・・・

・
・
・
・
・

『葵、良い思い出たくさん作ろうな・・・』

くそれぞれの想いく（後書き）

最初に言っときます、葵は翔にデレデレです^^w

こんなにデレデレでいいんかいつてほどデレデレです^^w

親友でこんなにデレデレなのって居るのかな・・・と思うほどですが^^;

その辺は言いつこなしで^^w

あと最近メインキャラがどっちなのかわからなくなってるのも

秘密です^^w

では^^また次回まで、次回は・・・

〽夏の日の呼び出し〽（前書き）

どうも〽〽〽

お待たせしました・・・

今回第10部目を投稿する事が出来ました〽〽

さて〽〽今回のお話は・・・もう!!カップルです!!!!

話す内容、しぐさ、表情など・・・もうカップルに近いです・・・

しかも、超がつくほどのバカなカップルです（笑）

まあ傍から見たら・・・ですけどね〽〽；

さて、今回は皆さん・・・思う存分イライラして下さい〽〽

そして、羨ましがって下さい><w

そう感じてくれたなら、ぼくの勝ちですよ><w

まあぼくは書いている時には既に負けてましたけどね・・・（爆笑）

そう、ぼくも葵に悩殺されましたw><w

気になる方は読んでくださいね><w

では、どうぞ^^w

「夏の日の呼び出し」

「よし！！今日から待ちに待った夏休み」

「テストも終わったし！！！」

「思いっきり遊ぼうぜ・・・」

「なあ・・・葵！！！」

「んもーちょっと待ってよー」

今日から夏休みが始まった、先週のテスト週間は本当にしんどかったけど

それも、もう終り今日から約2か月の夏休み・・・

先週のテスト週間の翔ときたら、そろもつ大騒ぎ！！！！

私は難なく出来ただけ・・・

翔なんて・・・

『ああ〜もうダメだ〜全然わかんねえ〜』

『この週だけ無くなれば良いのに!!!!』

『・・・そうだ!!! 葵・・・お前の頭と入れ替えてくれ!!!!』

とか・・・またまた意味の分からない事を延々と言っていたり

『てか・・・葵〜勉強教えてくれ〜』

とか・・・私にすがってきたり・・・

仕方がないので、一緒に勉強をしたのだけど・・・

これが・・・また・・・

『翔ってホント・・・・・・バカなんだよね〜』

『行動も、考えもバカだけど・・・頭もバカなんだよね』

『そんな彼でも取り柄とりえはある・・・ある・・・はず・・・』

『・・・あるのかな』

「おい、葵、何してんだよ!!!!早く行くぞ」

「だから、ちょっと待ってて!!!!」

・
・
・
・
・

今日の朝いきなり翔からメールが来た・・・というか、メールなら

良いんだけどねえ

『よう!! 葵・・・今日暇か?』

『暇だよな、そうだよなあ、じゃあ今日そっち行くから遊ばうぜ
!!!!』

みたいな!!!!

こんなメールが朝の7時過ぎに来た・・・

ってか・・・はええ〜つつの!!!!

そんな時間寝てるっての・・・

それで、終わったら良かったんだよ・・・

私が翔からのメールを無視・・・いや放置してから数分後

また、宵の世界に落ちかけたその時!!!!

「……………ん……………も……………」

“ピッ!!”

「何!?!今何時だと思ってんのよ!?!?!?!?!」

もう我慢出来なくなつた私は電話に出てすぐに怒鳴りちらしてしまつた……

「何時つて……7時!?!」

「早いでしょ……夏休み初日の朝なのに!?!」

「まあそんな怒るなつて……」

「で……今日暇か?」

「・・・まあ・・・暇っちゃゝ暇だけど。。。」

「ならさー!!!!さっきもメールで送ったけど、そっち行くから・・・」

「何しに来るのよ・・・」

「・・・何しにつて・・・遊びに行くに決まってるじゃん!!!!」

「誰と遊ぶのよ・・・」

「えー!!!葵はほんと遊びたくないの!!!!」

「・・・いや・・・そんな事はないけど・・・」

「どっに行くのさ・・・」

「どっつて……あははは……」

「はあゝ決めてなかったのね……」

「すみません……」

「……わかったわよ……私がいろいろ案内してあげるよ!!!!」

「おお!!ホントありがとう」

「ぼくさゝそっちの大学行ってるけど、そっちの観光地行った事ないんだよね」

「観光地ね」

「そっちいっぱいあんじゃん！！！」

「わかったわかった！！！！」

「で・・・いつ来るの！！！！」

「こつちを8時位に出るから・・・そっちに着くのは10時位じゃないかな・・・」

「オツケーじゃあ10時に・・・どこに行けば良いの？」

「じゃあ駅前で！！！！」

「ほい！！！！了解」

「・・・ねえ！！！！」

「うん？」

「着て来て欲しい服とかある???」

「え!!!!リクエストして良いの？」

「うん、良いよ・・・大体の物は持つてるよ」

「ロリ物から大人系、セクシー系、フリフリ系まで・・・」

「おお!!!!!!」

「・・・まあ嘘だけど・・・」

「・・・嘘かい!!!!!!!!!!」

「ははは!!!!!!!!でもそこそこ普通のならいろいろあるよ・・・」

「じゃあ・・・ミニスカで・・・」

「・・・はあくホント好きだね・・・そついうの!!!!!!!!」

「ふん!!!!!!!!良いじゃん・・・それに夏だし・・・暑いから良いじゃん」

「葵の生あ・・・いや・・・ミニス・・・いや・・・」

「ねえく翔・・・」

「何？」

「ヤラシイ事考えてるでしょ・・・」

「へえ！！！そ・・・そんなことないよ・・・」

声がかすれているので・・・バレバレだ！！！！

「ふうんそんなに、私の生足とミニスカ姿が見たいんだ！！！！」

「・・・・・・」

「なによゝ見たくないの？じゃあジーンパンで行こうかな」

「ううゝ見たいけど・・・」

「見たいけど？」

「・・・心配・・・」

「心配？何がよ！！！！」

「そら心配だろうが・・・まあ葵はぼくの彼女ではないけどさ・・・」

「それでも、周りの視線が危険じゃないか・・・」

「・・・ハハハハハははははは」

「そんな事で心配してたの！！！！」

「なんだよ、そんな事って・・・」

「大丈夫だよ！！！いつでも着てるしさ・・・」

「でも・・・ありがとう！！心配してくれて！！！！」

「・・・おう、当たり前じゃんか！！親友だしな・・・」

「・・・何それ！！親友じゃなかったら心配してくれないんだ・・・」

「・・・いや、そういう意味じゃ・・・」

「ハハハ、冗談よ！！冗談・・・」

「じゃあ、とびっきりの可愛いミニスカで行ってあげる」

「翔が惚れちゃう位可愛い格好で！！！！」

「ははは、それは楽しみだ！！！！」

「・・・ねえ・・・翔ってオヤジ臭い!!!!」

「なあ!!!!」

「だってミニスカくらい見てるでしょうが!!!!」

「それに、私なんかより彼女作ってさっと思っ存分見せてもらえば良いじゃん・・・」

「・・・んなこと言ってもさっ良いじゃん・・・」

「まあ良いけど・・・でもさっ彼女作らないの？」

「うん。今は良いや・・・今が楽しいしね!!」

「そっかあ!!!!」

「おおっと!!もうこんな時間か!!!!」

「じゃあ、また後でな・・・」

「うん、わかった・・・気をつけてね・・・」

「あいよ!!!!」

「今が楽しい・・・か!!!!」

「翔らしいね・・・」

「・・・彼女を作れば良いなんて」

「思ってもない事言っちゃったなあ」

「はあ」

「・・・さて！！準備しますか」

・
・
・
・
・

葵との電話が切れた後ぼくは少し考えていた・・・

「彼女か・・・」

まさか葵の口から出るとは思わなかった・・・

毎年の事なのだけど、夏休みはあまり嬉しくない・・・

確かに休みは嬉しいのだけど・・・

あまりにも長い休みはぼくをボロボロにしてしまうから・・・

休みが続き、何もする事がなくなったばくは、じほうじき自暴自棄きになってしまっ
たのだ

そのせいで、あの病気が出てきてしまう・・・

「はあ、今年は大丈夫かなあ」

葵に今日メールしたのは、ただ遊びただけじゃない・・・

それもあるんだけど・・・

独りでいるのが嫌だったからなのかもしれない・・・

『ごめんな・・・葵』

『おれ・・・弱虫だよな・・・』

・
・
・
・
・
・

『ホント急だよねえ〜全く・・・』

私は翔からの電話を切った後少し呆れていた

『男の子ってホント好きだよね〜ミニスカとか・・・』

『ミニスカかあ〜何色が好きなのかなあ〜あやつは・・・』

『ん〜じゃあこのフリフリのついたミニスカにするかな・・・』

『ふふふ!!!!絶対翔のやつ・・・終始ミニスカから目が離せない
い的な感じになるな・・・うん!!!』

私が選んだミニスカは、裾の辺りにフリフリが付いていて色は黒色
!!!!

『ロリフリのミニスカみたいなやつになってしまった・・・』

自分で呟いといて何だこのロリフリって・・・

下着の色は・・・ご想像にお任せしますね???

『よし!!--見てろよ~翔め~悩殺してやるから覚悟しろよ~』

・
・
・
・
・

『は・は・はあ・・・はあああっククシヨン!!--!!』

『はあ~誰かぼくの噂してんのかなあ~』

これでもかってほど、大きいクシャミをしてしまった・・・

『葵のミニスカかぁ・・・・・・・・・・』

「どう・・・翔似合うかな～・・・」

「う・・・うん凄く可愛い・・・」

「やあ～ん可愛いなんて・・・翔のバカ！！！！」

「あはは、でもホント可愛いよ！！！！」

「あはー！！やった～うれし～」

『あは・・・あはははははははは』

「ねえ～お母さんあのお兄ちゃん顔がキモチ悪いよ・・・」

「こら！！人に指さしちゃダメよ・・・それに」

「あんな変な人の事見ちゃダメよ！！！」

「はいじゃあキモイお兄ちゃんもう見ない！！！」

「こら！！思ってもキモイと言っちゃダメよ・・・思っても！！！」

電車に乗車中、ぼくの顔は相当キモかったらしく、近くに座っていた男の子に

ストレートに“キモイ”と言われてしまった・・・それに・・・

その傍に座っていたお母さんには・・・

“思ってもキモイと言っちゃダメよ・・・思っても！！！”

って・・・思ってたんじゃない！！！！

その他からも、死線（視線）が多く注がれていた・・・

・
・
・
・
・

『ブルル！！！！』

『今なんか凄い寒気がしたような・・・』

『大丈夫かなあゝ今日・・・翔に食べられちゃわないよね・・・』

『そんなことしようものなら・・・本気で・・・再起不能にしてやる！！！！』

『でも・・・この格好何て言ってくれるのかな・・・』

『何も言われなかったら、どうしよう・・・』

『・・・言われなかったら・・・』

『どついたんねん!!--!』

良い子はこの言葉・・・真似しないでね!!--!

・
・
・
・
・

『ひゃ!--!!--!』

『何今の!!--!』

『今殺気がしたような・・・』

なんか今背中 of 辺りに殺気を感じた・・・

『ん〜いらんこと考えないようにしよう!!--!うん・・・それが良い!!--!』

そんな事いろいろ、妄想・・・いや想像・・・いや考えていると・・・

家を出てもうすぐ1時間半、もうすぐ駅に着く頃だ・・・

『葵、ちゃんと来てるかなあ〜』

『着いてから何十分かして・・・』

『ああ〜ごめ〜ん、遅れっちゃった〜』

『とか何とか言って、来てなかったりして・・・』

『いや!!大丈夫・・・葵を信じる・・・うん・・・葵のミニスカにも会えるし!!--!』

『・・・いや、ミニスカだけじゃないよ・・・うん・・・ミニスカだけじゃ・・・』

そうしているうちに、電車が駅に着いた・・・

ぼくは約束した駅前まで歩みを進めた・・・

さあゝて運命の瞬間です・・・

翔さんはこの場所で葵さんに巡り合えるのでしょうか・・・

葵さんに・・・葵さんのミニスカに・・・いや・・・笑顔に・・・

この階段を降り改札口を出てすぐの場所に彼女は居るはずで・・・

さあゝ本当に運命の瞬間です！！！！彼女は彼の前に現れるのかあ
！！！！

改札口の前に着き、前に顔を向けた時

少し離れた支柱のところに居る女性を見つけた

彼女の横顔は、ぼくの心を一気に惹きこんだ・・・

「キレイ」

ぼくは、無意識のうちに声が出ていた・・・

彼女がこちらを向き、ぼくと葵の眼と眼が合った時

あまりにもキレイだった彼女を見てそれ以上言葉が出てこなかった

「翔!!!!」

ぼくの事を見つけた葵はその凶器ともいうべき笑顔と、普段では見れない服装、化粧や

髪型など、全てが“キレイ”という言葉で表わされるほどの超美人がぼくの目の前に居たんだ

「おゝい!!!!翔・・・起きてますか」

「あ．．ああ！．．！．．うん．．起きてるよ．．．ただ．．．」

「ただ？」

「うん．．．あまりにもキレイだったから．．．言葉が出てこなくてさ．．．」

「な！．．！．．何言ってるのよ．．．翔ったら」

「いつもの葵じゃない．．．」

「．．．そ．．．そうだ！．．！どう？」

「この．．．ミ．．ニ．．ス．．カ？？？」

「．．．う．．．うん．．．とっても可愛いよ．．．」

「そう．．．良かった！．．！」

ぼくはここに来るまでは葵のミニスカ・・・を楽しみに・・・してたのに・・・

・ ミニスカを含めた葵全てがこんなにもキレイだとは思わなかった・

『やられた〜完全に!!!!』

・
・
・

『・・・よし!!!!完全に翔つたら堕ちたな・・・うん!!!!!!』

『私、葵は只今完全勝利宣言を唱えたいとなえたいと思います!!!!!!』

『・・・なんてね!!!!!!』

『てか、あの顔!!!!キモイ!!!!』

『ハハハ、ここまで堕ちるとは・・・うん!!!まだまだいけるわね私も・・・』

『でも、そろそろ起きてもらわないと・・・』

「おゝい!!!!翔・・・起きてますか」

「あ・・・ああ!!!!うん・・・起きてるよ・・・ただ・・・」

「ただ？」

「うん・・・あまりにもキレイだったから・・・言葉が出てこなくてさ・・・」

「な!!!!!!何言ってるの・・・翔ったら」

キレイって、前は可愛いって言ってたくせに・・・

「いつもの葵じゃない・・・」

「・・・そ・・・そうだ!!..どっ..」

「この・・・ミ・ニ・ス・カ???」

「・・・う・・・うん・・・とっても可愛いよ・・・」

「そう・・・良かった!!..!」

『可愛いよ・・・かあ』

『なんか以外だったな!!..!てか・・・』

『もっとヤラシク言ってくるかと思ったのになあ』

『少し残念だ!!..!』

少し翔の反応に残念さを感じてはいたけど、彼の顔や感想を聞いて満足していた

・
・
・

『はあ！！！つい見惚^{みとれて}れてしまった・・・』

『・・・・・・おお！！！！』

『せっかく遊びに来たんだからこつもしてられないな・・・』

「よし！！今日から待ちに待った夏休み」

「テストも終わったし！！！！」

「思いっきり遊ばうぜ・・・」

「なあ・・・葵！！！！」

そついうとぼく達はテンションを高くし街にくりだしたのです・
・

まあ、最初にテンションが高かったのはぼくだけなんだけどね・
・

「んもーちょっと待ってよー」

「翔ったらー」

く夏の日の呼び出し（後書き）

お疲れ様でした^^そして読んでくれた方ありがとうございます
^^w

どうでしたでしょうか？

悩殺されちゃいましたか？^^

イライラしましたか？^^

羨ましかったですか？^^

こんな可愛い葵ちゃんなのに、まだ・・・まだ・・・翔のバカは・・・

ああ～イライラする～って・・・

自分でもなります><・・・はい（笑）

自分でもこの二人を書いてて思うんです・・・

うらやましい～って><；

これからも頑張りますので^^

読んでやって下さいね^^

また葵ちゃんに会いに来て下さい^^w

では次回まで^^w

く小さな先生とごめんなさいく（前書き）

どうもく^^

第11部投稿させて頂きます^^

今回は少々長くなってしまいましたが、それほど読みにくくはない
はずです^^

今回も2人の会話を楽しめると思いますよ^^

あと最近、葵視点が多いですが、気にしないでください^^;

さて今回のお題：小さな先生とは・・・

普段忘れていた大切な事を教えてくれますよ><w

純粋な気持ちになっちゃいます><w

あとは・・・まあ読んでください^^;

では ^ ^ どうぞ w > < w

く小さな先生とごめんなさいく

今ぼくの横には、絶世の美女が満面の笑みを浮かべ

ぼくに微笑んでいる・・・

『・・・はずだったのになあく』

「なあく葵くもう機嫌なおしてよく」

「ふん・・・もう知らない!!!!」

始まりはあの時からだった・・・

ぼくが葵と駅で無事合流し、意気揚揚いきようようと街に繰り出したのは良かったんだけど・・・

大学に通って以来この街の事は何も知らないぼくは、地元には無い珍しい建物や

お店などがたくさんあるこの状況に興奮し過ぎて・・・

葵の存在をすっかり忘れていたのだ・・・

葵は何回もぼくに名前を呼んでいたみたいけど、ぼくは全く聞こえておらず

無視していた状況だったらしい・・・

『まあ怒るはな・・・そら!!!!』

「ああゝもう!!!!」

「こんなだったら私来なきゃ良かった・・・」

「ご・・・ごめん・・・って・・・」

「何時から準備したと思ってんのよ!!!!」

「『翔と一緒に遊びたいって言うから、私張り切ったのに・・・』」

「ごめん・・・なさい!!!」

最後に葵が何を言ったかわからなかったけど・・・
聞き直したらまた怒らせると思い聞かなかった

「それに、いつでもそうよ!!!翔は・・・」

「いつもいつも、自分勝手に私の事何も考えずに物事を決めちゃって・・・」

「私の意見なんて聞いた事ないじゃない・・・」

「そ・・・そんな事は!!!」

「ある!!!!!そんな事あるの!!!!!」

「今日の朝だって・・・」

「急に来るなんて言ったから・・・私・・・」

「?..?..?..」

「・・・・・・もう!..!..!..うるさい!..!..!..」

「うるさいって・・・何も話してないのに・・・」

「もう!..!..!..うるさい!..!..!..うるさい!..!..!..」

『せつかく翔に見てもらおうと私頑張ったのに・・・』

『これじゃ、バカみたいじゃない・・・私・・・』

そのあとぼく達は無言のままバスに乗ったのだ・・・

「なあゝ葵ゝもう機嫌なおしてよゝ」

「ふん．．．もう知らない！：！」

「なあゝ葵．．．」

「．．．．．」

「嬉しかったんだ、今日ホントに葵に会えるなんて思ってもいなか
ったからさ．．．」

「．．．それどういう意味よ．．．」

「正直に言つとあれ、半分冗談だつたんだよ・・・」

「・・・冗談？」

「あの・・・メールと電話が？」

「そう!?!?!」

「な!?!なにようそれ!?!?!」

「じゃ・・・じゃあなに!?!あんな早く起こされたのも・・・」

「・・・ごめん」

「・・・なんなの・・・それ・・・」

「・・・でもね、葵はその冗談を真実に変えてくれたんだよ・・・」

「・・・どういふこと？」

「葵は、絶対笑って断ると思ったんだ・・・それにあんな早くに電話したのに」

「最初は確かに怒ってたけど・・・ぼくの話しをちゃんと聞いてくれた」

「そして、今日こうしてちゃんと来てくれた・・・」

「ぼくは、嬉しかったんだ・・・それと同時に・・・」

「不安だったんだよ・・・」

「夏休みに入ったらもう葵はぼくの事なんて忘れてしまつかもって・・・」

「そんなこと考えてたら、不安でさ・・・」

「・・・ごめん、ぼくさゝ夏休みって・・・良い思い出ないんだよね・・・」

「ここ最近の夏休みはぼくにとって地獄に落とされたようなものなんだ・・・」

「あはは、笑っちゃうだろ・・・こんな歳にもなっただけで居ると寂しくなる」

「それに自分が壊れていくんだ・・・弱虫なんだよ・・・」

「・・・そんな・・・」

「良いんだよ・・・それにいろいろとごめんな・・・」

「冗談とか言っただけで騙すようなことして、それに葵の事無視するような態度とっちゃってさ・・・」

「・・・そんなこと・・・」

「そんなこと、言わないでよ!!--!!」

「え!!--!!」

「そんな事言ったら、もう・・・怒る事出来ないじゃない・・・」

「・・・あおい。。。」

ぼくは、葵に満面の笑みを浮かべ

「ありがとう・・・葵!!!」

「・・・もう!!!ずるいよ・・・翔!!!」

「これじゃ・・・私が悪者みたいじゃない!!!」

そついうと、葵もまた満面の笑みでぼくを見つめた

・
・
・
・
・

『はあく全く翔にはかなわないあくもう・・・』

『普段はバカで、ノホホンとして、エッチで、変態で、自分勝手に・・・』

『もうどうしようもない、男^{ひと}なのに・・・』

『急に変わるんだもん・・・』

『あんな目で、あんな表情で、あんな笑顔で・・・』

『卑怯だよ・・・翔』

『ああゝあ、もう怒る気無くなっちゃったなあゝ』

『はあゝなによ！！！この陰険な笑顔は！！！！』

『ホント！！！！』

『憎^{にくたらし}らしい顔だよねゝ』

自然と顔が緩んでしまつ自分が居る

「・・・おお！！笑った笑った！！！！」

「ふん！……このド変態でスケベ陰険男！……！！！」

「なあ！……！！！」

「……なんだよいきなり！！……それに何も言っていないじゃんか」

「ふん！！……良いんだよ……その笑顔には全て含まれてるんだから」

「……じゃあ、何か……ぼくの笑顔は」

「ドスケベで、ド変態で、ド陰険って言いたいのかよ！……！！！」

「その通りだよ……！！！」

「……！！！」

「・・・なによ！！！」

「まあ翔がその全て当てはまってるのは事実だし！！！！」

「・・・それは。。。」

「ほら否定できないじゃない・・・」

「ああゝもう！！！！」

「悪かったですね！！！！ドスケベで、ド変態で、ド陰険で！！！！」

「ふん！！その通りですよ！！！！なにか、悪いゝ！！！！」

「ああ！！認めた。。。」

「・・・葵」

「なによ・・・」

「知ったからには覚悟しろよ！！！！」

「・・・何のよ！！！！」

「ふん！！どうなるか知らんからな！！！！」

「・・・なに！！私を襲うっていうの！！！！」

「さあ！！！！ふふふ」

「もうゝなによゝキモイってゝ」

「ふん！！もうぼくにはその言葉も意味ないのだゝ」

「覚悟しろ」葵!!!」

「キャ――――――」

・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・

「ふん!!!参ったか!!!」

「・・・参りました・・・・・・・・・葵様
~~~~~」

「ガフ!!!」

「ふん!!!百年早いのよ!!!翔が私を襲うなんて・・・」

私に飛び掛ってきた翔は今現在バスの床で悶絶もんぜつしている

幸いバスの中のお客さんが少なかったから、あまり注目されなかったけど

それでも何人かはこちらを向き、苦笑いしている・・・

『ふん!!!自業自得よ!!!』

「てか・・・そろそろ起きなさいよね」

私は少し周りが気になったので、翔に起きるよう促したうながした

すると翔は私の方を向き、土下座しているような格好になった

「ごめんなさい、葵様・・・」

「ちよっ！...！やめてよ...そんな事するの...！」

「だから...やめてって顔上げてよ...」

「では・・・」

翔がゆっくりと顔を上げた・・・

「ああ...！」

「うん？」

「ピンク!?!」

「・・・ピンク?」

私はゆっくりと下を覗くと・・・

翔の顔が私のスカートの中をじっと見つめていた・・・

「・・・うっっっ・・・」のっくそ!?!?!ドス  
ケベ~~~~~!?!?!?!?!」

「ガッ」

「・・・」

「ああゝ・・・ああゝゝ・・・」

「ああゝゝ可愛いピンクだったなあゝ」

「・・・つゝゝゝド変態！：！」

「ガッ・・・ああゝゝゝゝゝゝ！！：！」

「お助けをゝゝゝゝゝ」

・  
・  
・  
・  
・  
・

その後私達はこのバスから逃げるように降りたのだった・・・

「ホント、恥ずかしかった」

「バスに乗ってた人全員がこっち見るんだもん・・・」

「・・・ねえ、聞いてる???」

「ああ!?!」

私に何度もボコボコ・・・いや・・・ふんずけ・・・いや・・・

お仕置きしたせいで、翔はもう!?!



「ねえ……じゃないよ」

「もう」

「さあ!!行くよ、もう!!!!」

「おいゝ無視するなあゝ」

「早く行かないと、いろいろ廻れないよ」

「ちょ……ちょっと待ってよ」

私達はバスを降りた後目的の場所まで歩く事にした、そして辿り着いた場所……

それは国宝に指定されている神社である

この神社に奉られているのは、学問の神様

そして、もう一つ・・・

恋愛の神様だ・・・

まあ翔には学問の神様が奉られてるとしか伝えてはいないんだけどね・・・

「学問の神様かあ」

「そうよー！！私は良いけど・・・」

「翔は念入りをお願いした方が良いんじゃない！！！！」

「・・・悪かったですねー頭が悪くて！！！！」

「ああ、ひがんでる僻んでる」

「ねえ〜ここってさ〜もう一つ何かの神様が奉ってなかったっけ？」

「えー！！・・・いや・・・無いと思うけど・・・」

「そうだったけ？うん〜前何かで聞いた話ではあった気がするんだけどなあ〜」

「・・・気のせいだよ・・・きつとー！！！」

『危ない危ないもうちょっとでバレルとこだった・・・』

『でも、なんで私隠すんだろう・・・』

『・・・まあ良いかー！！』

『それにしても・・・バカで良かった〜』

「ハアアアアクション！！！」

「はあゝ!!!!!!」

「キャツ!!」

「き・・きつたない!!!!!!」

「し・・仕方がないじゃないか・・急にくしゃみが出ちゃったんだから・・」

「はあゝはあゝ・・・・・・・・」

「また?」

「はあゝ・・ふ・・止まっちゃった!!!!!!」

「ハハハ!!!!今の翔の顔・・」

「なんだよ・・・」

「・・・き・・・いや、何でもない!!!!」

「・・・なんだよ言えよ」

「いや!!!!」

「なんだよ気持ち悪いな!!!!」

「・・・」

『先に言われた!!!!』

「うん?どうした?」

「いや、何にもないよ・・・うん・・・なんにも!!!!」

「それより・・・行くよ翔!!!!」

「あ!!!!ああ」

今日は平日だからまだ人は少ないだろうと思って来たのだけど・・・

甘かった・・・

「人・・・多いね!!!!」

「うん、多いね!!!!」

周りには人・人・人、人だらけだった・・・

流石国宝・・・

「やっぱ、学問の神様が奉られてるから多いのかな!?!」

『いや・・・違うと思う・・・』

周りには確かに若い人が多いけど・・・

「だって、若い人多くないか？」

「そ・・・そうだね・・・」

「しかも女の人が多いなあ」

「あは・・・あはははははは」

『許せ・・・許せよ翔よ!?!!』

おそらくその女性達は恋愛の神様に会いにきたに違いない・・・うん。。。

絶対そうだと思う・・・

「よし！！ちゃんとお祈りもしたし・・・次何する？」

「・・・そうだな」

「じゃあ！！！！おみ・・・」

「あれ？翔！！！！」

気が付くと翔が居なくなっていた・・・

「もう！！！！また居なくなっちゃったの」

すると少し離れた所から聞きなれた声がした・・・

「どうしたの？」

「お母さんとはぐれちゃったの？」

私は声の聞こえる方向に向かうと、そこに翔は居た

そして彼の隣には、ウサギのぬいぐるみを抱き涙を流しながら立っている女の子が居た

「・・・ああ、ママ・・・ママが居ないの」

「そっかあ、はぐれちゃったんだね」

「困ったね」

「ううあああああ」

「・・・大丈夫だよ!!お兄ちゃんがちゃんとママを見つけてあげるからね・・・」

「・・・ホント?..?」

「うん!!ホント」

「・・・でも・・・でも」

「じゃあねーはい!!」

「うん?」

「指きりしよっか!!!!」

「指きり?」

「そう、絶対ママを見つける約束をね!!!!」

「・・・うん!!!!」

翔がそういうと女の子の顔には笑顔が戻った・・・

『・・・翔、結構良いところじゃん!!!!』

「さて・・・」

「翔!!!!」

「おお!!!! 葵」

「また居なくなって」

「ハハハ、ごめんごめん！……ちょっとボランティアを……」

「ボランティア？」

「……うん？その子は？」

翔の後ろに隠れる女の子

「まさか！……翔の……」

「な！……んなわけねえし」

「だよねえ……迷子何でしょ！……」

「どうして知ってたよ・・・ああ！！！！覗いてただろう・・・」

「へへ、バレタ！！！！」

「バレバレ！！！！」

「ねえ、お兄ちゃん！！！！このお姉ちゃん誰？」

「悪い人？？？」

「なあ！！！！」

「ハハハ、悪い人だって、ハハハ」

「ちよつと、笑いき・・・それにお譲ちゃん。。私は悪い人じゃないませんよ」

「・・・怖い!!!」

「ハハハハハハハハハハハハ」

「うううううううう泣きそう・・・」

「ハハハハはあはあはあ腹痛い」

「お兄ちゃん、お腹痛いの???」

「うん? ああ!! 大丈夫だよ・・・ただ面白くってね!!!」

「面白い?」

「ちょっ・ちょつと」

「ははは、ごめんごめん・・・あのねえ、このお姉ちゃんは悪い人じゃないんだよ」

「もつと怖い人なんだよ・・・」

「ああ~~~~~~~~~~~~」

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、全く従順な子供になに言ってんのよ・・・」

「す・・・すみません・・・」

「私はね、このお兄ちゃんのお友達だよ・・・」

「お友達？」

「そう、お友達・・・」

「・・・でも、じゃあなんでお友達の事叩いたの???」

「え・・・ええゝつとそれは・・・」

「お友達なら叩いちゃダメなんだよ・・・」

「ううゝそうだねえゝ」

私は思わず翔を睨んでしまった・・・

「ひゃー!...!」

「そ・・そうだよねえ〜ごめんね・・・・・お友達は叩いちやダメだよねえ〜」

「じゃあ〜お姉ちゃん、お兄ちゃんに〜ごめんなさいって言って〜」

「え!!!!!!」

「悪い事したらごめんなさいって言わなきゃダメだって、ママが言ってたから」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

私も翔も女の子に言われた後、眼と眼が合ってしまった

冗談で翔に謝る事はあっても、心から謝る事は一度もなかったかもしれない・・・

おそらく翔も同じだろう・・・

私は翔と向かい合った

「「いめんなさい」」

私と翔の声がシンクロした

「え!!!どうして・・・」

「なんていうか・・・今日の事ちゃんと謝ってなかったからさ・・・」

「・・・そんなこと・・・」

「私こそごめんなさい」

「いろいろしちゃって・・・」

お互いがお互いの悪いところを反省しその言葉を伝える

こんな歳にもなって、その大切さをこんなにも小さい女の子に教えられたのである

「ありがとうね、大切な事を思い出させてくれて・・・」

「お兄ちゃんからも、ありがとう」

「うん？何の事？」

「ううん、何でもないよ」

「そっかあゝ、ねえ・・・」

「うん？どうしたの？」

「お兄ちゃんとお姉ちゃん、ママと同じなの？」

「ママと同じ・・・？」

「そう、ママとパパと同じなの？」

「え・・・ええ！！！！ママと・・・パパ・・・」

「そう、ママとパパとっても仲良しだし、ずっと一緒に居るから・・・」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんも同じなのかなって・・・」

「あは・・・あははははははは」

「わ・・・私達は・・・」

「そっだよ!!!」

「え!!!」

「ぼく達はね、ママとパパみたいに仲良しだよ・・・」

「ええ~~~~」

顔が暑い!!!至ところから湯気が出てそんな感じがする・・・

「でもね、ぼく達はお友達なんだよ」

「お友達？」

「そうお友達、大切なね」

『もう！！翔のバカ！！！！』

「よし！！じゃあママさがそっか」

「うん！！」

「おーい葵も行くぞー」

「うん、待ってー」

その後私達は、3人で女の子のママを探していた

探している最中は3人で遊んだり、お話しをしてたりと

傍から見たら、一つの家族に見えてたのかな

そして30分くらい探しただろうか・・・

「ああ！！ママだ！ママああああああ！！！！！！！！」

女の子がママの事を呼ぶと私達の手を離し一目散に走って行った

そして、その先には綺麗な女の人がこっちを向いていて、女の子の名前を呼んでいる

女の子がお母さんに抱きつくと、今まで堪えていたのか大粒の涙を流している

その後女の子がお母さんと何やら話している、話しが終わったのか2人一緒に

私達の方へと歩いてきた

「すみません、この子が大変お世話になりまして・・・」

「いえ、大変なんてそんな事ありませんよ」

「それに、ぼく達の方がいろいろ教えてもらいましたしね・・・な  
あ葵」

「うん、そうね・・・こちらこそありがとございました」

「あの～この子が何か言いましたでしょうか」

「いえ、たいした事じゃないですよ」

「でも、お子さんには大切な事を勉強させて頂きました」

「はあ～」

「ああ！！ごめんなさい、変な事言ってしまった」

「よかったねえ、ママが見つかって・・・」

「うん！！！」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん本当にありがとうございました」

「一緒にママを探してくれて、遊んでくれて、私全然寂しくなかったよ」

「そっかあ、それは良かった！！！」

「じゃあね、お兄ちゃん、お姉ちゃん・・・」

「またねえ」

「うん、またねえ」

「またねえ」

私と翔はこっちを向いて微笑んでいる女の子を

お母さんとしっかり手をつなぎ嬉しそうにこっちを見ている女の子を

そして、その子を暖かく見守るお母さんを

見えなくなるまでずっと眺めていた

「良いよねえ、家族って」

翔が私につぶやいた

「うん、良いね」

『私もいつかあんな家族が欲しいな』

「さて・・・じゃあボランティアも終わったし、次何する？」

「あー！そうそう、おみくじしよう・・・」

「おみくじ？」

「そう、おみくじ、ここのおみくじ当たるって評判なんだよー！！！」

「へえーそうなんだ・・・」

「じゃあ、やってみますかー！！！」

私と翔は二人でおみくじを引いた

「えーとなになに・・・」

『恋愛運のことは・・・』

喩え<sup>たとえ</sup>どんな困難が待ち受けようとも、己が信念を貫き通すべし

さすれば、自ずと道は開かれるであろう

『己が信念を貫くべし・・・かあ』

「ねえ、翔！！どうだった？」

「うううううあおい」

「な・・・なによ・・・」

「こ・・・これ」

「ええ！！！」

私は翔のおみくじに目をやった

「恋愛のどこ見てみ!!」

「恋愛のどこ・・・」

心に惑<sup>まど</sup>いは報<sup>は</sup>われず、心に背<sup>そむ</sup>くは身の破滅

なれど心に信<sup>しん</sup>ずるは光<sup>ひかり</sup>を纏<sup>まと</sup>いて降り立つべし

「身の破滅って・・・」

「なあ・・・怖いだろう・・・」

「まあ・・・でも、信じたら良いって書いてあるし・・・」

「うん・・・」

この時私達が引いたおみくじ、それは私達の未来を暗示させる物だった

でも、この時の二人にはそんな事思いも知らない事だったんだ・・・

「まあ～元気だして!!」

「次行ってみよう」

「は  
い  
・  
・  
・  
」

く小さな先生とごめんなさいく（後書き）

まず最初に、あえて全ての場所の名前は伏せてあります^^；

今回もあまり物語は進んでないんですけど^^；

なんか書き始めたら進まなくて^^；

自分でもわかってますよくはよく物語を進めると・・・

また感想などもらえたら嬉しいな・・・なんて><w

今回は書く事があまり思いつかないので・・・

この辺で^^；

ではまた^^次回まで・・・

ゝ告白そしてゝ（前書き）

今回はまず、読んでもらった方が早いのですが・・・

すいません、かなりの急展開です！！！！

怒らないで下さいね^^；

ゝ告白そしてゝ

「ねえゝ私花火がみたいな!!!!」

「花火？」

「そう・・・花火・・・」

「花火かあゝ・・・じゃあさゝ」

「今度、ぼくの住んでるところでさ大きな花火大会があるんだけど、それ見に行く？」

「え!!!!ホント!!!!」

「うん・・・ぼくの住んでるところは田舎だけどさ、その花火大会は結構大きくてさ、規模がね」

「しかも、周りは田舎〜って感じの場所です!!!」

「毎年いろんな県から見に来るんだよ」

「へえ〜翔の住んでるところかあ〜」

「・・・どうするっ?」

「もちろん、行くに決まってるじゃん!!!」

「ははは、OK・・・じゃあさ誰か誘っていく?」

「え???他の人達と一緒に行くの?」

「うん〜別にぼくはどっちでも良いけど・・・」

「じゃあ・・・」

「じゃあ?」

「・・・二人が・・・」

「???」

「・・・二人だけが良い」

「・・・そっかあ!!良いよ。。」

「うん!!!!」

神社を後にしお腹がすいたので、ちょっとしたお店でご飯を食べた後

あてもなくブラブラと散歩をしていた

私が翔に花火に行きたいと申し出たのには、ちょっとした理由がある

彼と一緒に花火を見たいという思いが一番の理由なのだけど

もう一つ

本当に好きな人と二人だけで花火を見たかったから・・・

今までも彼氏とは見てたけど、その花火の音はどこか寂しさを感じるものだったから

きつと・・・翔とならきつと・・・

「葵っ！！！」

「うん？なに？」

「その花火さ確か一か月後だと思う、詳しくはまた教えるな。。。」

「うん・・」

「その日來るとしたら、電車で来るんだよね？」

「うん・・もちろん！！そだよ・・」

「そっかぁ」

「????どうかした???」

「ううん、何にもないよ！…その日迎えに行ってやるからさ…！…」

「ああ！…そつかあ！…！翔運転できるんだっけ…」

「そういつこと…」

「へへ！…なんだか楽しみだな」

「ははは、そんなたいしたもんじゃないぞ…運転なんて…」

「はあ…翔の鈍感！…！」

「・・・なに～～～～～～」

「あは・・・あははははははは」

「うう～なんかしゃくにさわる笑いだなあ～」

「まあ～良いじゃん良いじゃん!!!!」

その日私達は、街の観光地をまわれるだけ廻った・・・

その一つ一つが良い思い出になった

私と翔の偽物だけど、真実の初デート

カップルがするような甘いデートなんて無い

キスだって、愛し合うことだって、当然ない

でも、私にとってこの初デートは何物にも変えられない大切な時間だった

その夜

『今日は楽しかったね．．．』

『ホントに！！！！』

『でも流石に眠いな．．．』

『だね．．もう二時過ぎてるしね．．．』

『でも．．あの時の翔の顔面白かった．．．』

『あの時？』

『おみくじ引いた時・・・』

『ああそれはもう言つな・・・』

『ハハハ』

『葵はだつてあの時の顔は面白かつたぞ・・・』

『どの時よ？』

『ほらあの時の可愛い女の子にお姉ちゃん怖いって言われた時の顔！・・・！』

『あれは、本当に笑つた！・・・！』

『もう翔のいじわる・・・でも・・・その後はちゃんと言つてくれたよ』

『お姉ちゃん、優しいね・・・って』

『そうだねえ～・・・あの子良い子だったね～』

『だねえ～』

『んじゃ・・・もう寝るよ』

『うん・・・』

『今日はホントありがとな、付き合ってくれて!!!!』

『ううん、私も楽しかったし』

『じゃあまたな!!!!』

『おやすみ・・・』

私は今日の事を思い返しながら、自分でもわかるくらい思い出し笑いが絶えなかった

『私・・・今・・・絶対気持ち悪い顔してるな！！！』

でも、それでも良かった・・・とても幸せだったから・・・

私はまだ知らなかった・・・この初デートが・・・私と翔の・・・  
・・・

・ ・  
・ ・  
・ ・  
・  
・  
・

『  
ありがとうな  
・  
・  
・  
』

『  
葵  
・  
・  
・  
』

・ ・  
・ ・  
・ ・  
・  
・  
・

そして、毎日毎日飽きる事もなく、全くの進展もなく、私と翔の関係は一定の間隔を保ち、過ぎていく

それは、ゆっくりと、時を刻む時計のように・・・

でも、その時計はいつか壊れるもの、それは時を早めるか、止めてしまうか・・・

時の流れというのは、お互いの気持ちすらも変えてしまう・・・

二人の心に深く根付いてしまったある想いによって・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・

そのメールは突然嵐のように送られてきた・・・

“ブーブーブーブー”

『うん？メールかぁ・・・』

『おお！！翔からかぁ〜なんだろう・・・』

『・・・葵・・・ごめん・・・  
・・・今度の花火・・・一緒  
に行けなくなった・・・』

『え！！！』

私は翔のメールを見た瞬間、意味がわからなくなり啞然としてしまった

そして急に心臓が動き出し、激しく鼓動を始めたのだ・・・

『え？？それどういうこと？』

『私、楽しみで・・・翔と一緒に花火を見るのが楽しみで・・・いろいろ考えてたんだよ・・・』

『・・・ごめん、葵・・・もう、ぼくの事は・・・忘れて欲しい』

『え！！ええ！！！』

『・・・どうして・・・どうしてよ！！！』

『ごめんな・・・葵』

『ごめんじゃないでしょうが・・・』

私はいてもたつても居られず翔に電話をかけた・・・

でも・・・

“プルルルルルル”

“プチッ”

切られてしまった・・・

『ちょ・・・ちょっと!!!なんで切るのよ』

『・・・ごめん・・・ホントごめんね』

『謝るくらいならちゃんと電話に出て説明しろ！バカ！！！』

『……葵、ぼくね……葵に言わなきゃ行けない事があるんだ……』

『え！！！！』

『……葵、今までありがとう……』

『え！！！！ええ！！！！なによそれ？？？』

『この場面、前に私が見た夢と同じ！！！！』

『嫌だよ……こんな正夢……嫌だよ……翔』

『今まで楽しかったよ……葵と一緒に居た日々はぼくにとって大切な日だった』

『・・・いや・・・嫌だよ・・・』

『そんな事言わないでよ・・・翔・・・ずっと!!!!ずっと私の傍に居てよ』

『私、翔の事が大好きなんだよ・・・翔の事が世界で一番好きなんだよ!!!!!!』

『なんで・・・なんでさよならなのよ・・・』

『ずっと・・・ずっと傍に居させてよ・・・』

『ごめんね・・・こんなぼくのこと好きでいてくれて・・・』

『でも・・・これからはぼくじゃない誰かと共に、自分の幸せを掴んで欲しい』

『いや・・・いやあゝ翔が居ない世界なんて・・・世界なんてそんなの耐えられないよ』

『・・・ごめん・・・じゃあな・・・葵・・・バイバイ・・・』

『・・・翔・・・女が出来たんでしょ・・・そうなんでしょ!!!!』

『・・・』

『私に隠す事なんて無いじゃない・・・』

その後、私の携帯に翔からのメールはもう返ってこなかった・・・

『なんで・・・なんでよ・・・』

その日から私の世界は180度変わってしまった・・・

翔と出会って2年半、最初の1年半は接する事も話す事も出来なかった

でも、翔と仲良くなって1年・・・

たった1年、私が心に思っていた人と一緒に居れた時間

これからもずっと、ずっと一緒に居れると思ってた・・・

まさか、女が出来てとは思わなかった・・・

『私の2年半はなんだったの！！！！』

『翔！！！！』

その年の夏休みは私にとって地獄そのものだった

翔と仲良くなってから1年もの間私はもちろん他に恋愛なんてする事はなかった

する必要がなかったから、翔とは恋人という枠ではなかったけど

それに近い存在だった、体を重ねる事だけが恋人じゃない

確かに翔の温もりを感じたいと思った事は多々あったけど

そんなこと、吹き飛ばす位にメールや電話、学校などでいろいろ話し、喧嘩し笑った

彼の温もりは私に十分届いていたんだ・・・

なのに・・・なのに・・・

今、私の胸には何もない・・・

また・・・やってしまった・・・

翔と出会う前の私に・・・戻ってしまった・・・

全く愛のない、心のかよっていない行為を・・・

好きでもない男と・・・

ただ・・・肌と肌を重ねるだけ・・・

温もりも愛もない、ただ寂しさを埋めたいが為に・・・

私はまた、堕ちていつてしまったんだ・・・

「夏休みって・・・こんなに長かったんだ」

「まだあと3週間もあるじゃん・・・」

「ねえ、花火見に行こうよ・・・」

「花火？」

友達が私を花火に誘ってきた・・・私は見に行く気はこれっぽっちもなかったけど

友達の強引な誘いもありしぶしぶ行く事にした・・・

そして、花火当日・・・

皆は浴衣で来ているのに私は、普段の恰好で来たものだから

「ちょっと葵〽なんで浴衣じゃないのよ〽」

「良いじゃんこれで〽」

「それに浴衣持ってないし〽」

「え〽持つてるじゃん・・・あ!!誰だっけ・・・あの子と・・・確か・・・しょ・・・」

「やめてよ……!……!……!」

「ひぁ!……!……!」

「……ごめん……」

「ちょっと……その辺ぶらついてくる……」

「うん……わかった……」

その場から逃げるように私は離れたのだ……

「……どうしたの……葵……」

「前一緒にいた翔君って居たでしょ……」

「うん・・・」

「その子に振られたんだってさ」

「えっ！！！！あんなに仲良かったのに??？」

「なんか、向こうが女出来たみたいよ」

「えっ！！！！それひどくない」

「ねえ」

・・・

『なんで・・・なんでよ・・・もう翔の事なんて・・・忘れるって決めたのに・・・』

ヒューーーーーー・・・ドーン!!!

『キレイ』

私は始まった花火の打ち上げに、涙が止まらなかった・・・

本当なら、隣には翔が居たはずなのに・・・

『・・・葵・・・』

『葵、キレイだな』



「私の元に・・・お願いだよ・・・翔・・・」

周囲の人が何事かと思い私の方をじろじろと見ている・・・

「ちょ・・・ちょっと葵く何してんのよくこんなところでくくく」

「だって・・・だってえく・・・翔が・・・翔がどこにも居ないんだもん!!!!!!!!!!」

「・・・あおい!!!!!!!!!!」

「翔・・・しょう!!!!!!!!!!なんで・・・なんで・・・花火一緒に見るとて約束したじゃない!!!!!!!!!!」

「翔の為に浴衣まで買ったんだよ！！翔に可愛いつて言ってもらいたくて・・・」

「翔の笑顔が見たいよ・・・ねえ、私に翔の笑顔を見せてよ！！！」

「・・・あおい、あんたそこまで・・・」

「ねえ、翔どこに居るの？ねえ、翔は・・・」

「わかった・・・わかったから・・・あおいがどんな思いで翔君の事が好きか」

「もう、わかったから・・・」

「ねえ！！今日はもう帰ろう・・・ね！！！！」

「・・・いや、嫌だよ、だって、翔が来るんだから、絶対来るんだか

ら」

「……葵、あおい！……！」

「……」

「いい加減にしろよ……あおい……今日はもう翔君は来ないの……」

「だから……だから……もう、そんな恰好でこんなところで叫ばないでよ……」

私は茫然としていた、友達がおもいつきり私の頬<sup>ほお</sup>を叩いた

その後、私のほっぺたに両手をあて大粒の涙を流している……

「・・・わたし」

「帰ろ・・・葵・・・ねえ・・・」

「・・・うん」

その日私は友達の家泊まる事にした

泥だらけの服と泥だらけの体では家にも帰る事が出来なかった

「ごめんね・・・こんな事になって・・・」

「ううん・・・良いよ私一人暮らしたしさ」

「そっかぁ・・・あ！！家に電話してくるね・・・」

「うん、わかった・・・」

お風呂にも入りご飯も・・・ほとんど食べられなかったけど・・・  
私は少し冷静さを取り戻していた・・・

「そんなに好きなんだね・・・」

「え！！！！」

「翔君のことだよ・・・」

「ん・・・」

「だって・・・ビックリしたもん・・・道のご真ん中で薬がドロドロになって叫んでるんだもん」

「うめん・・・」

「いいよ・・・」

「良かったね・・・本当の恋見つけられて・・・」

「え？」

「私が何も知らないと思ってるでしょ・・・」

「・・・そっかあ・・・」

「うん・・・でも・・・」

「翔君どうしてるんだろっね・・・」

「・・・」

「ねえ、電話はしたの？」

「したよ・・・でも、出てくれなかった・・・」

「出ないの？でも・・・メールは来るんだよね・・・」

「・・・うん」

「なんか、それ・・・おかしくない？」

「なにが？」

「うんゝよくわかんないけど・・・なんか変だよ・・・それ・・・」

「変かあゝ・・・」

「うんゝなんだろうね・・・」

「何だろうねって・・・」

「他には何かないの？」

「うん・・・ない・・・」

「ええゝ!!!」

「それじゃ、ホントに女が出来てるかわからないじゃない!!!」

「だって・・・仕方がないじゃない・・・」

「うんゝそうかなあゝ」

その後も私達は延々と話し通した・・・

「じゃあ、もう帰るね・・・」

「うん」

「・・・あおい・・・」

「うん？」

「たぶんね・・・別の理由だと思うよ・・・」

「？」

「翔君が葵に別れを告げた理由」

「うん・・・そうだと良いんだけど・・・」

「・・・あおい・・・想いは貫き通さなきゃダメだからね！！！！」

「想いを貫き通す！！！！」

喩え（たとえ）どんな困難が待ち受けようとも、己が信念を貫き通すべし

さすれば、自ずと道は開かれるであろう

おみくじ・・・

「うん！・・・わかった・・・私！・・・諦めない！・・・絶対・・・翔と・・・翔と・・・」

「幸せになつてみせる！・・・！」

「うん・・・その粋だよ・・・あおい」

「じゃあね！・・・！」

「うん、じゃあね・・・」

「・・・がんばれ!...! 葵!...!」

ゝ告白そしてゝ（後書き）

一気に話が飛びました^^：

自分でもわかっていきます・・・

それより、ぼくはこれを書いていて泣けました><；

号泣しながら書いていました；；

なんだろう・・・こんなに愛されてみたい

そう感じさせられました・・・

さて・・・今後葵はどうするのか・・・

翔がどんな想いで葵に別れを告げたのか・・・

この話を読んで、涙した方・・・（居ないか><）

ちよつとでもウルつと来た方・・・同土です><w

そんな方はぜひ一言下さい><w

待ってますよ^^

では、次回に続きます・・・

ゝ誘惑ゝ（前書き）

どうもゝ^^第13部の投稿です

物語の展開が急速に早くなっております・・・

そしてようやく、もう一人の主要メンバーが登場します^^

今後どう3人が絡んでくるのか・・・

葵は・・・翔は・・・どうなっていくのか・・・

新たな展開に入っていく感じですよ^^

ゝ誘惑ゝ

私はあれから毎日毎日翔にメールを打ち続けている

彼の事を責めるのではなく、何気ない日常を彼に報告するよつに・

返ってこないとわかつている、わかつているけど、送っていないと自分が壊れてしまいそうで・・・

『今日もダメか・・・』

『どんな状況でも良いから1回くらいメールよこしなさいよねえ』  
全く・・・』

『・・・翔ホントに私の事嫌いになったの???』

あの日以来私は少し落ち着きを取り戻していた、これも友達のおかげ

あの日、あの花火大会の日に友達が居てくれなかったら・・・

2週間が過ぎ、夏休みもあと1週間

この2週間は携帯とのにらめっこ、いつでも翔から連絡が来ても良いように

お風呂に入っている間以外は、肌身離さず持ち歩いている

『あと1週間か・・・』

『学校が始まったら翔に会える・・・』

『翔がもう私の事なんとも想ってなくても・・・私は笑顔で迎えたい』

『でも・・・でも・・・無視されたら・・・どうしよう・・・』  
『・・・』

これまで、何度枕を濡らしただろうか、あの日以来

彼からの別れを告げられたあの日から、私の目が乾く事はない

もう、何を考えても翔との思い出に繋がってしまい涙があふれてく

る・・・

私にとって翔という存在は、私の全て、こんな言葉では言い表せないほどの存在になっている

『いつそ愛人でも良いかもな・・・』

友達には『アホか！！あんたは・・・』って言われたけどね・・・

『だって・・・仕方がないじゃん、今の私にはこれしか思いつかないんだから・・・』

・・・

1週間という時間はあっという間に過ぎ、夏休みは終わった

そして、今日から大学がまた始まる日

『やっと今日翔に会える・・・』

私は昨日の夜から今日の事を考えていた、そのせいであまり眠れなかった

彼に会った時に笑われないように、身なりをしっかりとし家を後にした

『着いた・・・』

30分後、いつものように学校に到着・・・

そして、いつもの教室へ・・・

いつもなら、あの席に翔がいる・・・

私は扉の前で大きく深呼吸をし、教室の扉を開けた

キンコーンカーンコーンキンコーンカーンコーン

今日最後の授業終わりのチャイムが鳴った・・・

今日翔は学校に来なかった・・・

『なんで・・・なんでよ・・・』

その日から1週間が過ぎ、2週間が過ぎた

でも、翔は全く学校に姿を現さなかった・・・

私は不安になり、翔に連絡をとったりもするのだけど

メールを送っても帰ってこないし

電話をかけても、電源が入っていないのか、かからない

たまに、かかったとしても誰も出ない事がほとんどだ・・・

『もう!!--!どうしたら良いのよ』

友達も私が心配らしく声をかけてくれる・・・

「あまり思い詰めない方が良いよ」

「うん・・・わかってる・・・」

・  
・  
・  
・  
・

どれだけ月日が流れただろうか・・・

翔が私に別れを告げてから・・・

秋の紅葉も

冬のあまり降らない雪も

春になり満開の桜も

本当なら二人で見るとははずだったのに、今私の隣には誰も居ない

あの花火以来誰とも付き合わず、誰にも体を委ねた事もない  
ゆだねた

次に体を重ねるとしたら、もう翔しか考えられない

私の中にはもう翔しか居ない

でも、でも・・・その思いすら

大好きで、愛している翔の笑顔ですら・・・もう霞かすんでんでいて

しっかりと思いだせない・・・

私が一番恐れていること、それは私の記憶から彼が居なくなること・  
・

そして季節は夏・・・

また暑い暑い夏がやってきた、この一年翔は姿を見せて居ない

無事私の就職先も決まり後は卒業を待つだけとなっていた・・・

そして、今年で最後の夏休みがやってきた・・・

『翔・・・また来たよこの季節が、この季節は私と翔にとっていろいろな思い出があったよね』

『・・・翔・・・・・・・・あなたは今何をしているの？』

その日は夏休み前最後の日、最後の授業をし最後のチャイムが鳴った・・・

その時だった・・・

“ブーブーブーブー”

メールだ・・・

私が携帯の画面に目をやると、そこに書かれていた文字・・・

1年もの間待ちに待った人の名前だった

「翔!!!!」

私は思わず叫んでいた・・・

周りの人が何事かと思いこっちを見る

私は少し反省の会釈をすると、その場を離れ静かな場所に場を移した

私は恐る恐るメールを開いてみた・・・

そこに書いてあった文に私は驚きを隠せず・・・また涙が溢れて来たのだ・・・

・・・  
・・・  
・・・  
・・・

『この前は楽しかったな〜今度は花火かぁ〜うん〜!!!楽しみ!!!!!!』

『・・・葵の浴衣姿が見たいな・・・』

『でも、またあいつの事だからキモイとか、エッチとか言うんだろ  
うな・・・』

『まあそんな葵も可愛いんだけどね。。』

ぼくはあの初デート？になるのかな・・・

その日の事を思い出していた・・・

『あんな楽しいデートは初めてだった、葵のあんな可愛い姿も、葵の・・・』

『ピンク・・・』

『可愛かったなあ~~~~!!!!デヘ!!!!ヘヘヘヘヘ』

「・・・翔君・・・どうしたの???」

「え!!!!!!」

「いやゝいつにも無くニヤニヤしてるよゝ！・・！」

「あは・・あはははは」

「何もありませんよ・・！」

今ぼくはいつものようにバイトでプールに来ていた

ぼくがこの前の想像・・妄想・・考え事をしていたら

顔がどうにもニヤニヤしていたらしく

隣に居た女性がぼくに声をかけたのだ

この女性は少し前からこのバイトを始めた

ぼくよりも少々歳の離れた女性、とてもキレイでスタイルも良い

水着が良く似合い・・

目のやり場に困るほどの・・・・・

・・・っと・・・それは置いて・・・

その彼女がぼくに声をかけてきた

「ねえ、本当に何も考えてないの？」

「うん・・・なにもないよ・・・」

「へえ、それにしては・・・ねえ」

彼女は意味深な発言をした後、ぼくの体をなめまわすかのように、目を上下にした

「なんでしょう・・・」

「いや・・・翔君もちゃんと男の子だってね・・・ふふふ」

「へえ!!!!」

その人は不意にぼくの下半身をみて笑ったのだ・・・

「い・・・いや!!!!これは・・・」

「あはは!!!!気にしない気にしない」

「何に反応したか知らないけど・・・今は仕事中だよ・・・」

「ほれ、前見て!!!!子供達が見てるわよ!!!!」

ぼくが前を向くと子供達の視線がぼくに集中していた

ぼくが恥ずかしそうに水の中に隠れるとその女性はクスクスと笑っていた

その後バイトも終り帰ろうとした時彼女がまた声をかけてきた・・・

「待って〜翔君!!!」

「はい?なんでしょう?」

「ねえ〜翔君の携帯の番号ってこれ?」

「へえ?」

「いや・・・監視室にあった電話番号なんだけどさ・・・」

「やっぱ無断で登録したらまずいと思ってね!!!」

「ああ〜なるほど・・・どねどね・・・」

「ああ！！！！」

「え！！なに？」

「これ違いますよ！！！！」

「ええ！！！！だって、あそこに書いてあったよこれ・・・」

「多分前の携帯の電話番号ですよ・・・」

「今は確か父さんの番号ですね・・・」

「あちゃ、もう少して翔君のお父さんに電話するところだった！！！！」

彼女が笑っている・・・

「ねえ、教えて！！！」

「う・・・うん良いけど・・・」

「やった、じゃあ今夜またメールするね！！！」

「今教えてくれないんだ・・・」

「ふふん！！！！女には秘密が多い方が良いのよ」

「・・・はあ！！！！」

「ああ！！！！バカにしたなあ」

「いや・・・そんな事は・・・」

「いや．．絶対した！！！」

「してませんって．．．」

「ぶ」

「．．．．．」

「ぷっ！！ハハハ」

「なによ！！！」

「いやゝごめんなさい．．ぼくの友達にそっくりなもので！！！」

「友達？学校の？」

「はい、そっくりですよ口調とか性格が！……！」

「へえ、そうなんだ……」

「ねえ、その子って翔君の彼女なの？」

「……いや、違いますよ……大切な人ではありませんけど……」

「そっかあ」

「ふんそうなんだ……ふふ」

「な……なんですか？」

「い……や何でもない！……！」

「じゃあね・・・夜また連絡するね・・・」

「あ・・・はい!!!」

『ああ!!!そっぴゃあの人名前なんだっけ・・・』

『まあ・・・良いつか・・・』

その夜、ぼくは一応彼女からメールが来るかもしれないと思っていたのだけど

待てど待てどかかってこなかった・・・

『うんゝなんだっただろっ・・・』

『まあ良いか・・・明後日会うしな・・・』

二日後・・・

今日はぼくと彼女ともう一人おばちゃんがいるのだけど、3人で監視のバイトの日だ

ぼくがバイト先に着いた時には1人おばちゃんがいただけ、いつものように挨拶をして

彼女が来るのを待っていると、5分後に彼女が来た

「こんにちは」

彼女が挨拶をすると、ぼくとおばちゃんも一緒に挨拶をした

『普通だし・・・なんなんだろうこの人は・・・』

しばらく3人で話していると、お客さんが来たらしくおばちゃんが外に出ていった

監視室にはぼくと彼女の2人・・・

『き・・・気まづくない!!!』

「ねえ・・・翔君・・・」

「は・・・はい!!!」

『げ・・・声が・・・』

「ぷは!!!なにそれ〜あははは〜」

「・・・なんですか〜」

「はあゝはあゝごめんごめん・・・」

「で、なんで昨日メールくれなかったんですか？」

「ふゝん・・・なにになに」

「な・・・なんですか・・・」

「メール待ってたんだ」

「・・・」

「ふふ、ごめんね、昨日忙しくてさ・・・」

「そうですか・・・」

「・・・つて嘘~~~~」

「え!!嘘!!!!」

「うん、うゝそ・・・」

「なんなんですかゝもう!!!!」

「そんなに怒らないでよ・・・ただ・・・」

「ただ？」

「ただ・・・翔君に直に教えてあげたかったの!!!!」

「へえ!!!!」

そういうと彼女の眼はぼくを惑わすかのように・・・

大人の女性しか出せないなんともいえない魅力・・・

葵と良く似た性格だけど、この辺だけは全然違う

吸い込まれそうな妖艶ようえんさを醸かもし出している

「ふふ、どうしたの？翔君・・・」

「顔真っ赤だよ・・・ふふふ」

「もうからかわないで下さいよ」

「ええからかってなんてないよ」

「で、教えてくれないんですか？」

「ええ、教えて欲しい？」

「もう、あまりからかうと怒りますよ」

「ひゃー！！いや、翔君に犯される」

「な．．．なんでそうなるんですか！！！」

「ふふふ、ごめんね．．．じゃこれが私の番号だよ．．．」

「はあ、疲れる．．．」

彼女が笑っている．．．

なんなんだこの人は・・・

『登録完了っ』

もりした かおる  
森下 薫

「薫さんって言うんだ・・・」

「そっだよ・・・あれ？知らなかった」

「あはは・・・はい・・・」

「ええゝ軽くショックかも」

「なゝんてね!?!」

薫さんが満面の笑みでほくに微笑む・・・

「あの薫さんって彼氏とか居るんですか？」

「うんゝどっちだと思っ？」

「いや・・・聞いてるんですけど・・・」

「あはは・・・居ないよ・・・でも・・・」

「でも？」

「ああ！！！！交代みたい・・・行ってくるね・・・」

「あ！！！」

そういうと薫さんは監視の交代に行ってしまった・・・

返ってきたおばちゃんとは気ない世間話などしていると、彼女の話になった

ぼくは何気に聞いてしまった

「彼女、彼氏いるんですかねえ？」

そういうとおばちゃんの口から出てきた言葉、それは・・・

「薫さん結婚してるわよ・・・」

「へえ！！！！」

まあ不思議ではないよなあ、歳を聞くのもなんだから聞かなかったけど

性格も良いし、キレイだし当然だよなえ

『な．．．なんでぼく凹んでるんだ．．．』

30分後またぼくと彼女が部屋で一緒になった．．．

「さっき彼氏居ないって言ったじゃないですか?」

「え?」

「え?っじゃないですよ．．．」

「結婚してるんでしょ．．．」

「ああゝふふふ」

「何が面白いんですか?」

「そりゃ居ないわよ、彼氏はね！：！：！」

「あ！：！：！そういうことか・・・」

「あはは〜可愛い翔君！：！：！」

「可愛い言わないでください！：！：！」

「あはは〜ごめんごめん・・・」

「もう！：！：！」

「・・・」

「うん？どうしたんですか？」

「ねえ・・・翔君・・・」

「はい？」

「私と・・・仲良しになってくれないかな？」

「・・・仲良し・・・ですか？」

「そう。。なかよし・・・」

「まあ・・・良いですけど・・・でもなんで、ぼくなんですか？」

「それは・・・そんなこと決まってるじゃない・・・」

「んん!!」

『ええ!!!!』

ぼくの目の前には薫さんのキレイな髪がなびいて・

ぼくの唇には彼女の柔らかい唇が重なっていた・

「へへ!!キス・・・しちゃった・・・」

薫さんはぼくの顔を上目づかいで見ながら可愛い笑顔でそう言った

『ドキッ!!!!』

ぼくの心臓は一気に破裂しそうなくらい鼓動を始めた・・・

「な・・・何してるんですか・・・しかもこんな場所で・・・ってそうじゃない・・・」

「何してるんですか・・・」

「へへ、じゃあこんな場所じゃなかったら良いの？」

「い・・・いやそういう意味じゃなくて！！！！」

「あなたは結婚してて、旦那さん居るでしょうが・・・」

「あらゝ結婚してる人は恋しちゃいけないの？」

「こ・・・恋って！！！！」

「そう・・・恋！！！！」

「私ね、初めて翔君を見た時、話した時、この人だっと思ったの！！！！」

「そんな理屈・・・」

「そう！！理屈じゃない・・・好きになるのに理屈なんていらなのよ・・・」

「好きか嫌いか・・・私は翔君に恋をした・・・それも電気が走るくらいのね！！！！」

「・・・そんなこと言われても・・・」

「大丈夫よ・・・私はずっと待ってるから・・・」

「あ!!翔君とのキス・・・良かったよ!!!!」

そう言うと薫さんは笑顔で監視の交代に出ていった・・・

く誘惑く（後書き）

葵が見たメールには何が書いていたのか・・・

って感じですよねぇく^^

そしてこの薫という女性、色っぽく妖艶な女性

積極的で、こんな女性に迫られた翔・・・

どうなってしまうのでしょうかねぇ・・・

まだまだ続きますよ^^

続く・・・はずですよ・・・はい^^；

では次回まで^^

ゝ異変ゝ（前書き）

今回で14部目になりました^^

いよいよ後半に入ってきました^^

あと何話投稿出来るかわかりませんが・・・

なんか後半は、展開が早いうえになんか・・・

正直・・・です><;

でも・・・最後までがんばりますよ^^



「ああゝ!!!!きつたなゝい・・・」

「なんですか・・・その呼び方!!!!」

「ええ!!!!ダメ?」

「いやいや・・・」

『何かが違う気がする・・・』

「あの・・・言っときますけど・・・仲良くはしますけど・・・」

「さっきみたいな事はしませんからね・・・」

「さっきみたいな事?」

「さっきしたじゃないですか・・・キ・・・キス・・・」

「ああゝふふふ・・・」

「・・・どうしようかなあゝ」

「ダメですからね・・・ご主人さんに怒られたくないので・・・」

「・・・じゃあ・・・」

「なんですか？」

「居なくなれば良いの？」

「なあ！・・・そんな物騒な事さっさとやらないでください！・・・！」

「いやいや・・・別にそういう意味じゃないわよ・・・別れたら良いんだし・・・」

「・・・」

「・・・」

「ええ~~~~~」

「いやいや・・・それはそれでどうかと・・・」

「なんでよ・・・それにもう・・・私主人の事愛してないし・・・」

「いや・・・そんな事言われても・・・」

「ふふふ」

「だから、安心して・・・」



「ふふ．．いつでも待ってるわよ．．．私はいつでも準備万端だから．．．」

「．．．．．」

「あのくぼくには確かに彼女は居ないですけど、思ってる人くらい居ますからね．．．」

「もしかして．．．この前言ってた葵って女の子？」

「まあ．．．そうですね．．．」

「ふん．．．」

「なんですか？」

「いゝや、でも私諦めないよ！！！」

「はあゝまあ頑張ってくださいな・・・」

「うん！！！」

『なんか・・・この人怖いな・・・』

ぼくはその日、薫さんの事を考えていた・・・

何がしたいんだ・・・あの人は

そんな時だ・・・葵からメールがいつものように来た

『翔、元気？何してんの？』

『バイトから帰ってきて、ゴロゴロしてるけど・・・』

『そつかぁ・・・ねえ花火っていつだっけ?』

『おお!!忘れてた・・・えつとね』

葵との何気ない会話、ぼくは葵とメールや電話が一番落ち着く

【・・・今日あった事は話さない方が良さ・・・うん・・・】

『オッケーその日ね、すっごく楽しみだね・・・』

『そうだなあゝ葵の浴衣・・・』

『何々?私の浴衣姿が見たいの???』

『まあ・・・まあね・・・』

『へへ・・・翔のスケベ・・・』

『な！！！！！浴衣のどこがスケベなのさ・・・』

『翔の場合浴衣より、浴衣の中が見たいんじゃないの???』

『！！！！！！ぼくはそこまで変態じゃない！！！！』

『へえーじゃあ翔は私の体見たく無いんだ！！！！』

『！！！！！！バ・・・バカ！！！！なにバカなこと言ってんだよ！！！！』

『ハハハゝ冗談冗談！！！』

『もう！！！勘弁してくれゝゝゝ』

『ハハハゝごめんごめんゝゝゝ』

『じゃあまたね！！！』

『ほゝい』

ゝゝゝ

「ちてとゝゝゝ寝るとしますかゝゝゝ」

その時だった

「ああー！！！！！！！！」

いきなり頭に激痛が走った！！！！

「いてえ~~~~~」

『なんだよこの痛みは・・・』

少し安静にしていると、頭の痛みは和らいできた・・・

「ああー痛かった！！！！」

「なんだよどこも打ってないのに・・・」

ぼくは、少し気にはなっただけ、頭痛はいつもの事なので、気にせず眠りについた

次の日の目覚めは、過去最高の最悪さだった・・・

昨日起こした、頭痛が続いていてズキズキ疼く<sup>つ</sup>のだ

「ううゝ痛いゝ・・・いつもなら寝たら治るんだけどなゝ」

「今日もバイトあるしなあゝ」

「まあ、その時間までには治るかな・・・」

頭痛は昨日みたいな痛みはなかったのだけど、この軽い痛みが嫌になるのだ・・・

そして、バイトに行く時間・・・

「もうゝ全然治らないよゝ」

「でも、行くしかないか・・・」

•  
•  
•

「おい翔ちゃん」

「ブツ!!!」

バイト先に着き中に入ろうとした時

薫さんが気恥ずかしい呼び方でぼくを呼んだ

「あのおくその呼び方止めてもらえますか」

「ええ、良いじゃ、ン仲良しのし・る・し・でしょ……」

「……いや……何か違う気が。」

「ええゝ良いじゃゝン呼んでもゝそれともゝ」

「．．なんですか？」

「．．．また．．．キス．．．．．して欲しかった？」

「．．．いや．．．．．良いです．．．はい！！！」

「ええゝダメなの？」

「ダメでしょ！！！！普通！！！！」

「  
ぶゝ」

「・・・すねてもダメ・・・」

その瞬間また頭に激痛が走る・・・

「ああ！！！！！」

ぼくはその場にうずくまり動けなくなっていました・・・

「ちょ・・・ちよつと翔君！！！！大丈夫！！！！ねえ」

「だい・・・大丈夫です・・・」

「いつもの、頭痛ですから・・・」

「いつものって、それ尋常じゃない！！！！」

「本当に大丈夫ですから・・・」

しばらくしていると痛みは治まっていた

薫さんはバイトが終わるまで終始不安がっではいたけど

その日はもう痛みが走る事はなかった・・・

その日の夜、ぼくは葵と話したくなり電話をかけた・・・

でも・・・

葵が出る事はなかった・・・

『葵・・・』

『お前に会いたいよ・・・』

・  
・  
・

『・・・翔ちゃん・・・私諦めないからね・・・ふふふ』

『翔ちゃんが悪いんだよ・・・こっちを向いてくれないから・・・』

・  
・  
・

『翔今何してるかな〜へへ』

『お風呂で翔の事考えるなんて・・・私も相当エッチなのかなあ〜』

『これは絶対翔には言えないな!!!!』

『翔・・・会いたいよ〜』

・  
・  
・

それぞれの想いが、それぞれの思惑が、大きな渦となって

今動き出すのだ・・・

ぼくは少し不安にかられていた

この頭痛について少し不安な事があるのだ・

これは、両親に聞いた事なのだけど

ぼくが生まれてすぐの事、3日後と聞いている

ぼくは“くも膜下出血”になっただけらしい・

その時は医師曰く【奇跡】だそうだ・

まあぼく自身覚えているわけもなく・

脳に障害が残るかもしれないと言われてはいたのだけど

その障害も無く、今を生きている

『この頭痛何なんだろう・・・病院行くの怖いよなあ』

『葵に相談してみようかな・・・』

そんな事を考えながら眠りについたので．．

『翔．．．翔．．．起きて．．．翔．．．』

『うん？？？』

『私はもうずっとあなたのそばに居たい』

『もう．．絶対に離れないから．．．』

『だから．．だからさ．．．目を．．．目を．．．』

『目を覚ましてよ．．．翔！！！！お願いだから．．．』

『戻ってきてよ！！！！翔．．．』

『・・・葵・・・』

ぼくはゆっくりと目を覚ました・・・

なんとも言えない悲しい声だった

翔と呼ぶ人はぼくが知るかぎり一人しか居ない

あの声は・・・葵だ・・・

何て悲しい夢だったんだろう・・・

ぼくは葵に・・・あんな悲しい想いをさせてしまったのかと・・・

夢ではあるけれど、そう思っていた・・・

ぼくと葵の関係、今は親友という枠にはまってはいるけれど・・・

親友にしては、ぼく達の関係はそれを超えているように思う

ぼくは最近葵に対して親友という枠ではなく一人の女性として

見る事が多くなってきた

葵はこう言ってくれるのかな・・・

『・・・葵・・・』

『ぼくは・・・ぼくは・・・』

『もう迷わない、やっと決める事が出来たんだ・・・』

『これから、どんな未来が待っているようにも・・・』

『この気持ちは変わらない・・・』

『・・・葵は今さら・・・とか言っているのかな・・・』

『それでも良い・・・それでも良いんだ』

『ぼくは、君の笑顔が見たいから・・・』

『ずっとずっと・・・君の笑顔が見たいんだ』

『ずっと・・・ずっと・・・ぼくのそばで・・・』

『ぼくのそばに居て欲しい・・・そして』

『その可愛い笑顔をずっと見せてよ』

『ぼくは、その笑顔を一生守るから・・・』

『・・・葵・・・・・・・・ぼくは・・・・君の事が・・・・』

『大好きだよ!!!・・・・いや』

『・・・・・・・・葵・・・・・・・・愛しているよ』

ゝ異変ゝ（後書き）

お疲れさんでした^^

今回でようやく翔が自分の気持ちを胸に秘めたという感じですね^^

ですが・・・彼に迫るものとは・・・

といった感じでしょうか・・・

では^^次回まで・・・

ゝ悪夢ゝ（前書き）

第15部目の投稿になります^^

はっきりって・・・今回のお話し全く自信なし><

ぐだぐだです><

ごめんなさい・・・と先に謝っておきます・・・

やっぱり小説って難しいですね><

ゝ悪夢ゝ

『いつ頃からだろう・・・』

『いつ頃から、ぼくは葵の事を一人の女の子として見ていたんだろう』

以前のぼくにとって葵は、彼女という存在より友達としての関係の方が

しっくりしていた

それはぼく自身彼女という存在に求める事と友達という存在に求める事が違ったから

彼女に求めるのは温もり、ぼく自身を包み込んでくれる安心感

でも、友達に求めるもの

それは“永遠”

永遠という名の絆が欲しかった・・・

葵にはその永遠という絆になって欲しかったし

ぼくにとって友達は恋人以上に求める存在だったのだ

矛盾しているかもしれないけれど・・・

ぼくは、友達なんていらないという想いと、友達が欲しいという想いがある

なぜいらないのか、それはいくらこちらが信賴しても、絶対裏切られるから

まあ全員が全員そうではないと思うけど、ぼくのまわりには居なかった

ぼくは彼らとは一線を引く感じになり、あまり深く関わる事をしなかった

まあそのおかげで、今でも友達なんて居ないんだけどね・・・

でも・・・

最近になって思っんだ・・・

友達が欲しいって・・・

一緒に笑いあって遊んで泣いて、真面目な話も笑い話も

そんな関係になれる存在、ぼくが一番欲しいもの

葵に会うまでのぼくは、そんな事を考える度、涙が流れ

心はボロボロになった

もう死にたい・・・

そう思う事も何度もあった

でも、彼女の笑顔はぼくの心に、ぼくの暗く閉ざされた心に

一筋の光をもたらした・・・

そんな、彼女を・・・やっと見つけた大切な友達・・・ううん、親友と呼べる人

彼女だけは失いたくない、そう思っていたんだ

だから・・・

だから、ぼくはもう一つの彼女に対する気持ちを封印した・・・

ぼくは、彼女を、葵を心から好きで、ずっとずっと一緒に居たい

そう思っているんだ。

でも・・・もし、それを伝えて、この関係が壊れるような事があったらと・・・

そう思うだけで、ぼくは・・・

でも、もうぼくは迷わない・・・

もう、ぼくは大切な人を失くしたくない！！！！

ぼくの足は自然と葵のいる場所に向かっていた

朝の早い時間、まだ日も上がり切っていない時間だった

でも、ぼくはもう止める事が出来なかった

葵に会いたい・・・

会って、この気持ちを伝えたい・・・

ぼくの心にはそれしかなかったのだ

早朝の道にはあまり車は無く清々すがすがしい朝だった

ぼくの心の中のようにだった・・・

車を走らして、目的地まであと半分となった時だった・・・

ぼくは、いきなりめまいのようなものを感じたんだ、その直後だった・・・

これまで感じた事のないような頭痛が激痛となって襲ってきたのだ  
ぼくは、目を開ける事が出来なくそのまま意識を無くした・・・

『あれ・・・ぼくは・・・どうしてこんなとくに居るんだろう・・・』

『

周りでは救急車の音がして、たくさんの人がこっちを見ている・・・

『うんゝなにも考えられない・・・ぼくは何をしようとしていたんだろう・・・』

・  
・  
・  
・  
・

『さあゝてどうやって、翔ちんを落しちゃうかなあゝふふふ』

『でもねえゝ、翔ちんが言ってた葵さんって・・・さぞ幸せなんだろ  
うなあゝ』

『私なんて・・・』

『はあゝあそこまで愛されたいなあゝ全く・・・』

『うん！？何かしら・・・』

偶然通りかかったところに、たくさんの人ばかり、それに救急車や警察の人達

『なんか事故でもあったのかしら・・・』

『いるよねえ、こういうのを見たがる野次馬ってやつが・・・』

『まあ私もその一人だったりして・・・へへ』

私もそこに居た野次馬と同じで、興味本位で覗きこんだのだ・・・

「ええ！！！！！」

私は愕然とした・・・

見慣れた車だとは最初に思ったのだけど、そこに頭から血を流している一人の男性

それが・・・

「翔君！！！！！！！！！」

私はいてもたってもいられず、警察が囲っている線が無理やりくぐりぬけ彼の元へ駆け寄った

「ちょ・・・ちょっとあなた！！！！何しているんですか！！！！」

「早くここから出ていきなさい！！！！」

「さもないとあなたを逮捕しますよ！！！！！！」

「逮捕！！！！そんなのどうだって良い！！！！」

「でも・・・でも・・・彼は私の知り合いなんです！！！！！！」

「放して下さい！！！翔君！！！翔君！！！」

「ちょっ・ちょつと・・・落ち着いて下さい！！！」

「あなた彼の知り合いなんですよね？」

「・・・はい・・・仕事先での・・・」

「じゃあ、あなた彼に付き添って病院まで行ってもらって良いですか？」

「へえ！！！」

「彼は今非常に危ない状態なんです！！！！なので、決断は早めにお願います」

「・・・わかりました、私着いていきます」

「では、こちらへ」

私の頭は真っ白だった、この前まで元気で笑顔をふりまいていた翔君が

今は物言わぬ人形みたいで、ただただ生きるか死ぬかの瀬戸際を

必死になって、あえいでいる・・・

その時私には何も出来なかった・・・ただ、彼に声をかける事しか出来ない

『こんな時彼女ならどうするんだろうなあ』

私達が病院に着くやすぐに緊急の手術が行われた、病院側はすぐに彼の両親に

連絡を取り、今の状況やらを伝えていた

彼の両親は、悲痛な想いで泣き、彼の名前を呼んでいた

5時間後・・・

手術室の光が消え中から先生と翔が出てきた、先生が言うには

『命だけは守りましたが、ですが非常に危険な状態です』

そう告げられた、そして彼の頭の中には大きな爆弾を抱えていたということ

彼の頭の中に大きな血の塊があつてそれがもし破裂していたら

彼の命が無くなっていたということ

奇跡的にあの事故の時に破裂しなかったのが命を取り留めた原因になったのだけど

先生はこうも言った・・・

『脳に損傷が出来、何らかの障害が残るかもしれません』

つと・・・

私はどうしたら良いのかわからなかった、翔君の事は好きだけど

こうなってしまった翔君の事を私本当にずっと好きでいられるのか

手術が終わり翔君は一人個室へと運びこまれていた

先生の話によるとあと30分位で麻酔が切れるらしい、もしそこで

目を開けなかったら、覚悟して下さいとのことだ・・・

私にとって、ううん彼の両親にとってもこの30分はとても長く苦しい30分だろうと思う

この30分で未来が決まると思うとやりきれないおもいでいっぱいだ

そして、医師から告げられてから30分が過ぎた・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・

『ぼくは・・・』

『ここはどこだろう・・・』

『あれ？ぼくって誰だ・・・』

『あれ？ぼく、何かしようとしてたような・・・』

『んゝ思い出せない・・・』

・・・翔・・・

翔・・・起きて・・・

早く目を覚まして・・・

『うん？誰か何か言っているような・・・』

『翔？・・・翔って誰だ・・・』

翔・・・私は・・・私はずっとずっと待ってるからね・・・

『待ってる・・・誰を・・・誰を待ってるの・・・』

・  
・  
・  
・  
・

「翔！！！！起きて翔！！！！」

30分を大きく越えても翔は目を覚まさなかった

両親は絶えることなく彼の名前を呼び続けていた

私も先生たちも諦めかけた時だった・・・

「翔！！！」

！！！！

一瞬翔の指が動いた、そして薄ら<sup>まぶた</sup>瞼が開く

両親は大粒の涙を流し喜んでいた

先生も、『もう大丈夫ですよ』そう言っていた

だけど・・・それは私も含め全ての人

彼本人にとっても悪夢としか言いようがない日々の始まりだったのだ・・・

翔君が目覚ましてから1週間が過ぎた

彼は今もすやすやと眠っている、まあただ眠っているだけで起きないという事はない

ただ、彼の体力が未だに完全ではないのだ・・・

なので、絶対安静というのが医師からの条件だった

たまに見に來ると起きている時もあるけれど、いつもいつも窓の外を眺めている

まるで、遠くに置いてきた大切な人を想うかのように・・・

1週間前・・・彼が目を覚ました時、彼の口から出た言葉

「あなた方は誰ですか？」

「ここはどこですか？」

「ぼくっていったい誰ですか？」

目が覚めた彼には一切の記憶が無くなっていたのだ

彼の両親は、ショックのあまり泣き崩れてしまった

それからというもの、彼は何も言の葉いとのはを發さず窓の外をずっと眺めている

・  
・  
・

そんなある日私がいつものように翔君のお見舞いに來た時

『今日も元気かなあ』

「翔ちゃん元気してる？」

私は部屋のドアを開けた

「あちゃゝ寝ちやつてるのか・・・」

「まあ・・・良いか」

『翔君・・・寝顔・・・可愛い！！！！』

「翔君・・・早く思い出してくれないかな・・・」

「んゝんゝあ・・・」

「ええ！！！！い・・・今なんて言ったの？」

今かすかだけど何かを言ったように聞こえた

「ねえゝ翔君今・・・今なんて言ったの！！！！」

「・・・・・・あ・・・おい」

「はぁ！！！」

今はつきり聞こえた、それも私ではなく、あおいという女性の名前を・・・

「な・・・なんで・・・なんでよ・・・翔君！！！」

「なんで、ここにいないその人なのよ・・・」

「私はこんなにもあなたの傍に居るのに・・・」

「・・・許せない・・・絶対にそんなの許せない・・・」

私は気が動転してしまったのだろうか、その後何をしたか良く覚えていないのだけど

気づけば、翔君の携帯電話を持ちある人にメールを打っていた

菊間 葵

その人に・・・

無我夢中だった・・・翔君は誰にも渡さないそれだけの想いで

私は翔君になりすまし、彼女に別れのメールを送ったのだ・・・

ゝ悪夢ゝ（後書き）

まあこんなもんですよ^^；

ぼくの文章力は；；

でも、読んで頂けた方ありがとうございました><w

では次回まで・・・

ゝ愛するが故の嘘ゝ（前書き）

どうもゝ^^

時間はかかりましたが^^；第16部の投稿です^^

愛するが故につく嘘、皆さんもついたことありますか^^？

ぼくは・・・あるかも^^；

まあ、それは置いて・・・

前の時に、終わりに近づいていると言いましたが・・・

終わるかな・・・^^；

まあ、どうにかなるでしょ><w

では^^どうぞ・・・

く愛するが故の嘘く

「はあく私ってホント嫌な女だよね」

私はため息をつきながら、目の前で眠っている翔君の顔を眺めていた

「こんな事しても、私に勝ち目ないんだけどな」

私の視線は自然と翔君の唇に向けられていた

「翔君、あの子とキスしたのかな・・・」

「てか・・・私もう我慢できない」

私は翔君の唇へと吸い込まれるように近づいていく

「ん・・・ん」

“ドキッ”

もう少しでキスだったのだけど、寸前で翔君が声を上げることが出来なかった

「ううゝなにびくついてるのよ、私ったら・・・」

「もう、いい歳なのになあゝ」

「ん・・・んゝ、あ・・・あのう・・・」

「うん？どうしたの・・・」

「かおる・・・さんでしたよね・・・」

「はい、そうです薫だよ」

「あの・・・なに、してるんですか・・・」

「何って、翔ちゃんを見てるんだけど・・・」

「あの・・・その翔ちゃんって・・・なんですか？」

「ん〜とねえ、私が翔君を呼ぶ時の呼び方だよ・・・」

「前はこうやって呼んでたんだよ」

「そ・・・そうなんですか・・・」

「・・・あの・・・」

「今度は何かな？」

「ぼく達って、どんな関係だったんですか？」

“ドキッ”

まあいづれは聞かれると思っていた事なのだけど、いざ聞かれたら少し動揺する

「私達はね、恋人同士だったんだよ・・・」

「恋人！！！！」

「そう、恋人・・・それはもう、凄いほど愛し合ってたんだよ・・・」

「・・・」

「・・・」  
「ごめん・・・」

「やっぱ、全然思い出せないや・・・」

「・・・良いよ無理しなくて・・・今は体をしっかり休ませて、早く元気にならないとね」

「・・・ごめん」

無性に痛かった、私の心はこれでもかってほど刃物で刺されているかのように

翔君を騙している罪悪感、それに気付かない翔君の気持ち

そして、翔君に想いを伝えても何も変わらない私と翔君の距離

私がどれだけ彼に好意を向けても、彼には何も伝わらない

『こんな悲しい恋今まで無かったなあ』

「謝らなくて良いよ、今は忘れてるんだからさ」

「ゆっくり、思い出してっう・・・ね!?!?!」

「・・・はい」

彼との会話は、これで終わってしまった

その後すぐ翔君はまた眠ってしまった

私は彼の寝顔を見た後その場を後にした・・・

・・・  
・・・

「ぼくは、本当にあの人の彼氏何だろうか・・・」

ぼくは、何かが引っかかっていた

それが何かといわれるとわからないのだけど

何か大切な何かを・・・

薫さんが、ぼくに好意を持っていることは知っている

でも・・・

ぼくは、その想いに応えることが出来ないのだ

・ ・  
・ ・  
・ ・  
・ ・  
・

『 ・ ・ ・ ・ ・  
』

『・・・しょう・・・』

『・・・おきて・・・』

まただ、最近よく見る夢

夢の中でぼくの名前を呼んでいる

誰なんだろう・・・

『待ってるよ・・・』

『私は・・・ずっと・・・』

『待つてるよ・・・あなたのことを』

『わたしは・・・葵は・・・』

“なんて悲しい声なんだろう”

“・・・あおい・・・”

“悲しい声、でも・・・”

“なんだろう、あたたかい”

“ あおい・・・誰、だろう ”

“ わからない、わからないよ・・・ ”

“ でも・・・胸がドキドキする ”

ぼくはそつと目を開けた、いつもと変わらない景色、病院のベッドの上。

相変わらず何も思い出せないけど、一つだけ思い出したことがある。

夢の中で会った、あおいという女の子

彼女が、ぼくとどういう関係かまではわからないけど、ぼくは、彼女を知っている。

それだけは、確かな事だった。

『・・・あおい・・・さんかあ・・・』

ぼくの携帯にも入っていない名前・・・

でも、何か変なことがあるんだ。

メールがなぜか不自然にとびとびになっている

あたかも、そこに誰かから来ていたメールがあるかのように・・・

『やっぱり、気のせいなのかな・・・』

ぼくは何気に携帯を触っていた

すると、ある画面を見つけた

それは、着信とメールの回数を表すランキングだ。

一番最初にあつた名前・・・それが

菊間 葵

『・・・葵!?!』

『それにしても、このメールと着信の数・・・』

ぼくは、驚きを隠せなかった、ぼくの記憶にない菊間 葵という女性  
その人の名前がぼくの携帯にあって、しかもメールのやりとりの数  
が尋常ではなかった

『メール回数・・・10000回を越えている!?!!』

その次に名前があるのが、森下 薫・・・

おそらく、良くぼくを見に来る彼女だと思う

彼女とのメールの回数は300と書いてある

『300!?!?』

『薫さんは、ぼくたちは恋人だと言っていた』

『恋人同士なのにメール回数がたったの300!?!?』

『なんか変じゃないか・・・』

『うん、全然思い出せない・・・』

・  
・  
・

数日後

「翔ちゃん、元気にしてる?」

「・・・薫さん、こんにちは・・・」

「なあゝにゝ!？」

「何か歯切れ悪いわよ？」

「・・・いえ、そんな事はないですよ・・・」

『この人が本当に彼女なのか、ごめん・・・薫さん。』

「・・・薫さん、少し良いですか？」

「うん? なにかな?？」

「ぼく達って付き合ってるんですよ?」

「・・・うん、そうよ・・・どうして？」

「いつ頃から付き合ってるんですか？」

「・・・ん〜とねえ〜もう1年になるかな・・・」

「そうなんですか・・・じゃあ、ぼく達ってメールとかしてたんですか？」

「・・・どうして？」

「いや・・・携帯のメールが少なかったから・・・」

「・・・」

「どう・・・したんですか？」

「・・・ああ、ごめんあれなのよ、私メール嫌いだし・・・電話の方が多かったのよ」

「・・・そうなんですか」

「・・・そうそう、そうなの・・・」

「・・・薫さん」

「なに？」

「・・・なんで、そんな嘘つくんですか？」

「・・・え！！！！」

「もう、わかってるんですよ・・・薫さんが嘘をついていることが」

「・・・何、言ってるの？翔君・・・」

「ぼくのこの携帯なんですけど、着信とメールの回数を表すランキングが見れるんです」

「薫さん今言いましたよね、1年前から付き合ってるって、メールより電話の方が良いって」

「でも、変なんですよ・・・薫さんからの着信、メールより少ないんですよ」

「しかも、100件もないんです・・・」

「薫さん・・・変だと思いませんか？」

「何か隠してることがあるんじゃないんですか？」

「それに、このランキングの一番上にある人」

「菊間 葵って誰なんですか??？」

「うう!!!!」

「それは・・・」

「答えて下さい、薫さん・・・」

「・・・ごめん・・・ごめん・・・なさい。」

「ええ!!」

「ごめんなさい、翔君・・・」

「私は、あなたの彼女でも恋人でもないの・・・」

「なぜ嘘をついてたのって聞いたよね・・・」

「はい・・・」

「それはね、あなたを、誰にも渡したくなかったから・・・」

「私はこの数カ月で周りの環境が、がらりと変わってしまった・・・」

「私ね、本当は結婚してたの。」

「！！！！」

「2度目だね、翔君がそうやって驚くの。」

「でもね、もう私に旦那は居ない。」

「別れちゃった・・・」

「え！！どうしてですか？」

「決まってるじゃない・・・君の事が好きだからよ」

「君の事が好きだから、大好きだから、旦那の事なんか頭に入って

こなくて」

「家を空けることが多くなって、会話もなくなり、拳句の果てには」

「私があなとのところに入り浸ってるって事がバレてね・・・」

「まあそれじゃあ、離婚になるのも無理ないよね・・・」

「でも・・・私には翔君がいる！！」

「そう思ってた、記憶を無くした時は正直チャンスだと思った」

「一から私の事を見てくれるって思ってたから」

「でも、翔君が夢の中で、彼女の名前をつぶやいたの・・・」

「葵・・・って」

「ぼ・・・ぼくが!？」

「そう、ごめんなさい。私にも正直わからないの、翔君と葵さんが  
どんな関係だったかは。」

「でも。とっても大切な人だって事はわかった」

「だから、・・・悔しかったの・・・」

「・・・薫さん・・・」

「ごめん・・・ごめんね、翔君・・・」

そう言いながら薫さんはその場に座り込みボロボロと泣いていた

「・・・薫さん・・・」

「だって・・・私、私は・・・」

「怖かったんだもん、何をしても翔君は私の方を向いてくれないし」

「自分がしてることが間違ってることはわかってた、でも・・・」

「でも・・・それでも、好きなんだもん・・・」

「翔君のこと、どうしようもなく好きなんだもん・・・」

「……薰さん……」

ぼくは正直、どうしたら良いかわからなかった。

ぼくの事をこんなにも好きだと言ってくれる薰さん

ぼくは、最初から彼女に対して怒りの気持ちは持っていない

ただ、本当のことが知りたかったただけだ

「薰さん、ぼくはあなたのこと怒ってないんですよ」

「ただ、本当のことが知りたかったただけなんです」

「……翔君、本当にごめんなさい」

彼女は、何度も何度も謝っていた、大粒の涙を流しながら・・・

『彼女も被害者だったのかもなあ・・・』

ぼくは、未だ泣きやまない彼女を引き寄せ抱きしめた

「ええ！！！！」

「薫さん、もう、良いんです・・・良いんですよ、薫さん」

「・・・うん・・・うん・・・」

ぼくが腕に力を込めると、彼女もそれに応えるかのように強く抱きしめてくれた

「薫さん、ごめんなさい・・・」

「え!？」

「ぼくは薫さんの想いに応えることは出来ません」

「ぼくの中に居る葵という人がぼくにとってどういう人かわからないけど。」

「多分彼女は、ぼくにとって大切な人だと思うから・・・」

「だから、ぼくは自分の意志に素直になってみようと思うんです」

「翔・・・君・・・」

「ごめんなさい」

「・・・」

「でも、ですね・・・」

「!?!」

「今のぼくには、薫さんしかいないんですよ・・・記憶ないですしね。」

「だから・・・どの位かわからないですけど、ぼくの傍に居てくれませんか?」

「ぼくの、支えになってくれませんか?」

「!?!」

「自分でもわかってるんです、薫さんにとってこんなこと残酷だっ

て事・・・」

「でも、居て欲しんです・・・ダメ!?ですか・・・」

「はぁ、翔君・・・年上の女性を玩具にするつもりなの?」

「・・・いえ!!そういう意味じゃ・・・」

「ふふふ、良いわよ、私は翔君の玩具になってあげる」

「玩具にするんだから、ちゃんと可愛がってくれなきゃ、すぐに壊れちゃうんだから・・・」

「ははは、壊れないように頑張りますよ。薫さん」

「よろしくね、翔君。」

「ああ!!もう翔ちゃんって呼ばないんですか?」

「うん、あの呼び方もうやめ。」

「私もちゃんとしないとね、もう・・・。」

「・・・そうですか。」

「・・・これから、よろしくお願いします。」

「こちらこそ、よろしくね。翔ちゃん!!--!」

「ああ~~~~、もう破ってる・・・。」

「へへ!!--何の事かな、翔くん。」

ぼく達は笑顔で笑いあっていた、今のぼくにも、そして薫さんにも  
お互いの存在は、なくてはならないものだと思う

彼女の存在は、ぼくの曇っていた心に光をもたらした

まだ知らぬ、大切な人を想いながら、その人と再会するその日まで

ぼくは彼女と支えあう事を決めたんだ。

ゝ愛するが故の嘘ゝ（後書き）

お疲れ様でした^^

ちよつと、記憶喪失になつていても明るめに書きました。

本来ならここまで明るくなれないのかも・・・

では^^次回まで・・・

## ゝ初めてのキスゝ（前書き）

皆さんお久しぶりです^^

今回17部目を投稿させて頂きます^^w

だいぶ投稿まで時間をかけていますが、一応やめませんので・・・

完結するまで書きたいと思っています^^；

気長にお待ちください^^

今回のテーマ“初めてのキス”という事にしましたw<w

いろいろな思い出があると思います。まあ初キスは1回なのですが・・・

そこに至るまで・・・とかね^^；

自分の初めてのキスの時を思い出しながら読んでくれると嬉しいです^^

では、どうぞ^^

「初めてのキス」

「病院での生活も、もう終わりかあ」

「もう、なにしんみりしてるのよ、翔君は」

「だってさ」

「はっはあ」

「わかった・・・」

「・・・なんですか・・・」

「病院のナースさんに、うふふなこと期待してたんでしょ!?」

「し、してません・・・」

「いや!!!!」

「翔君なら絶対スケベ心丸出しで想像してたに違いない!!!!」

薫さんは、力強く拳を握りどこか遠くを眺めながら力説していた

「おい薫さん、戻ってキテ!!!!」

・  
・  
・

薫さんがぼくに明かしてくれた日からもう2週間が過ぎた

ぼくの怪我はもう、ほぼ治っている。まあ記憶の方は、今だに思い出せないのだけど

薫さんとは、以前よりも親しくなっている。

今のぼくにとって薫さんは、よきお姉さんの存在なのだ。

まあ、それを本人に言っと・・・

『私は、翔君のお姉さんじゃいや、彼女の方がいい』

駄々をこねる薫さんは、凄く可愛いんだけど・・・

流石大人の女性！！って感じで、迫ってくる・・・

『全く・・・迫り方がエロすぎなんだよね・・・はあ』

『今日だって・・・』

今朝、ふと目を覚ますとぼくの真横に薫さんが居た

まあそれだけなら良いんだけど・・・

『お、おはようございます』

ぼくが、挨拶をしたら『おはよう、翔君』

朝の何気ない会話。

『今日は早いですね!?!』

『うん、ちょっと翔君の寝顔が見たくてね』

薫さんが、さっさと恥ずかしいことを言うので

『いや、寝顔なんて良いもんじゃないですよ・・・』

『そう!?!それ・・・!!!!』

『それに!?!』

『良い物も見せてもらったしね!!!!』

『良いもの!?!』

そういつと薫さんは、ぼくに満面の笑みを浮かべ

『いやゝ、若いつて良いわねゝ、元気で!!!!』

そういつと薫さんは視線を下の方に向けた

寝てる間になったのか、小悪魔のように笑みを浮かべている薫さんの仕業なのか

今となつてはわからないけれど、寝る前にはぼくの体を包み込んでいた毛布

それが今や、どこにいったのかわからないように姿を消していた

そして、その代わりに男の子なら誰しも見るであろつ、朝の光景がそこに広がっていたのだ

『こ、これは・・・ち、違いますって!!!!』

『な〜に〜、何が違うのかな〜!?!』

『まあ、良いじゃない!!!!』

『何事も元気が一番だよ!!!!』

不適に笑う薫さん、ぼくは絶対この人にはかなわないと改めて感じた

『それに、私・・・元気な子、大好きだから!!!!』

『ぶ〜!!!!』

『か、かおるさん・・・もう、勘弁してくださいよ〜!!!!』

『あはは、ごめんごめん、でも、やっぱりそういう翔君、可愛い!!』

『はあ、全く薫さんは・・・』

『へへ』

薫さんの目からはただならぬ妖艶さを感じたんだ

・・・

「ああ!...!ごめんごめん、想像してたら興奮しちゃって」

「もう、薫さんの方がよっぽどスケベじゃないですか!...!」

「うんゝ、なにゝ!？」

「女がスケベじゃいけないって言うのゝ!？」

「いや、そういう意味じゃ・・・」

「一つ言っておきますが、私はスケベじゃないの・・・」

「変態なの!!!」

「・・・」

「なに!？」

「いや、それって自慢？」

「そつよ!?!?!悪い?」

「・・・薫さん」

「なにより、良いじゃない変態でも」

「そういう女の人・・・嫌い？」

「・・・嫌いじゃないですけど、はい」

「むしろ、大好きでしょ!？」

「・・・はい、大好きです」

「ははは、素直でよろしい」

「ねえ、翔君・・・」

「なんですか？」

「私のこと、本当に玩具にして良いからね!!!!」

「・・・えっと、それはどういう・・・」

「もう、わかってるくせに。」

「翔君の、エッチ・・・」

「・・・えっと・・・エッチと言われてまでも」

「翔君が望なら、私は翔君の物!!!!」

「あは・・・あははははあ」

「・・・また、考えときます・・・」

「うん、待ってるね。翔ちゃん」

「はあ、そういう時だけその呼び方」

「しかもそっち系の話になったら俄然テンションあがりますよね！？」

「ふん！いいですよ、エロエロ魔神で・・・」

「いや・・・そこまで言ってますで・・・」

「ねえ、翔君」

「はい！？どうしたんですか？」

「まだ、記憶は思い出せないんだよね？」

「・・・そうですね、全くです」

一帯に広がる静寂

ぼくは、何を言ったら良いかわからなかった

「・・・でも」

「でも、良いんです・・・」

「え!？」

「確かに今のぼくには、記憶はないですけど・・・」

「寂しくはないですよ」

「翔君……」

「だって、支えてくれる大切な人がそばに居ますから」

ぼくは、薫さんの方へ視線を向け満面の笑みで応えた

「……」

薫さんは、何も言わなかった

ただ、ゆっくりとぼくに近づいてきてぼくを優しく抱きしめてくれたんだ

ぼくは、この温もりが心地よくもつと感じていたと思っていた

ぼくも、薫さんの背中に腕をまわし、彼女を抱きしめてあげる

薫さんも、それを確認するとより強く抱きしめてくれる

それは、もう阿吽<sup>あうん</sup>の呼吸のようになっていた

彼女が、ぼくに涙を流しながら語ってくれた真実

あの日、ぼくは初めて薫さんを抱きしめた

彼女は驚きの顔を見せていたけど、ぼくの行動に応えてくれた

あの日、彼女はしきりに謝っていた、でも、ぼくにはあまり実感が  
わかなかった

彼女が言う“葵”という女性、ぼくとはどんな関係だったのか

薫さん曰く、ぼくの大切な人らしいのだけど・・・

『葵・・・さんか・・・』

「ねえ、翔君・・・」

「今、葵さんの事考えてたでしょ!？」

「え・・・そんなことは・・・」

「ううん、良いの・・・」

「薫・・・さん？」

「そりゃ、悔しいよ、その人に負けるのは・・・でも!!」

「今は、今だけは、翔君の傍に居れるから」

「薫さん」

「・・・」

「薫さん・・・ごめんね」

ぼくは、薫さんの肩に両手を添え少し距離をとった

そしてまた、ゆっくりと近づいていく

「え!!翔君!!!!」

「・・・ひゃ!!!!」

「へへ、しちゃいました。」

ぼくは、薫さんのほっぺたにキスをした

「・・・もう、翔君は」

薫さんの眼には、うつすらと涙があふれていた

「でも・・・なんで、ほっぺたかなあ」

「あははは」

「唇には……してくれないの!？」

「……」

「あはは、ごめんごめん、ちょっと調子にのっちゃったね」

「あはは、何言ってるだろう……私……」

「……きゃ!!!翔君……」

ぼくは再び薫さんを抱きしめた、強く強く

「……しょうくん、ちょっと痛い……」

「あー!!」めんなさい」

彼女に言われてぼくは、力を緩めた

「・・・どうしたの!？」

「ううん、なにもない・・・ただ・・・」

「ただ!？」

「なんか、急に寂しくなっちゃって・・・」

「そっかぁ・・・」

薫さんもまた、優しくぼくを抱きしめてくれる

ぼくは、この日薫さんに甘えっぱなしだった

・  
・  
・

「薫さん、どうしてぼくなんですか？」

数日があったある日、ぼくは以前から聞きたかったこと  
そして伝えたかった事を話した

「え！？なんのこと？」

「いや、薫さんならもっと良い男の人いるでしょ？」

「もう、フリーになったんだし、他に恋人作れば良いじゃないですか？」

「・・・違う」

「何が違うんですか？」

「私はもう、恋、してるの・・・」

「あなたにね、だから、他の男なんていらないの」

「・・・でも、ぼくは・・・」

「いいの、最初はねそんなに想ってなかったの、翔君のこと」

「え！？」

「そう、まだ翔君の記憶があったときの話なんだけど」

「初めて会った時、“この人は”ってな感じで何かを感じたの」

「でもね、私には旦那が居たから、ちょっとからかったの」

「でもだんだん翔君と話してたら、何か胸が苦しくなってきたね」

「久しぶりだったんだよ」

「恋ってこんなにも切ないものだったのだった」

「翔君への想いに気づいてからは大変だったんだよ」

「ふふふ、もうね中2の女子だよ、ホント」

「翔君に会いたい、翔君の顔が見たい、話をしたい、触れたい」

「乙女だったんだよ・・・」

「でもね、君は全然私の方を見てくれなかった」

「君はあの当時、付き合っではないって言ってたけど」

「気になる女の子が居たの、それが」

「「葵さん」」

「そう、葵さん、まあ私もその人がどんな人か知らないんだけどねえ」

「何だか悔しくてね、そんな時翔君が事故にあっただよ」

「その後は言うまでもないと思うけど」

「君に恋人だったって嘘をついて、甘えてたのそれに」

「記憶がないなら、作れば良い、そんなバカな考えが頭に浮かんでたんだ」

「そっかぁ・・・」

「・・・翔君、まだ・・・あるんだ」

「え!？」

「隠してること!?!?!」

「・・・」

「翔君の携帯から葵さんの番号がなくなってるの、知ってるよね?」

「うん  
「・・・」

「それも、私が消したのメールと一緒にね」

「・・・やっぱりね」

「え！？怒らないの！？」

「うん？うん、怒らないよ」

「どうして？大事なものを私は勝手に消しちゃったんだよ・・・」

「確かに、大切なものかもしれない、でもね、もう良いんだよ」

「薫さんは、あの日ぼくの前で涙を流したよね」

「あの日、思っただ」

「薫さんも、苦しんだんだって」

「そう考えたら、怒る気がなくなっただよ」

「ううん、そもそも、本当にぼくは薫さんの事怒ってなんていなかったんだよ」

「翔君・・・」

ぼくは、薫さんの方へ体を向けた

「薫さん、本当にぼくで良いんですか？」

「・・・どうしたの？」

「このままぼくは、記憶が戻らないかもしれない」

「もし、戻っても葵さんの元に行くかもしれない」

「それでも良いんですか？」

「それに、薫さんのこと恋人として見れないかもしれない」

「それでも良いんですか？」

素直な気持ちを彼女にぶつけた、どうかえってくるかわからなかったけど

これだけは、伝えないといけないと思ったから

「・・・翔君、さっきも言ったけど、私は今恋をしているの」

「この恋は、私にとっても暖かく幸せな気持ちにさせてくれるの」

「・・・でも・・・」

「じゃあ、これじゃ・・・ダメ!？」

「え!!薫さ・・・」

ぼくの唇に感じる柔らかな感触と温もり

彼女とのキスは、初めてのキスを思い出すかのように、軽いキス、でも

その中にも、凄く温かみを感じるキスだった

「へへ、もう我慢できないから私からしちゃった」

そういうと、ぼくの顔をまじまじと見つめこう言った

「私は、翔君のことが・・・大好きです。」

彼女は、真っ赤になった顔を隠すように、ぼくから視線をそらせた  
そんな、彼女がとても愛おしく、可愛かった

「薫!!」

「え!!」

普段聞きなれない、自分と呼ぶ声に驚きぼくの方を見る

「・・・薫さん、ありがとう・・・」

今度は深く、愛のこもったキスをした

彼女はビクリしてたけど、拒むことはなく、ぼくを受け入れてくれたんだ

ゝ初めてのキスゝ（後書き）

お疲れ様でした^^

どうでしたでしょうか!?

最初、悪女と思った方、今回の薫さんはどうでしたでしょうか?^^

そして、初キスの事を思い出して頂けたでしょうか?^^

いろいろな想いがあると思いますが^^

今回はここまでにします^^

では、次回まで^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0277n/>

---

忘れられない思い出

2010年10月29日13時13分発行